

保險者ノ負擔スヘキ危險ノ範圍ハ專ラ契約ノ趣意即當事者間ノ意思ニ基キ判定スヘキモノナ
 ル而已ナラズ茲ニ海上保險法ノ原理ヨリ之ヲ論スルモ保險者ハ待約ヲ取結フニ非サレハ航海
 ニ關スル不測ノ事故ニ因リテ生スル一切ノ損害ヲ填補スルノ責任ヲ負擔スルモノナレトモ被
 保險物ノ性質殺疵若クハ荷造ノ不完全ヨリ生スル損害ノ如キハ航海ニ關スル不測ノ事故ヨリ
 生シタル損害ト云フヘキモノニアラザレハ保險者ノ負擔スヘキ限リニアラサルモノトス況ン
 ナ其荷造ノ不完全ハ被保險者ノ懈怠ニ基因シタル場合ナルニ於テオヤ然ラハ則チ原院カ其判
 決理由中第一號證ニ依リハ被控訴會社ハ擔保スル所ノ危害損失ハ同證第八項ニ掲ケル風波
 火災却掠盜難投荷船長及船員ノ惡行不注意等ニ原因セルモノニ係リ荷物ノ不完全ニ其因セル
 危害ノ如キハ其中ニ包含スルモノニ非ラサルヤ明ガナル云々ト判定シタルハ洵トニ其當チ
 得タルモノニシテ瑕疵ハルヲ視ス要スルニ本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法
 第四百五十二條第一項ニ依リ之ヲ棄却スル所以ナリ

〇地所取戻請求ノ件

明治三十一年十二月二十二日第二民事部判決

○判決要旨

一 家族タル幼者カ財産ヲ有スル場合ニ於テ特別ニ後見人ヲ設定セサル限りハ其
 家ノ戶主タルモノカ之ヲ管理スルハ係争地賣買當時(明治二十二年)ニ於ケル一
 般ノ慣例ナリ(判旨第二點)

第一審 仙臺地方裁判所古川支部 第二審 宮城控訴院

上告人 落合徳三 訴訟代理人 城 敷 馬

被上告人 本多タマヨ

右當事者間ノ地所取戻請求事件ニ付宮城控訴院カ明治三十一年六月六日言渡シタル判決ニ對
 シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲナシタリ

判 決

理 由

本件上告ハ之レヲ棄却ス
 上告論旨第一點ハ原判決中本訴係争地ノ賣買ニ被上告人ノ祖父ニシテ戶主タル傳吉ノ干與セ
 サルノ一事ヲ以テ直ニ此賣買ヲ無效ノモノトシテ上告人ヲ敗訴ニ歸セシメタルハ不法ノ裁判
 ナリ凡ソ原告者ノ請求ヲ至當ナリト判定スルニハ必ス其請求ノ原因トシテ主張スル所ノ至當

家族タル幼者ノ財産管理人

ナルコトヲ判示セサル可カラズ今本訴ニ就テ之ヲ按スルニ被告上告人ハ實ニ原告者ナリ其請求ノ基因トスル所ヲ關スルニ原判決ハ第一審判決ノ事實摘示ヲ引用シタルヲ以テ更ニ第一審ノ判決書ニ徵スルニ大要左ノ如クナリトス曰ク本訴ノ地所ヲ上告人ニ賣渡シタルハ全ク他人ノ不正行爲ニ出テタルモノナリト然ラハ則チ原告ニ於テ被告上告人ヲ勝訴者タラシムルニハ必ス其基礎ヲ是認スル旨ノ判定ヲ與ヘサル可カラズ是レ自明ノ理ナリト然ルニ原判決ハ縷々數千言ノ説明ヲ與ヘタルモ皆上告人ノ主張ヲ排斥スルニ止マリ原告者タル被告上告人ノ主張ノ至當ナル所以ヲ判示セス却而唯本件地所ノ賣買ハ被告上告人ノ祖父タル戸主ノ干與セサルカ爲メニ無効ナリト説示セルノミ是レ元來原告者ノ主張以前ノ事ニ屬シ本件ノ訴旨ニ合致セサル既明ニシテ本訴ノ地所賣買カ果シテ被告上告人主張ノ如ク不正行爲ニ屬スルヤ否ハ今日尙ホ未定ノ問題トシテ殘存スルモノナリ原院カ此問題即チ原告者ノ主張ニ就テ當否ヲ判定セス前陳ノ如キ論斷ヲ以而上告人ニ敗訴ノ判決ヲ與ヘタルハ訴訟判定ノ大則ニ違背セル不法ノ裁判ナルヲ免レスト云フニアリ

○依テ按スルニ凡ソ判決ニハ本來事件ノ關係ニ於ケル各當事者ノ事實上ノ主張及ヒ爭點等ヲ摘示シタル上先ツ以テ原告人タル者ノ主張スル事項ヲ眞實ナリト認メ得ヘキモノナルヤ否ヤノ判斷ヲ下シ由テ以テ其曲直ヲ斷定スルヲ通例トスレトモ時トシテハ被告人ノ防禦方法ニ對シ判定ヲ與フレハ之ヲ以テ足レリトシ敢テ上告人ノ主張セシ請求ノ原因ニ付キ説明ヲ爲サハルモ自ら其曲直ノ定マルヘキ場合アリ而シテ今本件記録ヲ調査スルニ抑モ本訴係爭地ハ元被告上告人本田「タマヨ」ノ所有ニ係リシコト及ヒ上告人先代落合伊助カ之ニ

買受ケタル當時即チ明治廿二年一月ニ在テハ「タマヨ」ハ僅カニ二歳餘ノ幼兒ナリシコトハ當事者間ニ爭ナキ事實ナリ果シテ係爭地ハ元「タマヨ」ノ所有ニ係リシニ其實買ノ當時「タマヨ」ハ二歳餘ノ幼兒ナリシ事實ニ爭ナシトスレハ其意思能力ナイナカリシ幼者ノ名義ヲ以テ爲シタル地所賣買ハ通常無効タルヘキモノトス故ニ斯ル事實ニシテ爭ナキ場合ニ於テハ原告者タル被告上告人ハ別ニ舉證ノ責任ナク却テ其地所賣買ヲ有效ナラシメントスル被告即チ上告人コソ之カ確證ヲ舉ケサルヘカラス然ルニ上告人ハ明治廿二年一月先代伊助カ係爭地ヲ買受ケタル頃末ハ當時「タマヨ」ト同居ノ伯父伊藤喜市耶ヨリ頼談ニ依リ是ニ對シ乙第一號證ノ如ク「タマヨ」ノ名義ヲ以テ該地ヲ買受ケ乙第三號證ノ如ク登記ヲモ經タルモノニ係リ而シテ其賣買一切ノ手續ヲ爲シタル喜市耶ハ伊藤傳吉ノ家族ナレトモ其實伊藤家ノ主宰者ニシテ殊ニ係爭地ハ喜市耶ニ於テ保管セシモノナレハ該賣買ハ有效ナリト云フ是レ上告人カ主トシテ主張セシ防禦ノ方法ナリキ然ラハ本件ニ於テハ乙第一號證ナル地所賣買ノ有效ナルヤ否ヤハ主要ノ爭點ニ至リテ存ス故ニ無根底タル事項ニ對シ判斷ヲ與フレハ他ノ枝葉ニ關スル事項ハ自ら知了セラレヘキモノナリ茲ニ於テテ原判決ハ其理由ノ冒頭ニ「被告上告人ニ於テ係爭地ハ被控訴人ノ先代伊助ニ在テ控訴人ノ叔父伊藤喜市耶ノ頼談ニ應ジ乙第一號證ノ如ク同人ヨリ之レヲ買得シタルモノニシテ當時喜市耶ハ伊藤傳吉ノ家族ナリト雖モ實際伊藤家ノ主宰者ナルヲ以テ云々乙第一號證ノ賣買ハ適法ノ賣買ナリト主張スト雖モ乙第一號證賣買ノ當時控訴人ハ僅カニ二歳餘ノ幼孤兒ニシテ法律行爲ヲ爲スノ能力ナキハ固ヨリ論ヲ俟タス而シテ當時其戸主ハ控訴人ノ祖

父伊藤傳吉ニシテ控訴人及ヒ控訴人ノ叔父伊藤喜市耶ハ其ニ其家族(乙四五號證)ナレハ此場合
 控訴人ノ法律上代理人ハ實ニ此傳吉ヲ措テ他ニ之レアラサルナリサレハ係争地ノ賣買モ亦此
 傳吉ニ依リテ代表セラレサルヘカラス然ルニ乙第一號證ノ賣買ニハ傳吉ノ干與シタル事實ヲ
 認ムルニ足ルヘキモノナシトシ該證ノ賣買ヲ無効ナリトス下説明シ則乙第一號證ハ不
 能力者ノ名義ヲ以テ爲シタル地所賣買ニ係リ相當ノ法定代理人ノ干與シタル事實ヲ認ムルニ
 足ルヘキモノナシトシ該證ノ賣買ヲ無効ナリト斷定シタル筋合ナレハ此場合ニ於テハ被上告
 人ノ主張セシ不正行爲云々ニ對シテハ別ニ説明ヲ爲サ、ルモ敢テ不法ノ裁判ナリト云フナ得
 ス故ニ上告其理由ナシ

其第二點ハ原院ハ當時其戸主ハ控訴人ノ祖父ニシテ控訴人ノ法律上代理人ハ實ニ祖父ヲ措テ
 他ニ之レアラス故ニ其干與セサル賣買ハ無効ナリト判定シタルハ不法ノ裁判ナリ原判決ノ基
 本トスル所ハ實ニ家族ノ幼者ハ戸主ノ法律上代理人タリト云ニ在リ然レトモ是レ甚々其當
 ナ失セリ蓋シ本訴地所ノ賣買ハ明治廿二年ニシテ當時明民法典ノ完備スル無シト雖モ從來ノ
 慣行法ニ依テ考フルニ若シ被上告人ノ爲メニ何人カ後見人タルヘキヤトノ問題ナリセハ原院
 ノ理論ノ如ク戸主カ後見人タルコト至當ナルヤモ知ル可カラス然レトモ如何セン本訴ニ於ケ
 ル問題ハ何人カ後見人ト爲ルヘキヤトノ問題ニ非ラス當時ノ製度ニ於テ後見人ハ必ス官廳へ届
 出テサル可カラス而シテ被上告人ノ爲メ當時未ダ管テ後見人ノ届出ヲ爲シタル事實ハ本訴ニ
 於テ見ルヘキ所ナシ家族ノ幼者ハ戸主カ後見人ト爲ル可シトノ理ハ或ハ之レアララン然レト

判旨第二點

家族ノ幼者ハ後見人ニ非サル單純ノ戸主ニ依テ代表セラレ可キモノトスルニ至ツテハ未ダ其
 當チ得ス案スルニ戸主ハ家族ノ後見人タルヘシトノ理論ヲ附會シテ強テ戸主ハ家族ノ代表者
 ナリト斷定シタルハ不法ノ一ナリ且夫レ假リニ數百歩ヲ讓リ原判決ノ理論其當チ得タルモノ
 トスルモ是レ被上告人カ全ク傳吉ノ家族タルコト斷定ノ事實タルトキニ限ルハ勿論ナリ原院
 ノ辯論調書ニ因テ考フルニ被上告人ハ終始主張シテ曰ク控訴人ノ父母ハ傳吉ノ家ヨリ分家セ
 リ下然ラハ則チ被上告人カ果シテ傳吉ノ家族タルヤ否ヤハ少クモ未定ノ事實タリ然ルニ原院
 カ之レヲ以テ既定ノ事實ノ如ク想定シテ斷定ナサス此想像的事實ヲ根據トシテ理論ノ判定
 ナ適用シタルハ益不法ナリト云フニ在リ○依テ係争地賣買ハ當時ニ適リ其頃ノ慣例ヲ按スル
 ニ凡ソ一家ノ家族タル幼者カ財產ヲ有スル場合ニ於テハ特別ニ後見人ヲ設定セサル限リハ其
 家ハ戸主タル者カ之ヲ管理スルチ一般トセリ故ニ原判決ハ其理由中ニ當時其戸主ハ控訴人ハ
 叔父伊藤傳吉ニシテ控訴人及ヒ控訴人ノ叔父伊藤喜市耶ハ共ニ其家族(乙四五號證)ナレハ此場
 合控訴人ノ法律上代理人ハ實ニ此傳吉ヲ措テ他ニ之レアラサルナリ云々ト判定シタルモノナ
 レハ敢テ不法ノ裁判ト云フチ得ス就中其家族トアル下ハ插孤中ニ乙四五號證ヲ引用シタルモ
 ハハ此等ハ戸籍ハ謄本ニ據リタマヒ及ヒ伊藤喜市耶ハ共ニ伊藤傳吉ノ家族タルコトヲ推定シ
 以テ擬ハ判定シタル筋合ナルコト自ラ明カナレハ本論旨モ亦上告其理由ナシ
 以上説明ノ如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百卅九條第一項ノ規定
 ニヨリ之棄却スルモノナリ

○貸金請求ノ件

明治三十一年抗告第五十三號
明治三十一年十二月十五日第一民事部決定

○決定要旨

一 控訴院ノ與ヘタル新開席判決ニ對シ不服ナルトキハ上告ヲ爲スハ格別故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

原審 長崎控訴院

抗告人 豆田傳七 訴訟代理人 島山重明

右抗告人ト豆田新平間ノ貸金請求事件開席判決故障申立ニ付明治三十一年十一月二十六日長崎控訴院民事部裁判長カ與ヘタル故障却下ノ命令ニ對シ抗告ヲ爲シタリ

決定

本件抗告ハ之ヲ棄却ス

理由

抗告ノ理由ハ長崎控訴院カ與ヘタル明治三十一年十一月七日ノ缺席判決ニハ明治三十一年三月十六日開席判決ヲ言渡シタル處控訴人ヨリ故障ヲ申立タルニ付明治三十一年十一月七日

前第十一時口頭辯論ヲ開キタルニ控訴人ハ其期日ニ再ヒ出頭セサルヲ以テ被控訴人ノ申立ニ因リ民事訴訟法第四百八條第二百六十三條同第五百一條ニ依リ故障ヲ棄却スル旨記載有之候ヘトモ右十一月七日ノ口頭辯論ハ三月十六日ノ開席判決ニ對スル故障ニ因リ開カレタルモノニアラス三月十六日ノ開席判決ニ對スル故障ノ爲メニハ明治三十一年六月十五日口頭辯論開延有之抗告人ノ訴訟代理人モ出廷ノ上一旦終結相成リタルモ更ニ辯論ノ再開ヲ命セラレ其再開期日ヲ明治三十一年十一月七日ト定メラレ其期日ニ於テ抗告人ハ開席シタル次第ナリ左レハ抗告人ハ故障ヲ申立タル當事者カ辯論期日ニ出頭セザリシニハアラスシテ對審辯論後再開期日ニ開席セシモノナレハ民事訴訟法第二百六十三條ニ該當スヘキ場合ニ無之然ルニ同法條ニ因リ故障却下セラレタルハ法文ニ適合セサル命令ニシテ服從シ難キ所以ナリト云フニ在リ
○仍テ案スルニ明治三十一年十一月七日ノ開席判決ハ長崎控訴院カ民事訴訟法第二百六十三條第一項ノ規定ニ依リ與ヘタル新開席判決ナルコトハ本案抗告記録ニ於テ明カナリ而シテ同條第二項ノ規定アルヲ以テ若シ該新開席判決ニ對シ不服アラハ上告ノ道ヲ採ルハ格別故障ヲ申立ルコトヲ得サルモハナリ然ルチ抗告人ハ同條第二項ノ規定ニ背反シ明治三十一年十一月二十一日該新開席判決ニ對シ故障ノ申立ヲ爲シタリ故ニ長崎控訴院民事部裁判長カ明治三十一年十一月二十六日民事訴訟法第二百五十七條ニ照シ該故障却下シタルハ適法ニシテ本抗告ハ其理由ナキモノトス依テ主文ノ如ク決定スル所以ナリ

○地不正賣買取消請求ノ件

明治三十一年第三十三號
明治三十一年十二月十九日第二民事部判決

○判決要旨

一 戸主カ隠居ヲ爲ス場合ニ於テ特ニ不動産ノ一部ヲ留保シテ依然自己ノ所有ト爲シ得ルハ民間ノ慣行ヨシテ裁判例ニ於テモ之ヲ是認ス

第一審 浦和地方裁判所

第二審 東京控訴院

上告人 清水慶藏

訴訟代理人 磯部四郎

被上告人 清水藤五郎

外一名

右當事者間ノ地所不正賣買取消請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十一年五月二十七日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告諭旨ハ本件係争ノ地所ハ上告人ノ先代治右衛門カ戸主タリシ當時即チ明治十七年ノ頃事故アリテ被上告人ノ一名前田清三郎ノ所有名義ニ移セシト雖トモ其實權ハ依然上告人家ニ在

在シタルコト及ヒ假リ名義人タル前田清三郎カ治右衛門ノ隠居後上告人カ家督相續チ爲シタル後チ前田清三郎ノ一存チ以テ被上告人清水藤五郎ニ其代價讓渡ヲ爲シタルコトハ争フヘカラサル事實ニシテ原判決ノ認定モ亦此外ニ出テス他ナシ原判決ニ於テ先代治右衛門カ明治二十年一月二日ニ隱居シ上告人ハ同年同月十五日ニ家督相續チ爲シ被上告人藤五郎ハ同年同月二十五日ニ被上告人清三郎係争地所ヲ讓受ケタル事實ニ明記シアレハナリ而シテ我カ家督相續ノ原理慣行ニ據ルモ又其慣行ヲ探リテ以テ新法ノ制度ト爲シタル民法第九百八十六條ノ規定ニ據ルモ家督相續人ハ相續開始ノ時ヨリ前戸主ノ有セシ權利義務ヲ承繼ス可キ筈今不易ノ定理ナリ然ラハ係争地所ノ實權カ先代治右衛門ニ依然存在シタル事實ヲ原判決ニ於テ確知シタル以上ハ其實權ハ先代隱居ノ時即チ明治二十年一月二日ヨリ當然上告人隠藏ニ移リタルモノナルコトハ争フヘキニアラス故ニ假リ名義人タル清三郎ニ於テ其實權ノ所屬ヲ動カス行爲ヲ遂クルカ爲メニハ實權者タル上告人ノ承諾ヲ得サル可カラズ然ルニ上告人ハ其承諾ヲ與ヘタルコトナキヲ以テ清三郎ト藤五郎トノ間私ニ爲シタル係争地ノ假裝賣買ハ全然一無効ナルコト論ヲ待タス之レ上告人ノ本訴ニ及トタル次第ナルニ原審ハ前戸主ヨリ相續人ニ明カニ讓渡サルル財産ハ隠居ノ特有財産ナリト云フニ如キ牽強附會ノ理由ニテ上告人ノ主張ヲ排斥セリ不法モ亦甚ダシト爲ス蓋シ我カ慣行ニ於テモ前戸主ノ一身ニ專屬スル位階年金若クハ隱居面下稱シテ明カニ一身ノ爲メニ貯存スル財産ノ如キハ家督相續ノ效力ニ因リ相續人ニ讓ラサルハ蓋ヨリナリト雖モ原審ノ如ク前戸主ヨリ明ラカニ讓ラサル財産ハ悉皆隠居ノ特有ト推

定スト云フニ至リテハ我家督相續ノ舊慣ヲ全ク無視シ不法ニ其制度ヲ一變スルモノニシテ家督相續ニ關スル法則ヲ適用セサル違法アル裁判ナリト云フニ在リ。○按スルニ家督相續人ハ相續開始ノ時ヨリ前戶主ハ有セシ權利義務ヲ承繼スルハ一般ハ慣行ナルコトハ上告論旨ハ如シト雖モ前戶主カ死亡セシテ家督ヲ其相續人ニ讓渡シ隱居ヲ爲ス場合ニ於テ特ニ不動産ハ一部ヲ留保シテ依然自己所有ト爲シ得ルハ我國民間ハ慣行ニシテ裁判例ニ於テモ亦其慣行ヲ是認スル所ナリ若シ其慣行ヲ是認セサルニ於テハ隱居者ハ其隱居後自由ニ生活ヲ爲シ其餘命ヲ樂マスコト能ハサルノ不幸ニ陷ルル虞アレハナリ乃チ原判決ヲ查閱スルニ前畧本訴ノ地所ハ治右衛門(上告人先代)カ隱居ノ際特別ニ自己ノ所有分ト爲シ之ヲ控訴人(上告人)ニ相續セシメサリシヤ推シテ知ル可シ故ニ治右衛門ハ其隱居以來控訴人家督相續後モ引續キ該地所ヲ所有シ居リシモノト認メサルヲ得サルヲ以テ明治二十年一月二十五日ニ至リ前腹ノ方法ニ依リ清三郎(被上告人)ヲ經テ藤五郎(被上告人)ニ之ヲ讓與シタルハ其權内ノ行爲ヲ爲シタルモノニシテ有効タルコト勿論ナリ要スルニ控訴人ハ本訴地所ヲ所有スヘキ權利ヲ有スルモノト認ムルコトヲ得サルヲ以テ本訴ノ請求ハ其當ヲ得ス云々トアリテ事實承審官タル原院ハ其職權ヲ以テ上告人先代治右衛門カ隱居ヲ爲スニ當リ特ニ本訴地所ヲ自己ノ所有分ト爲シ之ヲ留保シ相續人タル上告人ヲシテ之ヲ相續セシメス隱居後引續キ所有シ其後ニ至リ被上告人清三郎ノ手ヲ經テ之ヲ被上告人藤五郎ニ讓與シタルモノナリト事實ヲ認定シ以テ上告人ノ本訴請求ヲ排斥シタルコト明カナリ故ニ原判決ハ家督相續ニ關スル法則ヲ適用セサル違法ノ裁判ナリト云フヲ

得ス

以上説明ノ如ク本件上告ハ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ之ヲ棄却スヘキモノトス

○貸金請求ノ件

明治三十一年第四百十八號
明治三十一年十二月二十日第一民事部判決

○判決要旨

一 明治十八年內務省甲第二十號達ハ實體上有效ナル公證ノ存スル場合ニ適用シ得ヘキ法則ナリ(判旨第一點)

(參照) 地所賃入書入地物船積書入賃ノ公證ヲ受ケルモノハ出訴期限無之旨令般太政官ノ裁令ヲ經候條爲心得此旨相達候事(明治十八年內務省甲第貳拾號達)

一 形式上戸長ノ公證アルモ無効ノ抵當ニ對スルモノハ實體上公證タル效力ナシ

(判旨第一點)

有效ナル公證○無効ノ抵當ニ對スル公證

有效ナル公證○無効ノ抵當ニ對スル公證

第一審 長野地方裁所 上田支部 第二審 東京控訴院

上告人 中西眞岡 訴訟代理人 田中甲子次郎

被上告人 株式会社 銀行 法律上代理人 前島七兵衛 訴訟代理人 前島七兵衛 澁 啓

右當事者間ノ貸金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十一年二月十九日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨第一點ハ第二審裁所カ未タ托當公證ノ取消サレサル間ハ明治十八年内務省第二十號達ニヨリ出訴期限規則ヲ適用スヘキモノニ非サルヲ以テ被控訴人中西眞岡ノ提出シタル出訴期限ニ關スル抗辯ハ採用スルニ由ナキモノトスト判決セラレタルモ明治十八年内務省第二十號達ハ有效ニ書入公證トナリタル場合ニ適用スヘキモノニシテ本件ニ於テ第二審裁判所カ認メタル如ク抵當書入ノ權能ナキ管理人カ抵當ニ書入レ法律上抵當地所々有主ニ效果ヲ及ボサル無効ノ書入公證ニ適用スヘキモノニ非ス既ニ該布達カ適用セラル可ラサル以上ハ出訴期限規則ヲ適用スヘキハ當然ナレハ右布達及ヒ規則ヲ不當ニ適用シタル違法ノ裁判ナリト云ニ在リ○依テ案スルニ原院ニ於テ上告人(被告)ノ借人ニシテ且共同被告タル塚田啓策ノ管理人ノ資格ヲ以テ啓策所有ノ不動産ヲ抵當トシ本院ノ債務ヲ犯シタル行爲ノ越權ナキ事實ヲ認メ

啓策ニ對スル被上告人ノ請求ヲ却下シタルモノニシテ則チ啓策ニ對スル債權ハ勿論甲第一號證ノ抵當モ無効ナル事實ヲ認定シタルハ原判決上知了スルコトヲ得ヘシ然レハ縱令甲第一號證ニ形式上戸長ノ公證アリト雖モ無効ノ抵當ニ對スル公證ニ過キサレハ實體上ニ於テ公證タル効力ヲ有スル者ニ非ス而シテ明治十八年内務省甲第二十號達ハ固ヨリ有効ナル書入公證ハアリタル場合ニ適用シ得可キ法則ハ本件ハ如キ公證ノ効力ナキ場合ニ適用スルヲ得サルニ依リ上告人ヨリ出訴期限ノ抗辯ヲ提出スルニ於テハ其當否ヲ審査シ裁判ヲ爲サハル可カラズ然ルホ原院決茲ニ出テス抵當公證ノ効力アルカ如ク說明シ以テ該抗辯ヲ排斥シ前掲内務省達ヲ適用シテ被上告人ノ上告人ニ對スル請求ヲ不當ナリト裁判シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル不法ノ判決ニシテ破ヘテ免カレサスモノトス既ニ此點ニ於テ原判決ヲ破毀スル上ハ自餘ノ論告ニ對シ一々說明ヲ與フルノ要ナシ

以上説明ノ如ク本件上旨ハ其理由アルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ從ヒ原判決ヲ破毀シ且出訴期限ニ經過シタルヤ否ヤノ事實ハ原院ニ於テ未タ確定セサルヲ以テ尙其事實ヲ審査シ裁判ヲ爲サシムル爲メ同第四百四十八條第一項ニ依リ本件ヲ原院ニ差戻スモノトス

○麥稗引渡請求ノ件

明治三十一年十二月二十日第一民事部判決

○判決要旨

一口頭辯論調書ニ民事訴訟法第三百三十條第二項第一號乃至第四號ノ事項ヲ掲ケサル場合ニ於テハ必スシモ之ヲ當事者ニ讀聞ケ又ハ閱覽セシムルコトヲ要セ

大(判旨第三點)

(參照) 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ第一自白認諾拋棄及ヒ和解第二明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述第三證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサル者ナルトキ又ハ以前ノ供述ニナルトキニ限ル第四檢證ノ結果第五書面ニ作リ調書ニ添附セサル裁判(判決決定及ヒ命令)第六裁判ノ言渡附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示シタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ(民事訴訟法第三百三十條)

第一審 高松地方裁判所

第二審 大阪控訴院

上告人 大森角平

訴訟代理人 伊東胤一

被上告人 松井音右衛門

右當事者間ノ麥稗引渡請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十一年二月二十六日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一點ハ原判決ニ依レハ甲第一號證カ真正ニ成立シタル事ヲ認メシニモ掲ハラズ麥稗二千七百拾九本ノ内貳千四十二本ハ上告人カ被上告人ヨリ引渡ヲ受ケタリト雖モ本件請求ニ係ル六百七十七本ハ未タ引渡ヲ受ケケスト主張スル上ハ其引渡ヲ受ケタルコトヲ立證セサルヘカラズトシテ上告人ノ請求ヲ排ケタルハ最モ不法ノ判決ナリ何トナレハ甲一號證カ真正ニ成立シタルモノナレハ之レカ記載事項ニ對シ當事者間物品ノ授受アリタルモノナルコトヲ知ルニ足ル而シテ上告人ハ該物件ノ内幾部ハ之ヲ領收セルモ其殘餘ハ未タ領收セスト主張スルモノニ付若シ被上告人ニ於テ之ヲ渡シタリト抗爭スル已上ハ舉證ノ責任ハ被上告人ニアリ況ンヤ本件被上告人ノ抗爭ハ上告人ト全ク取引シタルコトナシトノ抗辯ニシテ原判決ハ既ニ此抗辯ノ不法ナルコトヲ認メツ、アレリ取引關係アツテ引渡スヘキ幾部ノ殘餘ニ付テハ尙ホ其幾部ヲ請求スル權利ヲ證明セサルヘカラストセハ恰モ債權證書ノ殘金ヲ請求シタル場合ニ於テ其殘金ハ未タ受取ラサルコトヲ證明スルニアラサレハ之レカ請求ヲ爲スコトヲ得スト云フ不可思議ノ結果ヲ見ルニ至ラン要スルニ原判決ハ舉證ノ責任ヲ顛倒シタル不法ノ判決ト信スト云フニアルモ○原判決ハ檢眞ノ結果第一號證中三月廿八日及ヒ六月廿八日付記事ノ筆跡ハ被上告人ノ筆記ナリトシ該證ト證人申畑勝次郎木戸定吉ノ證言トニ徴シ本件當事者間ニ於テ麥稗

授受ノ事實アリタルニ相違ナキモ其數量ハ詳カナラスシテ即チ該證ノミニテハ未タ以テ上告人主張ノ如ク果シテ貳千七百拾九本ヲ交付シタルモノアリテ而シテ本件請求ニ係ル六百七十本ノ返戻殘リアリトハ認メ難シト事實ヲ認定シタルモノナレハ原判決ハ上告人所論ノ如キ專斷ノ責任ノ顛倒シタル不法アリト云フヲ得ス

其第二點ハ原判決ニ曰ク被上告人ハ參梓受授ノ事實ナシト抗爭メレトモ證人中如勝日郎木戸定吉等ノ證言ニ依シテ其抗辯ハ虛妄ニシテ其數料ハ詳カナラサルモ受授ノ事實ハ正ニ之レアリタルニ相違ナシ然レト雖モ右ノ專斷ノミニテハ未タ以テ控訴人ノ請求ヲ是認スルニ足ラス云々ト說明シ上告人ハ甲第一號證ノミニテ呈出シ他ノ證據ハ呈出セタルモノ、如ク判定シメリ然リト雖モ上告人ハ甲第四五號證ヲ以テ其數額ヲ證明シアルカ故ニ甲第四五號證カ果シテ適當ニ證明セラレタルヤ否ヤヲ判定セサル限リハ上告人ニ於テ數額ヲ證明セスト判定スルコトヲ得ス然レニ原判決ハ甲第四五號證ヲ無視シ甲第一號證ノミニテ探テ上告人ハ數額證明ノ責任ヲ盡シエトシテ本件ヲ却下シタルハ理山不備ノ判決ナリト云フニ在ルモ○甲第四五號證ハ被上告人ニ於テ之ヲ否認セシモノタルコトハ原院口頭辯論調書ニ載セテ明カナリ而シテ原院ハ上告人ハ主張ノ數量ヲ證明スルノ具ト爲スニ足ラサルモノトシテ之ヲ排シタルモノト自ラ推知セラルヘキニ依テ原判決ハ亦上告人所論ノ如キ不法アツモノト云フヲ得ス

其第三點ハ第二審ノ明治三十年十一月八日口頭辯論調書ヲ觀ルニ被控訴人即チ被上告人ハ甲第一號二號三號四號五號ハ認メス甲第六號號ハ之ヲ認ムト記載シアリ而シテ其調書ノ末尾ニハ

民事訴訟法第三百三十一條第一項ノ規定ヲ缺ク凡ソ事實ノ關係證據ノ認否ハ之ヲ明確ニセサル可ラス同第三百三十五條ハ明カニ之ヲ規シテ曰ク此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴抗告申立申請及陳述ヲ爲シ又ハ證言ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ルヘシト此故ニ該口頭辯論調書ハ同法第三百三十一條第三十五條ニ反スル不法ノ調書ナリ要スルニ原判決ハ訴訟手續ニ關シ違法アルヲ免レシト云フニ在ルモ○民事訴訟法第三百三十一條ハ同法第三百三十一條第二項第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ハ部分ハ之ヲ關係人ニ讀聞セセ又ハ阻覽セシム而シテ其調書ニハ前項ノ手續ヲ破シタルコト及ヒ承諾ナシタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記スヘキコトヲ規定セシムルモノニシテ本件ハ如キ同第三百三十一條第二項第一號乃至第四號ノ事項ヲ揚ケサル場合ニ於テハ心スシモ之ヲ當事者ニ讀聞カセ又ハ阻覽セシムルコトヲ要セサルモノナレハ原判決ハ亦上告人所論ノ如キ不法アリト云ルヲ得ス

上文辯明ノ如ク本件上告人一モ其理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リテ棄却スル所以ナリ

〇預り米請求ノ件

明治三十一年第五百三十九號
明治三十一年十二月二十日第一民事部判決

〇判決要旨

一 權利質ノ債權者ハ裁判所ノ轉付命令ニ依ルカ又ハ法律規則ノ許容セシ場合ニ
アラサレハ其質權ノ目的タル債權ヲ直接ニ取立ツルコトヲ得ス(判旨第一點)

第一審 仙臺地方裁判所古川支部 第二審 宮城控訴院

上告人 高橋 徳右衛門 訴訟代理人 飯田 宏作

被上告人 奥田新次郎

右當事者間ノ預り米請求事件ニ付宮城控訴院カ明治三十年十一月五日言渡シタル判決ニ對シ
上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ宮城控訴院ニ差戻ス

理由

上告第一點權利質權ヲ有スル債權者ハ其質權ノ目的タル債權ノ上ニ抵當權ヲ獲得スルニ止マ
リ目的タル債權者ニ代リテ其債務者ニ對シ直接債權者タルノ資格ヲ得有スヘキモノニアラス
故ニ債權讓渡ノ承諾又ハ債權轉付命令若クハ法律ノ許容アルニアラサレハ目的タル債權ヲ其
債務者ニ向テ直ニ行使スルヲ得ス然ルニ原判決其質權ノ目的ヲ所持スル控訴人對シ直接其全

部ヲ取立ツルコトヲ得ト判斷シタルハ不法ノ判決ナリト云フニ在リ〇因テ原判決文ヲ查閱スル
ニ前畧既ニ被控訴人ニ於テ甲第二號證ヲ其債權ノ擔保トシテ之レヲ受領シタル以上ハ所謂債
利質ナルモノハ設定アリタルモノト解釋セサルヲ得ス被控訴人ハ其質權ナルモノヲ有セリ即
チ其質權ノ目的物ヲ所持スル控訴人ニ對シ直接其全部ヲ取立ツルコトヲ得云々ト説明シアリ
然レトモ原院ニ於テハ本按訴訟審理ノ當時ニ在テハ未タ權利質ヲ有スル債權者ハ其質權ノ目
的タル債權ヲ直接ニ取立ツルコトヲ得ヘシトハ法律規則等アラサルハ故ニ上告論旨ハ如ク
裁判所ノ轉付命令又ハ法律規則ハ許容セシ場合ニアラサレハ當然債權者カ其質權ノ目的
タル債權ヲ直接ニ取立ツルコトヲ得ヘキモノニアラサルナリ然ルチ原院カ前畧ノ如ク權利質
有スル債權者ハ何レノ場合ニ於テモ當然其質權ノ目的タル債權ヲ直接ニ取立ツルコトヲ得ル
モノト判定シタルハ違法ニシテ上告論旨ハ其理由アリ既ニ此點ニ對シ原判決ヲ破毀スヘキモ
ノタルヲ以テ他ノ上告論旨ニ對シ逐一説明ヲ爲スノ要ナシ
以上ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項第四百四十八條第一項ニ照シ主文ノ
如ク判決セル所以ナリ

○訴訟費用確定決定ニ對スル抗告ノ件

明治三十一年十二月二十一日第二民事部決定

○決定要旨

一 民事訴訟費用法第十五條ニ本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ルトアル
ハ同法ニ全ク定メサル所ノ必要ノ費用ヲ指シタルモノトス

(參照) 本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ル(民事訴訟費用法第十五條)

原 審 東京控訴院

抗 告 人 福原德兵衛 訴訟代理人

外四百七十二人

宮古 岡本 岸村 吉永 石原 岡本 江原 木登 石原 木登 石原 木登

本抗告人福原德兵衛及ヒ古川清藏外三名ノ訴訟伏理人宮古啓三郎ハ明治三十一年一月二十二日東京控訴院ニ於ケル抗告裁判所カ宣告シタル決定ニ對シ更ニ抗告ヲ爲シタリ

決 定

原抗告裁判所ノ決定主文ハ之レヲ廢棄シ更ニ本院ニ於テ決定ヲ爲ス左ノ如ク
前抗告人ノ抗告ハ之レヲ棄却ス
抗告ニ關スル訴訟費用ハ總テ前抗告人共ニ於テ之レヲ負擔ス可シ

理 由

本抗告人福原德兵衛ノ抗告論旨第一二點及ヒ古川清藏外三名ノ訴訟代理人宮古啓三郎ノ抗告論旨第一點ハ之レヲ要スルニ本抗告人等ハ前抗告人等ヨリ支拂ヲ受ケヘキ訴訟費用額確定ノ申請ニ基キ木更津支部ニ於テハ明治三十年十一月九日其費用額ハ金千七百七十八圓八十三錢ト確定決定セラレタルニ前抗告人ハ之レニ服ス同年十二月十五日東京控訴院ニ宛タル抗告狀ヲ木更津支部ニ提出シ以テ更正ヲ求メタルヨリ同支部ニ於テハ再度ノ考察ニ因リ其抗告理由中第一、第二、第三、第五、第七、第八、第九、第十、第十一、第十四、第十五ノ各項ハ其理由アリトシ同月十八日前決定ヲ變更シ前抗告人等ヨリ本抗告人等ニ支拂フヘキ費用額ハ金千五百五十九圓七十五錢五厘トシテ更ニ確定決定ヲ與ヘラレ其決定正本ハ同月二十八日二十九日ノ兩日ニ前抗告人等ニ送達セラレタリ而シテ木更津支部ハ明治三十一年一月六日ニ至リ前抗告人ノ明治三十年十一月十五日付ノ抗告狀中第四、第六、第十二、第十三、十四項ハ抗告理由ナキ旨ノ意見書ヲ添付シ抗告狀ヲ原院ニ送付シ原院ニ於テハ明治三十年十一月九日ノ決定ニ對スル抗告ヲ受理シ裁判ヲ爲シタル者ナレトモ既ニ同年十二月十八日ノ新決定ニ因リ前ノ決定ハ當然抗告モ亦其効力ヲ失フヘキハ論ヲ俟ス且新決定ハ前決定中ノ一部ノ更正トモ見ルコトヲ得サルモノナリ故ニ原院ハ民事訴訟法第四百六十三條ノ規定ニ依リ右抗告ハ不合法トシテ之レヲ棄却セザルヲ得サルニ之レヲ受理シ前抗告人ノ申立ヲ採用シ原決定ヲ廢棄スト宣言シタルハ法則ニ違背シタル裁判ナリト云フニ歸着ス○然レトモ一件記録ヲ閱スルニ明治三十年十二月十八日木更津支部

ニテ宣言シタル決定ニ依レハ同年十一月九日ノ決定ヲ取消ストノ判旨ナキノミナラス其決定理由中ニハ當支部ハ右訴訟費用額確定決定書添付計算第五項ノ内云々ハ抗告理由アリト認ムルヲ以テ之レヲ更正シ云々トアリテ前決定ノ一部ヲ更正シタル趣旨ナルコト明カナリ抑訴訟費用ハ各其數目ヲ異ニシ固ヨリ分離シ得可キモノナルカ故ニ本更津支部カ抗告理由中其幾部ハ理由アリトテ前決定ヲ更正シ其幾部ハ理由ナキモノトシテ意見書ヲ添付シテ抗告狀ヲ原院ニ送付シタルハ相當ニシテ其項目ノ幾部更正シタルカ爲メ更正ヲ爲サ、ル部分ノ抗告迄消滅ニ歸ス可キ理由ナシ故ニ原院カ該抗告ヲ不適法トセスシテ之ヲ受理シ實體上ニ進ミ裁判ヲ爲シタルハ敢テ法則ニ違背シタルモノニアラス

福原徳兵衛ノ抗告論旨第三點及ヒ古川清蔵外三名ノ訴訟代理人宮宮啓三郎ノ抗告論旨第二點ノ要旨ハ原決定ノ理由第四項ニ於テ訴訟其他ノ書類ト雖モ筆記ノ方法ニ依ラスシテ作製セラレ其實費書記料ヨリモ廉ナルトキハ該書類ノ費用ハ書記料ニ依ラスシテ民事訴訟費用法第十五條ニヨリ其實費ニ依ルヘキモノトス云々從テ爭ニ依ル訴訟ノ費用ハ其印刷費ニ依ルヘキモノナルニ云々トノ理由ヲ以テ本更津支部ノ費用額確定決定ヲ廢棄シタルハ民事訴訟費用法第二條及ヒ第十五條ヲ不當ニ適用シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ○依テ之レヲ案スルニ民事訴訟費用法第十五條ニ本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ルトアル規定ハ即ハテ同法ニ全ク定メサル所ノ必要ノ費用ヲ指シタルモノニシテ本件ノ爭ニ係ル訴訟ノ書記料ノ如キハ同法第二條ニ定メアルヲ以テ其筆記ニ代エ他ノ方法ニ依リ之レヲ作製シテ提出スルトキハ尙ホ右第二條ニ準スヘキモノニシテ同法第十五條ノ規定ヲ適用スヘキ限リニアラス然ルニ原院ニ於テ同法第十五條ヲ適用シ本更津支部ノ費用額確定決定ヲ廢棄シタルハ不法ノ裁判ニシテ此點ニ於テ抗告其理由アリ而シテ原決定中第一項乃至第三項ノ費用ニ對シテハ原決定ノ理由ヲ以テ相當トシ其第四項及ヒ其主文ニ對シテハ民事訴訟法第四百六十四條第一項前段ノ規定ニ依リ之レヲ廢棄シ本院ニ於テ更正ニ裁判ヲ爲スモノナリ

○特別擔保義務履行請求ノ件

明治三十一年十二月二十三日第三百號
明治三十一年十二月二十三日第二民事部判決

○判決要旨

- 一 商事會社ト雖モ民法上行爲ニ付權利義務ノ主體ト爲ルコトヲ得(判旨第一點)
- 一 主タル債務者カ辨濟期日ニ其債務ヲ履行セサルニ於テハ其資力ノ有無ニ拘ハラス保證人ヨリ直チニ辨濟スヘシトノ保證契約ハ有效ナリトス(判旨第三點)

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院
 上告人 共同申立會社法律顧問代出人 中澤與佐衛門 訴訟代理人 丸山名政
 被上告人 倉島庄三郎 野口本之助
 商事會社○民法上ノ行爲○主タル債務者

右當事取問ノ特別擔保義務履行請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十一年五月二十日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決理由

本件上告ハ之ヲ棄却ス

上告第一點ハ法人ハ法律上擬制ニ因ル權利ノ主體ナルヲ以テ其目的ノ範圍内ニ於テノミ人ニ均シキ效力ヲ有ス其目的以前ニ於テハ法律ノ假定ナク全ク人格ナキナリ故ニ法人ハ法律ノ規定ニ從ヒ制限ニ權利ヲ有スルニ過キス上告會社ハ貨物ノ運搬ヲ營業トセルヲ以テ營業目的ノ範圍内ニ於テノミ人格ヲ有ス然ルニ原院ハ法人タル會社ハ民法上ノ行爲ニ付權利義務ノ主體ト爲リ得ヘキハ勿論ナルヲ以テ本件ノ保證契約カ控訴會社ノ目的トセル營業ニ屬セストノ理由ニ依リテ無効ニ歸スヘキ謂ハレナシト說明セラレタルハ法人ノ性質ヲ誤解シ人格ノ範圍ヲ超ヘテ尙ホ法人アリト爲ス不法ノ判決ナリトス從テ控訴會社ハ保證義務ヲ負擔シ辯論期日ニ支拂ヲ爲サトルヘカラスト說明セラレタルハ總テ法則ヲ不當ニ適用シタル違法ノ裁判ナリト云フニ在リ○依テ按スルニ商事會社ハ其會社契約ニ規定シタル營業ノ外濫リニ他業ノ營業ヲ爲スヲ容サルハ勿論ナリト雖モ其營業ニ屬スル行爲ハ外何等ハ法律行爲ヲ爲スヲ得ストハ法規ナキハミナラス又其條理アルナシ何トナレハ商事會社ニ在リ其營業ニ屬セサル民法上ノ法律行爲ヲ爲スコトヲ禁止スルニ於テハ其商業ニ屬スル義務ヲモ完全ニ營ムコト能ハサルニ

判旨第一點

至ラシムレハナリ是レヲ以テ商事會社カ單ニ民法上ノ法律行爲即チ其營業ニ屬セサル保證契約ヲ爲スモ之レヲ無効ナリト云フヲ得ス要スルニ原院ニ於テ法人タル會社ハ民法上ノ行爲ニ付權利義務ノ主體トナリ得ヘキハ勿論ナルヲ以テ本件ノ保證契約カ控訴(上告)會社ハ目的トセル營業ニ屬セストノ理由ニ依リテ無効ニ歸スヘキ理ナシト判定シタルハ結局其當ヲ得タルモノニシテ上告論旨ハ如キ不法アル裁判ニアラス

其第二點ハ抑モ手形ハ金錢ノ支拂ニ替ルヘキ指圖債權ナレハ手形其物ハ一ノ有價物トシテ賣買(即チ裏書讓渡)質入ニ爲シ得ヘキコト指圖債權株式又ハ社債ト異ル所ナシ故ニ今手形ヲ擔保ニ供シタル場合ニハ物上擔保ヲ供シタルモノニシテ保證債務ヲ約シタルニ非ス木件甲第一號證ノ約束手形ヲ提出シタル上告人ト之レヲ受取リタル被上告人間ニ於テハ如何ナル權利關係アリヤト云フニ甲第三號證ノ明文ニ照ナスモ其間權利實ノ關係ヲ生シタルニ過キス原院判所ハ上告人ト被上告人間ニ於テハ千五百圓ノ特別保證債務ヲ約シ其結果甲第一號證ノ約束手形ヲ提出シタルモノナレハ此手形無効トナルモ保證債務ハ依然存在スル旨判決セラレタリト雖モ之レ手形ノ性質及質ト保證債務トノ區別ヲ誤リ不當ニ事實ヲ確定シタルモノナリ若シ原院判所ノ如ク認定スルヲ以テ法理ニ適セリトモ不動產又ハ記名株券ヲ他ニ貸與シテ質入レシメタル者ハ常ニ特別保證債務ヲ負フノ結果ニ陷ルヘシ之ヲ要スルニ本件ノ如ク手形ヲ擔保ニ供シタル場合ハ民法第三百六十二條以下ノ權利實ノ場合ト看做スヘキモノニシテ特別ノ合意ナキ以上ハ保證債務ヲ約シタリト認ムヘカラザル筈合ナリ而シテ其擔保物タル手形カ

無効ニ歸シタルハ恰モ貨物タル株券又ハ地所カ被盡シタルト同一ニ歸スルノ外ナリ上告人ハ
 特ニ保證債務ヲ負フノ責ナキモノナリ以上ノ理由ニ依リ原裁判ハ手形ノ法則ニ背キ實ト保證
 債務トノ區別ヲ誤リ不當ニ事實ヲ確定シタル裁判ナリト思料スト云フニ在リ○依而原判文ヲ
 關スルニ前畧該證即チ日第三號證ニ明示セル如ク甲第二號證ノ金五十圓ノ金千五百圓ハ控訴
 (上告)會社之ヲ擔保シタル債務額ヲ甲第一號證ノ約束手形ト爲シテ之ヲ被控訴人(上告人)ニ交付
 シ主タル債務者ニ於テ辨濟期日ニ辨濟ヲ爲サルトキハ控訴會社ハ其支拂ヲ爲スヘキ保證義
 務ヲ特ニ約諾シタルモノト認ムルニ充分ナリトストアリテ原院ハ其職權ヲ以而上告會社ハ主
 タル債務者カ辨濟期日ニ甲第二號證ノ金五十圓ヲ辨濟セサルニ於テハ右五十圓ノ内千五百圓
 ヲ直ニ支拂フコトヲ特約シ之カ履行ヲ確實ナラシムル爲メ甲第一號證金千五百圓ノ約束手形
 ヲ被上告人ニ交付シタル事實ナリト認定シタルコト明晰タリ然ルニ本上告論旨ハ上告人カ甲
 第一號證約束手形ヲ被上告人ニ交付セシハ金千五百圓ノ債務ニ對シ保證契約ヲ爲シ之レカ履
 行ヲ確實ニセンカ爲メニセシモノニアラスシテ金千五百圓ノ債務ニ對シ單ニ甲第一號證ヲ貸
 後シ權利質ヲ設定シタルモノニ過キストシ以テ原判決ヲ攻擊非難スルモノナレハ原判文ノ趣
 旨ニ副ハサル論旨ニシテ固ヨリ上告理由トナスニ足ラス

第三點ハ上告人カ主タル債務者戸塚平吉等ハ無資力者ニ非ス第二債務者タル控訴人(上告人)ノ
 義務未タ發生セストノ抗辯ニ對シ原院ハ控訴人ハ保證義務ヲ確保スル爲メニ特ニ約束手形ヲ
 被控訴人ニ交付シタル事實并甲第三號證ニ主タル債務者戸塚平吉カ辨濟期日ヲ怠リタル時ハ

判旨第三點

直ニ手形證ノ金額支拂フ旨明記シアル所ニ因リテ見レハ本件ノ保證契約ハ普通ノ保證契約ト
 異ナリ主タル債務者ニ於テ辨濟期日ニ支拂ヲ爲サルトキハ其資力ノ有無ニ拘ハラズ保證人
 タル控訴人ハ其保證セル債務額千五百圓ヲ直ニ被控訴人ニ支拂フ事ヲ特約シタモノト認ムル
 ニ充分ナルヲ以テ云々ト說明セラレタリト雖民法ノ規定ニ依レハ保證債務ハ一般ニ主タル債
 務者ニ對シ請求ヲナシタルモ主タル債權者之ニ應セサルトキニ始メテ保證人ニ對シ保證債務
 ノ履行ヲ求ムルコトヲ得ヘキモノナルニ債務者タル被上告人ハ此等ノ手續ヲ踏ス直ニ保證人
 ニ債務ノ履行ヲ求メタルハ不法タルヲ免レス主タル債務者ニ請求ヲナサスシテ保證人ニ向ヘ
 直チニ債務ノ履行ヲ求ムル場合ハ保證人カ主タル債務者ト連帶シテ責任ヲ負フタルトキニ限リ(民法
 第四百五十四條)其他ノ場合ハ普通ノ保證債務ト見做サ、ル可カラス之レヲ要スルニ特別ノ保
 證債務ナルモノト民法上認メラレサル事項タルニ拘ハラズ上告人ニ特別保證義務アリト認定
 セラレタルハ法則ニ背キ不當ニ事實ヲ確定シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○苟モ公
 ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反セサル限りハ個人間ニ於テ如何ナル契約ヲモ自由ニ爲シ得ヘキハ
 勿論ナレハ特別保證契約ヲ爲シ主タル債務者カ辨濟期日ニ辨濟セサルニ於テハ其資力ハ有無
 如何ニ拘ラス保證人ヨリ直ニ辨償スヘシト約諾スルカ如キハ固ヨリ法律ノ禁示スル所ニ非ス
 故ニ事實承審官タル原院ハ其職權ノ範圍内ニ於テ上告人カ保證義務ヲ確保スル爲メ特ニ約束
 手形ヲ被上人ニ交付シタル事實アリトシ右事實ヲ甲第三號證ノ約旨ニ參照シ以テ本件ハ保證
 契約ハ普通ノ保證契約ト異ナリ主タル債務者カ辨濟期日ニ辨濟セサルニ於テハ其資力ハ有無

如何ニ不拘保證人タル上告人ハ其保證セル金千五百圓ヲ直ニ支拂フコトヲ特約シタルモノハナリト判定シタルハ相當ニシテ上告論旨ハ如キ不法アルモノニアラス

其第四點ハ原判決理由第三三三號證ニ主タル債務者戸塚平吉カ辨濟期日ヲ怠リタル時ハ直ニ手形面ノ金額ヲ支拂フ旨明記シアル處ニ依テ見レハ云々トアレトモ甲第三號證ニハ戸塚平吉ニ於テ不行届ノ節ハトアリ而シテ不行届トハ不履行ノ意味ニシテ期日ヲ怠リタルトキハ意味ヲ異ニセリ然ルニ不行届ノ文詞ヲ以テ特別保證ノ文詞ヲ明記シタルモノト認定シタルハ不當ニ事實ヲ確定シタルモノナリト云フニ在リ○依而甲第三號證ヲ閱スルニ上告人主張ノ如ク戸塚平吉カ支拂期日不行届ノ節ハ云々トアリテ期日ヲ怠リタルトキト記載シアラス然レトモ原判文ヲ審察スルニ控訴人(上告人)ハ控訴會社ハ云々ト抗辯スルモ前顯第一點ニ付辯明シタルカ如ク控訴會社ハ保證義務ヲ確保スル爲メ特ニ約束手形ヲ被控訴人(被上告人)ニ交付シタル事實并ニ甲第三號證ニ主タル債務者戸塚平吉カ辨濟期日ヲ怠リタル時ハ直ニ手形面ノ金額ヲ支拂フ旨明記シアル處ニ依テ見レハ本件ノ保證契約ハ普通ノ保證契約ト異ナリ主タル債務者ニ於テ辨濟期日ニ支拂ヲナサル時ハ其資力ノ有無ニ拘ハラズ保證人タル控訴會社ハ其保證セル債務千五百圓ヲ直ニ被控訴人ニ支拂フコトヲ特約シタルモノト認ムルニ充分ナリトアリテ原院ハ其職權ヲ以テ甲第三號證ノ所謂不行届トハ期日ニ辨濟ヲ怠ルノ意ナリト解釋シ且上告第三點說明ノ如ク上告人ハ普通ノ保證義務ヲ約シタルモノニアラスシテ特別ノ保證義務ヲ約シタルモノト認定シタルモノニシテ不行届ノ文詞ヲ以テ直ニ特別保證ノ文詞ヲ明記シタル

モノト認定シタルモノニアラサルヤ明カナリ要スルニ本上告論旨ハ原判處ヲ誤解シ其誤解ニ基キ原判決ヲ非難スルモノニ過キサレハ上告ノ理由ト爲スニ足ラス

其第五點ハ被上告人カ第一審へ起訴セシ請求ノ原因ハ擔保金ノ請求ニアリテ保證債務ノ履行ヲ求ムルニアラサルコトハ第一審訴狀請求ノ原因ニ無約束手形ハ主タル債務ニ對スル擔保ナレハ云々一定ノ申立ニ擔保請求ノ權利ハ當然有スヘキヲ以テ云々トアルニ徴シテ明カナリ然ルニ第二審ニ至リ保證義務ノ履行ヲ求ムル旨變更シタルハ民事訴訟法第四百十三條ニ違背シタル不法ノ判決ナリト云ニ在リ○依テ審察スルニ第一審ノ法廷調書ニ原告(被上告人)代理人ノ訴狀ニ記載セル通り事實ノ演述ヲナシタリトアリ乃チ原告人ノ訴狀ヲ閱スルニ原告ハ明治二十九年四月二十三日公證人小川正直役場第五千六百六號公正證書ニ基キ訴外人戸塚平吉外二名ニ對シ金五千圓ヲ貸付タルニ當リ被告(上告人)ハ右貸借ノ周旋人ニシテ原告ノ貸借ヲ承諾シタルハ被告ヲ信用スルニ出テタルモノナリシヲ以テ被告ハ内金千五百圓ニ對シ特別擔保ヲ爲シ同日付ノ約束手形ヲ振出シ支拂期日ヲ六月二十三日ト定メタリ云々茲ニ於テ原告ハ最早手形義務ノ請求權ヲ喪失シタリト雖モ被告ノ認メツ、アル如ク擔保請求ノ權利ハ當然ニ有スヘキヲ以テ更ニ被告ニ對シテ之レカ履行ヲ求ムル數次ニ及フト雖トモ遂ニ原告請求ニ應セス止テ得ス出訴仕候也トアリテ被上告人ハ第一審ニ於テ擔保義務即チ保證義務履行ノ請求トシテ本訴請求ヲ爲シタルコト明カナルヲ以テ上告論旨ノ如ク被上告人ハ第一審ニ於テ擔保金ノ請求トシテ本訴請求ヲ爲シナカラ第二審ニ至リ其中立ヲ變更シ保證債務ノ履行トシテ本訴請求

辯護士ト依頼者ト關係○委任事項ノ半途ニシテ辯護士ヲ解任シタル場合

六十四

ナ爲シタリト云フヲ得ス故ニ本上告論旨モ亦理由ナキモノトス
以上説明シタル如ク上告論旨ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項
ニ從ヒ棄却スヘキモノトス

○辯護料支拂請求ノ件

明治三十一年第三百二二號
明治三十一年十二月二十四日第一民事部判決

○判決要旨

一 辯護士ト依頼者トノ關係ハ委任ニ因リ代理關係タルニ外ナラサルヲ以テ依頼
者ハ何等ノ理由ヲ明示スルヲ要セス辯護士ヲ解任スルコトヲ得可シ
一 依頼者カ委任事務ノ半途ニシテ辯護士ヲ解任シタル場合ニ於テ反對ノ契約ナ
キ限りハ辯護士ハ依頼者ノ爲メニ既ニ費シタル勞力ノ割合ニ應スル報酬ヲ請
求スルコトヲ得ルニ止マリ委任事務完了ノ場合ニ對シテ豫定シタル報酬全部
ヲ請求スルコトヲ得ス

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 増島六一郎 訴訟代理人 岸清 一

被上告人 東京市議會法律上代理人 岡部長職

右當事者間ノ辯護料支拂請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年五月二十五日言渡シタル判決
ニ對シ上告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲ンタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス
理由

上告理由ハ辯護士ハ相手方ノ協議ヲ受ケテ之ヲ贊助シ又ハ其委任ヲ受ケタル訴訟事件ニ付其
職務ヲ行フコトハ辯護士法第十四條ノ禁スル所ニシテ若シ之レヲ犯セハ懲罰ニ付セラレヘキ
モノナリ又辯護士ノ勞力ナルモノハ全ク精神的作用ニ屬スルヲ以テ有形約ニ其履行ノ割合ヲ
測定分割シ得ヘキモノニアテス故ニ東京辯護士會々則第三十四條ハ判決以前ニ於テ委任者カ
辯護士ヲ解任スルトキト雖モ辯護士ハ全部ノ謝金ヲ請求シ得ヘキコトヲ規定シテ此條理ヲ明
カニセリ然ルニ原判決カ辯護士ト其委任者トノ關係ハ普通ノ委任ニ關スル法理ヲ以テ論スヘ
キモノニアラサルコトヲ忘レ且上告人ハ單ニ解任ニ關スル禮儀ノ如何ヲ論シタルモノ、如ク
誤解シ爲メニ上告人ノ委任ノ半途ノ終了カ其責ニ歸スヘカラサル事由ニ因ルト否トヲ問ハス

辯護士ト依頼者ト關係○委任事項ノ半途ニシテ辯護士ヲ解任シタル場合

六十五

上告人ハ其已ニ爲シタル履行ノ割合ニ應シタル報酬ノ外之ヲ請求スルヲ得スト判決シタルハ
 法則ヲ不當ニ適用シタル違法アルモノナリト謂フニ在リ○案スルニ辯護士カ依頼者ハ爲メニ
 費ス勞力ハ精神的ニシテ識見ヲ要スル一種高尚ナルモノナルヲ論テ俟タスト雖モ辯護士ト依
 頼者トハ關係ハ要スルニ委任ニ因ル一種ノ代理關係ナルニ外ナラズ然レハ依頼者タル委任者
 ハ何等ノ理由ヲ明示スルヲ要セス委任者タル辯護士ヲ解任スルコトヲ得ルヤ亦論テ俟タズ而
 シテ依頼者カ解任事項ハ中途ニシテ辯護士ヲ解任シタル場合ニ於テ反對ノ契約アラザイシト
 キハ辯護士ハ依頼者ノ爲メニ既ニ爲シタル履行ノ割合ニ應シタル報酬ヲ請求スルコトヲ得ル
 ニ止マリ委任事項完了ノ場合ニ對シテ豫定シタル報酬全部ヲ請求スルコトヲ得サルモハトス
 何トナレハ依頼者カ約定セシ謝金ナルヤ即チ其勞力ニ酬スルカ爲メニ外ナラザルカ故ニ其謝
 金カ既ニ費シタル勞力ノ割合ニ應スルハキハ蓋シ理ハ當然ナレハナリ而シテ精神的勞力ト雖モ
 之レヲ要スル事項ハ全部ニ輕重シテ既ニ費シタル勞力ノ割合ヲ定ムルカ如キハ固ヨリ不能ハ
 事ニ屬セス又東京辯護士會々則第三十四條ノ規定ハ之レヲ以テ三者タル依頼者ヲ羈束スル
 コトヲ得サルハ勿論判決以前ニ委任者カ辯護士ヲ解任シタル場合ニ於テ辯護士カ全部ノ謝金
 ヲ請求スルモ敢テ辯護士會ノ紀律ニ觸レサルコトヲ明定シタルニ過キササルモノトス要スルニ
 本上告ハ通法ノ理由ナキモノトス
 以上説明ノ如ク本件上告ハ通法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ之
 ヲ棄却スヘモノトス

○辯護料支拂請求ノ件

明治三十一年十二月二十四日第一民事部判決

○判決要旨

一 事實裁判所ハ當事者ノ主張シタル事實ノ範圍内ニ於テ自由ニ事實ノ認定ヲ爲
 スコトヲ得ルモノトス(判旨第二點)

第一審 東京地方裁判所

第二審 東京控訴院

上告人

松田秀雄

訴訟代理人

飯田和宏
上原鹿造

被上告人 増島六一郎

右當事者間ノ辯護料支拂請求ニ付東京控訴院カ明治三十一年五月二十五日言渡シタル判決ニ
 對シ上告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之レヲ棄却ス

理由

事實認定權

上告理由ノ第一ハ原院ニ於ケル被上告人ノ主張ニヨレハ本訴請求金額ノ算定標準ハ單ニ勞力ノ程度ニ依據シタルモノニシテ被上告人カ鐵管事件ノ爲メ第一審廷ニ盡シタル勞力其モノカ貳万円ニ相當スルト云フニ外ナラス故ニ鐵管事件私訴金額ノ多額ナルコト及ヒ東京辯護士會々則辯護料謝金ノ割合ノ如キハ本訴ノ請求ニ何等ノ影響ヲ及ホスヘキ者ニアラス何トナレハ被上告人ノ主張ハ勞力ヲ標準トスルモノナルカ故ニ假令ヒ係屬金額カ百圓若クハ百五拾圓ヲリトモ鐵管事件ノ如キ煩雜ナル事件ニ對スル謝金ハ貳万円ヲ相當ナリトスルヲ得ヘシト云フニ在リテ係屬金額ノ多寡ノ如キハ本訴請求金額ノ標準トセサルモノナレハナリ然ルニ原院カ被上告人ノ主張セル此等ノ事實ヲ採用シ本訴請求額ヲ相當ナリト判定スルノ資料ニ供シタルハ不法ニシテ被毀ヲ免レサルモノナリト云フニ在レトモ○原院カ(前掲)増島六一郎カ勞力ヲ費シタルコトノ大ナルハ推知スルニ餘アリ且ツ不正鐵管事件タル公訴私訴トモ煩雜ナルコトハ顯著ナル事實ニシテ私訴請求額モ九拾貳万五千圓ナルコトハ當事者間ノ爭ナキ事實ナレハ貳万円ハ僅ニ其百分ノ二強ニ過キス之レヲ東京辯護士會々則ニ定ムル謝金ノ標準額ニ比スルモ遙ニ其以下ニ在レハ増島六一郎カ第二審分ヲ貳万円ト算定シテ申出チナシタルハ誠ニ相當ナリト云ハサルヘカラスト説明シタルハ被上告人カ謝金トシテ貳万円ヲ請求スルハ私訴請求額カ多額ナルカ故ニ相當ナリトノ謂ヒニ非スシテ不正鐵管事件タル公訴私訴トモ煩雜ナルコトハ顯著ナル事實ニシテ私訴請求額カ九十二万五千圓ナルコトニ依テ見ルモ其然ルコトヲ知ルニ足ルヘク然レハ貳万円ノ請求ハ東京辯護士會々則ニ定ムル謝金ノ標準額ニ比スルモ相當ナ

リトノ謂ヒニ外ナラス故ニ原院ノ説明ハ被上告人ノ主張タル勞力ヲ標準ト爲サレルモノニ非ラサルヲ以テ本上告理由ハ其當ヲ得ス

第二ハ第一二審ノ裁判所カ事實認定ノ職權ヲ有スルコトハ固ヨリ論ナシト雖モ其認定ハ必ス當事者ノ主張ニ基キ且ツ法律ノ許容シタル場合ノ外ニ於テハ證據ニ據ルコトヲ要シ決シテ裁判官ノ臆想ノミニ因リテ事實ヲ認定スルノ權ナキハ民事訴訟法第二百十七條ニ裁判所ハ……

……辯論ノ全旨趣及ヒ或ル證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ムヘキヤ否ヤチ自由ナル心證ヲ以テ判斷ス可シトアルヲ見テモ明カナリ若シ裁判所ハ當事者ノ主張證據ニ因ラスシテ事實ヲ認定スルヲ得ルトモハ民事訴訟法ノ規定ハ多ク廢滅ニ歸スヘシ故ニ當院ニ於テモ屢々證據ニ因ラサル認定ハ不法ナリト判決セラレタリ然シテ原判決ハ増島六一郎カ私訴狀提出ニ付テノ準備ヲ爲シ及之ヲ提出シテ公廷ニ立合其他假差押事件二件ノ辯論ヲナシ其裁判ヲ受ケタル行爲ヲ以テ少クトモ第一審ノ訴訟行爲中半ハテ過キ十中其六ニ達シタルモノト認ムト至斷サレタリ然レトモ被上告人ハ其爲シタル訴訟行爲ハ第一審ノ訴訟行爲中其六ニ達シタリト立證ヲ爲サレハ勿論其主張タモ爲サレシ然ルニ原院前掲ノ如キ事實ヲ認定シ之ニ因テ以テ上告人ノ支拂フヘキ金額ヲ定メラレタルハ不法ノ判決ナリト云フニ在レトモ○事實裁判所ハ當事者ノ主張シタル事實ノ範圍内ニ於テ事實ノ認定ヲ爲スコトヲ得ルヤ勿論ナリ而シテ被上告人カ私訴狀提出ニ付テノ準備ヲナシ及ヒ之レヲ提出シテ公廷ニ立會ヒ其假差押事件二件ノ辯論ヲ爲シ其裁判ヲ受ケタル等ノ事實ハ被上告代理人カ原院ニ於テ之レヲ主

事實認定權

張シ上告代理人モ其事實ヲ爭ハサリシコトハ原判文上明確ナル所ナルカ故ニ其事實主張ニヨリ原院カ被上告人ハ其受任事項ノ十中ノ六ヲ履行シタルモノト認定シ因テ以テ上告人ノ支拂フヘキ金額ヲ定メタル次第ナレハ本上告點モ亦採用スルノ價值ナシ
以上説明セシ如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク判決ヲナス

○大審院民事部裁判長及部員氏名表

第一民事部

裁判長

院長

部長 判事男爵南 部 鑿 男

部員

判事	井上正一
判事	岡村爲藏
判事	本多康直
判事	和田收藏
判事	河村善益
判事	馬場愿治
判事	志方 鍛

(明治三十一年十一月三十日
大阪地方裁判所長ニ兼任)

本部ノ所管

人事、米穀、物品、證券、金錢

本部ノ開廷

判事氏名表

火 曜 日
木 曜 日
土 曜 日

第二民事部

裁判長

部長

判事 寺 島 直

部員

判事	西川 鐵次郎
判事	今村 信行
判事	芹 澤 政温
判事	中尾 眞晃
判事	清 水 一郎
判事	掛下 重次郎

本部ノ所管

地所附水利、建物附家賃、損害要償、雜事

判事氏名表

本部ノ開廷

月 曜 日

水 曜 日

金 曜 日

大審院刑事判決錄

總目録
刑法

不知ノ陳述ニシテ偽證罪ヲ構成スル場合ノ事……………三
妻ノ父ノ所有物ヲ騙取シタル所爲ノ事……………六
村役場ノ雇ニシテ監守中ノ金圓ヲ竊取シタル所爲ノ事……………五
登記ヲ經由セサル不動産ヲ再度賣却シタル所爲ノ事……………六
假裝ノ事實ニ基キ公正證書ヲ作成シタル所爲ノ事……………三
反古紙ノ印影ヲ切取り他ノ紙ニ貼附シテ行使シタル所爲ノ事……………六
刑法第二百九條ニ所謂約定手形ノ意義ノ事……………三
輕罪ノ數罪俱發シタル場合ニ於ケル處斷ノ事……………五
他人ノ委任ニ依リ入質シタル物品ヲ受出シテ費消シタル所爲ノ事……………五
官吏侮辱罪ノ構成ノ事……………二

民法

所有權ハ賣買ニ依リテ直ニ買主ニ移轉スル事.....10

刑事訴訟法

豫審終結決定ノ確定ノ效力ノ事.....(三)

勾引狀ノ執行ヲ待タスシテ豫審終結ノ決定ヲ爲シタル手續ノ事.....一

被告人ヨリ上告申立ヲ爲シタル場合ニ於ケル辯護人ノ上告申立ノ效力ノ事.....九

數罪俱發一ノ重キニ從テ處分シタル第一審判決ノ一部ニ對シテ控訴シタル場
合ニ於ケル第二審裁判所ノ審理手續ノ事.....二

擬律ニ錯誤アルコトヲ認メタルニ拘ラステ控訴ヲ棄却シタル判決ノ事.....三

事實ノ認定ニ誤謬アル裁判ノ事.....三

事實ノ理由ト法律ノ理由ト齟齬スル判決ノ事.....四

假差押ノ申請ハ私訴ノ提起ニ非サル事.....四

犯罪ノ證據十分ナラサル場合ニ於ケル私訴ノ裁判ノ事.....五

寺院ノ代表者ノ事.....五

附帶控訴ヲ審理スル手續ノ事.....六

稅關規則

輸入手續ヲ爲サスシテ貨物ヲ廻漕シタル所爲ノ事.....六

事件目錄

事 件	關 係 事 項	判 決 日	番 號	訴 訟 關 係 人	丁 數
詐欺取財及竊盜ノ件	豫審決定確定ノ效力、勾引狀ノ執行ナキ豫審終結ノ決定	十二月一日	一〇九三號	被告 高木謙太郎	一
偽證ノ件	不知ノ陳述	十二月二日	八九二號	被告 風間松之助	三
私書偽造行使ノ件	妻ノ父ノ所有物關取	十二月二日	一〇一五號	被告 細江平太郎	六
私書偽造行使ノ件	二個ノ上管申立	十二月五日	六三九號	被告 山崎春吉	九
私印私書偽造行使等ノ件	數罪中一部ノ控訴	十二月五日	七六九號	被告 〔吉井常太郎〕 〔森山吉藏〕	三
監守盜ノ件	村役場雇ノ監守盜	十二月五日	八〇六號	被告 上野有志	五
詐欺取財ノ件	再竊却ノ所爲	十二月五日	九三七號	被告 岡戸熊吉	六
詐欺取財ノ件	所有權移轉ノ時期	十二月五日	一〇九四號	被告 坂本忠成	三
官文書偽造行使ノ件	假裝ノ事實ニ基ク公正證書	十二月十二日	一〇九五號	被告 〔山村真貴〕 〔吉村忠道〕	三
官文書偽造行使ノ件	印影ノ貼附	十二月十二日	一一三〇號	被告 渡邊安之	六
私印盜用私書偽造行使等ノ件	不利益ノ變更	十二月十三日	一〇六六號	被告 高澤彦三郎	三
官吏抗拒ノ件	豫審決定確定ノ效力	十二月十五日	一一五一號	被告 佐瀬喜三郎	三

事件目錄

事件目録

- 私印盗用等ノ件
- 謀殺ノ件
- 胃認ノ件
- 詐欺取財等ノ件
- 胃認ノ件
- 貨幣偽造詐欺取財ノ件
- 委託物消費ノ件
- 官吏侮辱ノ件
- 詐欺取財ノ件
- 税關法違犯ノ件
- 私印盗用等ノ件

約束手形ノ意義、事實誤認ノ裁判	事實法律ノ齟齬	假差押ノ申請	私訴ノ裁判	寺院ノ代表者	輕罪ノ數罪併發ノ處斷	入質品ノ受出	侮辱ノ結果	二個ノ控訴共ニ理由アル場合	輸入手續	附帯犯ノ審理
十二月十六日	十二月十六日	十二月十六日	十二月十九日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十七日
九一三號	九六三號	一一三九號	二五三號	八八四號	一〇四二號	一一五七號	一一六九號	七七四號	九五七號	九八四號
被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告
武隈幸隆	石坂友次	清水義之助	細川淺吉	高橋精太	伊藤新平	早稲田要藏	吉原七藏	大橋新三	橋本新吉	加藤芳太郎

いろは索引

此索引ハ專ラ法律上ノ用語ニ依リ其頭音ヲ取テいろはノ順ニ從テ排列編纂ス止ムヲ得サルニ非サレハ形容詞者クハ普通名詞ヲ用ヒス〇頭音ハ必スシモ字音ノ假名遣ニ拘ハラズ人ノ通常言フ所ノ音聲ニ據ル例之ハウチほうニ入ルカカ如シ

[5]

一部ノ控訴

(數罪中一部ノ控訴。參看)

印影ノ貼附

反古紙ヨリ郡長ノ印影ヲ切取リ引出切符用紙ノ要所ニ貼附シテ行使シタル所爲ハ出引切符ノ偽造ナリ

委託物消費罪ノ構成

(入質品ノ受出。參看)

犯罪ノ曲庇

(不知ノ陳述。參看)

二個ノ上告申立

被告人及辯護人双方ヨリ上告申立チナスモ辯護人ノ申立ニシテ被告人ノ明言シタル意思ニ反セサル限リハ二者並モ接觸スル所ナキヲ以テ共ニ有效ナリトス從テ其申立ノ一ニシテ法定期間内ニ提出セラレ次テ被告人又ハ辯護人ヨリ上告趣意書ヲ差出シタルトキハ其上告ハ適法ニ成立シタルモノトス

いろは索引

丁數

六

九

認定ノ誤謬

(事實誤認ノ裁判。參看)

入質品ノ受出

他人ノ委任ニ依リ入質シタル物品ヲ受出シテ投消シタル所爲ハ委託物消費罪ヲ構成ス

二個ノ控訴共ニ理由アル場合

檢事及被告人共ニ全部ノ控訴ヲ爲シタル場合ニ於テ控訴審カ第一審判決ノ事實ヲ變更シタルトキハ檢事及被告人ノ控訴ハ共ニ其理由アリ

胃認罪ノ成立

(再發却ノ所爲。所有權移轉ノ時期。參看)

反古紙ノ印影剝取

(印影ノ貼附。參看)

法律事實ノ齟齬

(事實法律ノ齟齬。參看)

辯護人ノ上告

(二個ノ上告申立。參看)

丁數

六

六

いろは索引

〔と〕

登記ヲ經サル不動産

(再賣却ノ所爲。所有權移轉ノ時期。參看)

〔り〕

理由アル控訴ノ棄却

(不利益ノ變更。參看)

〔か〕

流通證券

(約定手形ノ意義。參看)

〔き〕

監守盜

(村役場雇ノ監守盜。參看)

〔こ〕

假裝ノ事實ニ基ク公正證書

公證人ニシテ假裝ノ事實ニ基キ公正證書ヲ作成スルモ他人ヲ害スルノ惡意ナク又害ヲ生スヘキモノニ非サルトキハ公正證書偽造行使罪ヲ構成セス

〔け〕

爲替手形

(約定手形ノ意義。參看)

〔こ〕

假差押ノ申請

假差押ノ申請ハ私訴ノ提起ニ非ス

〔さ〕

官吏侮辱罪ノ構成

(侮辱ノ結果。參看)

〔せ〕

貨物ノ廻漕

(輸入手續。參看)

〔じ〕

豫審決定確定ノ效力

いろは索引

〔と〕

豫審終結決定ニシテ確定シタル以上ハ豫審上ノ手續ニ違法ノ點アルモ之カ爲ニ決定ノ效力ヲ失ハス(一)

〔り〕

豫審終結決定ハ被告事件ヲ公判ニ付スルヤ否ヲ決スル裁判ニシテ一旦確定シタル以上ハ免訴ニ關シ特例アル場合ノ外之ヲ無効ニ歸セシムルコトヲ得ス(二)

〔か〕

豫審中ノ附帶犯ノ發見

(附帶犯ノ審理。參看)

〔き〕

第二買主ノ登記

(所有權移轉ノ時期。參看)

〔こ〕

代表者

(寺院ノ代表者。參看)

〔け〕

妻ノ父ノ所有物騙取

妻ノ父ノ所有物ヲ騙取シタル所爲ハ法律上罪トナラズ

〔こ〕

村役場雇ノ監守盜

村役場ノ雇ニシテ村長ノ命ヲ受ケ監守中ノ金圓ヲ竊取シタル所爲ハ監守盜罪ヲ構成ス

〔さ〕

無罪ノ場合ニ於ケル私訴

(私訴ノ裁判。參看)

〔せ〕

雇ノ刑法上ノ資格

〔じ〕

〔ぢ〕

〔ぢ〕

〔ぢ〕

約定手形ノ意義

(村役場雇ノ監守盜。參看) 刑法第二百九條ニ所謂裏書ヲ以テ賣買スヘキ證券若クハ金額ト交換スヘキ約定手形トハ交付ニ依リテ讓渡スコトヲ得ル流通證券ノ謂ニシテ爲替手形約束手形ノ如キ或ル有價證券ニ特有ノ名稱ニ非ス

〔け〕

決定確定ノ效力

(豫審終結決定確定ノ效力。參看)

〔こ〕

欠席者ニ對スル豫審終結

(勾引狀ノ執行ナキ豫審終結ノ決定。參看)

〔さ〕

輕罪ノ數罪俱發ノ處斷

輕罪ノ數罪俱發シタル場合ハ刑期ノ長短ヲ問ハス其所犯情狀最モ重キ所爲ニ從テ處斷ス

〔せ〕

不知ノ陳述

不知ノ陳述ト雖モ其陳述虛偽ニシテ他人ノ犯罪ヲ曲庇スルノ意ニ出テタルトキハ偽證罪ヲ構成ス

〔じ〕

不可分ノ判決

(數罪中一部ノ控訴。參看)

〔ぢ〕

不動産ノ再賣却

いろは索引

不利益ノ變更

(再賣却ノ所爲。所有權移轉ノ時期。參看) 擬律ニ錯誤アルコトヲ認メタルニ拘ラス被告人ノミノ控訴ニ係ルチ以テ刑罰訴訟法第二百六十五條ノ法則ニ基キ原判決ヲ變更シテ被告人ノ不利益トナスコトヲ得サルチ理由トシテ控訴ヲ棄却シタル判決ハ不法ナリ

侮辱ノ結果

官吏侮辱罪ハ必スシモ侮辱スルノ意思アルヲ要セス單ニ侮辱ノ結果ヲ生スルコトヲ豫知スルチ以テ足ル

附帶犯ノ審理

公判ニ於テ附帶ノ犯罪ヲ發見シタルトキハ直ニ審理判決スルヲ得ルモノニシテ其之ヲ審理スルニ付豫審ノ必要アル場合ノ外特殊ノ手續ヲ要スルモノニ非ス

勾引狀ノ執行ナキ豫審終結ノ決定

勾引狀ノ執行ヲ待タズシテ豫審終結ノ決定ヲ爲スモ訴訟手續ニ違背スルコトナシ

公正證書ニ於ケル假裝ノ事實

(假裝ノ事實ニ基ク公正證書。參看)

三

いろは索引

〔さ〕 再賣却ノ所爲

一旦賣却シタル不動産ノ未ダ登記ヲ經由セサルヲ寄貨トシテ再ヒ他ヘ賣却シタル所爲ハ冒認販賣罪ヲ構成ス

〔ま〕 偽證罪ノ構成

(不知ノ陳述。參看)

〔ゆ〕 輸入手續

甲港ニ於テ他ノ貨物ト共ニ輸入手續ヲ爲スヘキ物品ヲ故ラニ積荷目録ニ記載セスシテ乙港ニ廻漕シタル所爲ハ税關規則第十五條ノ法則ニ違背シタルモノトス

〔こ〕 親族者間ノ騙取

(妻ノ父ノ所有物騙取。參看)

所有權移轉ノ時期

所有權ハ賣買ニ依リテ直ニ買主ニ移轉ス從テ賣却シタル不動産ノ未ダ登記ヲ經サル場合ト雖モ重子テ他ヘ賣渡シタルトキハ冒認販賣罪ヲ構成ス而シテ第二ノ買主ノ登記ヲ經タルト否トハ犯罪ノ成立ニ影響ヲ及ボサス

事實誤認ノ裁判

事實ノ認定ニ誤認アルモ違法ノ裁判ニ非ス

六

事實法律ノ齟齬

事實理由ノ部ニ於テ毆打及ヒ殺人未遂ノニ所爲アルコトヲ認メナカラ法律ノ理由ニ於テ一罪トシテ處斷シタル判決ハ不法ナリ

私訴ノ提起

(假差押ノ申請。參看)

私訴ノ裁判

犯罪ノ證據十分ナラサル場合ト雖モ私訴ニ關スル請求權ノ有無ハ之ヲ裁判セサルヘカラス

寺院ノ代表者

寺院ハ其住職ニ依テ代表セラルヘキモノニシテ信從總代ハ之ヲ代表シテ訴訟ヲナスノ資格ナシ

信徒總代

(寺院ノ代表者。參看)

引出切符偽造罪ノ成立

(印影ノ貼附。參看)

税關規則ノ違犯

(輸入手續。參看)

數罪中一部ノ控訴

第一審裁判所ニ於テ數罪俱發一ノ重キニ從

四

四

五

五

三

テ處斷シタル場合ニ於テハ俱發シタル數罪全部ニ對シテ一刑ヲ言渡シタルモノニシテ其言渡ハ不可分ナリ從テ其中ノ一罪ニ對シテノミ控訴シタル場合ト雖モ第二審裁判所ハ全部ニ付審理スヘキモノトス

いろは索引

五

法
文
表

丁
數

刑法

二〇九條

刑事訴訟法

二六五條

稅關規則

一五條

法
文
表

月日目錄

宣告月日	番 號	判決結果	原控訴院	丁數
十二月一日	一〇九三號	破 毀	東 京	一
十二月二日	八九二號	棄 却	大 阪	三
十二月二日	一〇二五號	破 毀	大 阪	六
十二月五日	六三九號	棄 却	函 館	九
十二月五日	七六九號	破 毀	函 館	三
十二月五日	八〇六號	棄 却	東 京	五
十二月五日	九三七號	棄 却	東 京	八
十二月五日	一〇九四號	破 毀	東 京	三
十二月十二日	一〇九五號	棄 却	東 京	三
十二月十二日	一一三〇號	棄 却	東 京	六
十二月十三日	一〇六六號	破 毀	大 阪	三
十二月十五日	一一五一號	破 毀	東 京	三

月日目錄

月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日
十二月十六日	十二月十六日	十二月十六日	十二月十九日	十二月二十日	十二月二十日	十二月廿六日	十二月廿六日	十二月廿七日	十二月廿七日	十二月廿七日
九一三號	九六三號	一一三九號	二五三號	八八四號	一〇四二號	一一五七號	一一六九號	七七四號	九五七號	九八四號
棄却	破毀	棄却	破毀	却下	棄却	棄却	破毀	破毀	破毀	破毀
大坂	宮城	宮城	長崎	名古屋	宮城	東京	東京	大坂	大坂	廣島
三	四	四	五	五	五	六	六	六	六	六

總計二十三件
 破毀 十二件
 棄却 十一件
 却下 一件

人名音字目錄

人名	番號	原控訴院	丁數
[シ] 石坂義實外二名被 伊藤平吉私訴被 井上慶吉破 早田收藏外二名私訴上 橋本新吉外二名私訴被 細江平太郎被 細川亮之助外一名被 細川淺吉外一名被 岡戸熊吉被 大塚仁一外二名私訴被 大森祐介公訴私訴 渡邊安之被	九一三號 一一三九號 一一六九號 二五三號 二五三號 一〇一五號 九六三號 九六三號 九三七號 二五三號 八八四號 一一三〇號	大坂 宮城 東京 長崎 長崎 大阪 宮城 宮城 東京 名古屋 東京	三 四 六 五 五 六 四 四 六 五 五 六
[ハ] 石坂義實外二名被 伊藤平吉私訴被 井上慶吉破 早田收藏外二名私訴上 橋本新吉外二名私訴被 細江平太郎被 細川亮之助外一名被 細川淺吉外一名被 岡戸熊吉被 大塚仁一外二名私訴被 大森祐介公訴私訴 渡邊安之被	九一三號 一一三九號 一一六九號 二五三號 二五三號 一〇一五號 九六三號 九六三號 九三七號 二五三號 八八四號 一一三〇號	大坂 宮城 東京 長崎 長崎 大阪 宮城 宮城 東京 名古屋 東京	三 四 六 五 五 六 四 四 六 五 五 六
[ホ] 石坂義實外二名被 伊藤平吉私訴被 井上慶吉破 早田收藏外二名私訴上 橋本新吉外二名私訴被 細江平太郎被 細川亮之助外一名被 細川淺吉外一名被 岡戸熊吉被 大塚仁一外二名私訴被 大森祐介公訴私訴 渡邊安之被	九一三號 一一三九號 一一六九號 二五三號 二五三號 一〇一五號 九六三號 九六三號 九三七號 二五三號 八八四號 一一三〇號	大坂 宮城 東京 長崎 長崎 大阪 宮城 宮城 東京 名古屋 東京	三 四 六 五 五 六 四 四 六 五 五 六
[ワ] 石坂義實外二名被 伊藤平吉私訴被 井上慶吉破 早田收藏外二名私訴上 橋本新吉外二名私訴被 細江平太郎被 細川亮之助外一名被 細川淺吉外一名被 岡戸熊吉被 大塚仁一外二名私訴被 大森祐介公訴私訴 渡邊安之被	九一三號 一一三九號 一一六九號 二五三號 二五三號 一〇一五號 九六三號 九六三號 九三七號 二五三號 八八四號 一一三〇號	大坂 宮城 東京 長崎 長崎 大阪 宮城 宮城 東京 名古屋 東京	三 四 六 五 五 六 四 四 六 五 五 六

人名音字目錄

[か]	風間松之助 <small>被告</small>八九二號	大阪	三
	加藤熊吉 <small>外二名 私人 被告</small>八八四號	名古屋	三
	加藤武八 <small>外二名 私人 被告</small>八八四號	名古屋	三
[よ]	吉非常太郎 <small>外一名 被告</small>七六九號	函館	三
	吉村忠道 <small>外一名 被告</small>一〇九五號	東京	三
	吉田要七 <small>外二名 私人 被告</small>二五三號	長崎	五
[九]	高木鎌太郎 <small>被告</small>一〇九三號	東京	一
	高澤彦三郎 <small>被告</small>一〇六六號	大阪	三
	武隈幸隆 <small>外二名 被告</small>九一三號	大阪	三
	高橋悅之輔 <small>公訴上 被告</small>一一三九號	宮城	四
	田邊長次郎 <small>外一名 被告</small>七七四號	大阪	四
	田邊唯之助 <small>外一名 被告</small>七七四號	大阪	四
	田中藤太郎 <small>公訴 私人 被告</small>九八四號	廣島	六
[つ]	堤辰一郎 <small>外一名 被告</small>九五七號	大阪	六
[な]	中田友之助 <small>私人 被告</small>九八四號	廣島	六

[う]	上野有志 <small>被告</small>八〇六號	東京	五
[や]	山崎春吉 <small>被告</small>六三九號	函館	九
	山村良貴 <small>外一名 被告</small>一〇九五號	東京	三
	山内甲松 <small>被告</small>一一五七號	東京	六
[ま]	前田音松 <small>外一名 被告</small>九五七號	大阪	六
[ふ]	福田新藏 <small>外二名 私人 被告</small>二五三號	長崎	五
[は]	江原眼三 <small>外二名 私人 被告</small>二五三號	長崎	五
[あ]	天野芳太郎 <small>外二名 私人 被告</small>八八四號	名古屋	五
	新野伊六 <small>被告</small>一〇四二號	宮城	五
[さ]	坂本忠成 <small>被告</small>一〇九四號	東京	二
	佐瀬喜三郎 <small>被告</small>一一五一號	東京	三
[き]	木下精太郎 <small>公訴 私人 被告</small>一一三九號	宮城	四
[し]	清水友次郎 <small>外二名 被告</small>九一三號	大阪	三
[も]	森山吉藏 <small>外一名 被告</small>七六九號	函館	三

大審院刑事判決錄

第四輯 第十一卷

○詐欺取財及竊盜ノ件

明治三十一年第一〇九三號
明治三十一年十二月一日宣告

○判決要旨

豫審終結決定ニシテ確定シタル以上ハ豫審上ノ手續ニ違法ノ點アルモ之カ爲
ニ決定ノ效力ヲ失ハス
勾引狀ノ執行ヲ待タスシテ豫審終結ノ決定ヲナスモ訴訟手續ニ違背スルコト
ナシ

第一審 横濱地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 高木謙太郎

豫審決定確定ノ效力○勾引狀ノ執行ナキ豫審終結ノ決定

豫審決定確定ノ效力〇勾引狀ノ執行ナキ豫審終結ノ決定

右被告鎌太郎カ詐欺取財及ヒ竊盜事件ニ付明治三十一年十一月九日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ同院檢察長檢察波多野敬直ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

上告趣意ハ原院判決理由ノ要領ハ豫審判事ニ於テ勾引狀ヲ發付シナカラ其執行ノ成否如何ヲ確メス豫審ヲ終結セシハ豫審ノ訴訟手續ニ違背シタルモノニシテ其決定ニ基因セル公訴ハ不適法ナルヲ以テ受理スヘキモノニアラストシ刑事訴訟法第六十七條等ヲ援用シ既示スル所アリト雖モ刑事訴訟法第六十七條乃至第七十一條第九十三條ノ規定ハ所在地ノ分明ナル被告人ニ適用スヘキ規定ニシテ本案被告人ノ如ク所在ノ地ヲ覺知シ能ハサル者ニ對シテハ實際上其適用ヲ望ムヘカラス殊ニ豫審ニ於テハ事件ノ緊固ヲ知ラシムヘキ刑事訴訟法第二百二十七條ノ如キ告示法ハ勿論被告人ヲ訊問セスシテ豫審終結ヲ決定スヘカラストノ禁止法アルコトヲ觀ス故ニ豫審判事ハ發付セシ勾引狀ノ執行如何ニ拘ハラズ證人訊問等ノ豫審手續ヲ進行シ其處分ノ結了ヲ認メシハ豫審判事ノ職權ニ屬スル當然ノ行爲ニシテ違法ノ處置ナリト謂フヘカラス左スレハ本件豫審終結決定ハ適法ニシテ有效ノ決定ナルコトハ論ヲ俟タサル所ナリトス故ニ本件公訴ヲ受理セストノ第一審判決ヲ是認シ檢察ノ控訴ヲ棄却セル原院ノ判決ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理セサルモノト思料スト云フニ在リ

〇因テ審案スルニ假令豫審ノ訴訟手續ニ違法ハコトアリトスルモ既ニ確定シタル豫審終結決定ハ爲メニ其效力ヲ失フヘキモノニアラス況ンヤ本案豫審判事カ勾引狀ノ執行ヲ待タズシテ豫審終結決定ヲ爲シタルハ訴訟手續ニ違背

シタルモノニアラサルニ於テハ故ニ本案ノ如ク被告ニ委託金費消等ノ犯罪アリトシテ輕罪公判ニ付シタル豫審終結決定ノ確定シタル上ハ原院ハ右決定ニ基キ公訴ヲ受理シ其犯罪ノ有無ヲ審判セサル可カラズ然ルニ原院ハ右決定ヲ無効ナリトシテ公訴ヲ受理ス可カラスト爲シ公訴不受理ヲ言渡シタル第一審判決ヲ是認シ檢察ノ控訴ヲ棄却シタルハ失當ノ判決ニシテ上告ハ其理由アリ

依テ刑事訴訟法第二百八十六條ニ則リ原判決ノ全部ヲ破毀シ本件ヲ名古屋控訴院ニ移ス
明治三十一年十二月一日大審院第二刑事部公廷ニ於テ檢察廳堂融立會宣告ス

〇偽證ノ件

明治三十一年第八九二號
明治三十一年十二月二日宣告

判決要旨

不知ノ陳述ト雖モ其陳述虛偽ニシテ他人ノ犯罪ヲ曲庇スルノ意ニ出タルトキハ偽證罪ヲ構成ス

(參照) 刑事ニ關スル證人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告入ヲ曲庇スル爲メ事實

ヲ掩蔽シテ偽證ヲ爲シタルトキハ左ノ例ニ照シテ處斷スニ重罪ヲ曲庇スル爲メ偽證

不知ノ陳述

不知ノ陳述

四

シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加スニ、
輕罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十
圓以下ノ罰金ヲ附加ス三、違背罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ違背罪ノ本條ニ依テ
處斷ス(刑法第二
百十八條)

第一審 東京地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 風間松之助 辯護人 小出御太郎

右風間松之助ニ對スル偽證被告事件ニ付明治三十一年八月十三日大阪控訴院ニ於テ音渡シタ
ル判決ヲ不當トシ被告松之助ヨリ上告ヲ爲シタルニ依リ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ
履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣意書ノ第一點ハ不實ノ事實ヲ陳述スルコトハ偽證罪成立ノ要件ナリ而シテ不知ノ陳述
ハ事實ノ陳述ニ非ス然ルニ原院カ被告ニ於テ前田建次郎ヲ曲庇スル爲メ事實ヲ知ラスト偽言
シタリト認メナカラ之ヲ偽證罪ニ間擬シタルハ疑律ノ錯誤ナリト云フニ在レトモ○其事實ハ
存在ヲ知ラストハ陳述モ亦々事實上ハ陳述ナリ其ハ陳述虛偽ニシテ他人ハ犯罪ヲ曲庇スルハ
意ニ出テタルトキハ偽證罪ヲ構成スルコト勿論ナレハ原院ハ疑律ノ錯誤ニ非ス

第二點ハ原院ハ酌量輕減法ニヨリ本刑ニ二等ヲ減シ主刑ハ減等シタル刑ノ範圍内ニ於テ重禁
錮十五日ニ處シタルモ附加罰金ニ付テハ本刑ノ範圍ニ於ケル最嚴格罰金貳圓ニ處シタリ是酌
量輕減法ヲ不當ニ適用シ且刑法第七十四條ニ違背シタル裁判ナリト云フニ在レトモ○本件ノ

罪ハ原院ノ認ムル所ニ據ルニ本刑ニ二等ヲ減スルモ尙ホ刑法第七十四條ニ所謂附加罰金ヲ減
減シタル場合ニアラサレハ主刑ト共ニ附加罰金ヲ科セサルヘカラス而シテ附加罰金ハ貳圓以
上ナレハ原院カ二圓ノ罰金ヲ附加シタルハ相當ナリトス

第三點ハ原院判決文ニ證人トシテ宣誓ヲ爲シ事實ノ證言ヲ爲スヘキ際トアルノミナレハ果シテ
證人トシテ訊問ヲ受ケタル際ナルヤ否判然セス即チ理由不備ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○
宣誓ヲ爲シ證言ヲ爲スヘキ際ト云ヘハ裁判長ノ訊問ニ對シ答辯ヲ爲スヘキ際ナルコト毫末ノ
疑ヲ存セス

第四點ハ被告人ノ陳述ハ他ノ脅迫ニ因リ其ノ意ニアラサル陳述ニ過キサルコト辯護人ヨリ特
ニ其ノ申立ヲ爲シタリ然ルニ此ノ點ニ對シ何等ノ說明ヲ與ヘサレハ理由不備ナリト云フニ在
レトモ○刑事ノ判決ニ在テハ結局ノ事實認定ヲ示メセハ特ニ抗辯方法ニ付說明ヲ爲サハルモ
理由不備ト爲スコトヲ得ス

辯護人小出御太郎擴張書ノ第一點ハ原院判決文ニハ單ニ偽證ヲ爲シタリトアルノミニシテ其ノ
事實ヲ示サハルハ不法ナリト云フニ在レトモ○偽證ノ事實ハ原院文ニ之レヲ明記シアリテ本
論旨ノ如キ不法アルコトナシ

第二點ハ原院判決文ニハ事實ヲ記憶セスト陳述シタリトアルノミナレハ果シテ故意ニ出テタル
陳述ナリヤ否之レヲ知ル能ハスト云フニ在レトモ○被告ノ陳述ハ故ラニ事實ヲ隱蔽シタルモ
ノナルコト判決文全體ヲ通讀セハ明白ニシテ寸毫ノ疑點ヲ留メス本論旨モ亦々謂ハレナキ批

不知ノ陳述

五

不知ノ陳述

六

雖ニ過キス
 道中書ノ要旨ハ原院ノ豫審調書ヲ示シ其ノ辯解ヲ求メスシテ之レヲ斷罪ノ資料ニ供シタル不
 法アリト云フニ在レトモ○原院ノ裁判長カ被告豫審調書ノ要領ヲ讀開ケ其ノ全部朗讀者モ
 付被告上告人ノ承諾ヲ得タル上之レニ對スル辯解ヲ求メタル事跡公判始末書ニ歷然タレハ本論
 旨ノ如キ不法アルコトナシ
 右ノ理由ニ依リ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ本案上告ハ之レヲ棄却ス
 明治三十一年十二月二日於大審院第一刑事部公延檢事小宮三保松立會宣告ス

○私書偽造行使ノ件

明治三十一年第一〇一五號
明治三十一年十二月二日宣告

○判決要旨

妻ノ父ノ所有物ヲ騙取シタル所爲ハ法律上罪トナラス

(參照) 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ
 其罪ヲ論セス(刑法第三百
 九十八條)
 祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹五ニ其財産ヲ騙取シタル者ハ

竊盜ヲ以テ論スルノ限ニ在ラス(刑法第三百七十七條第一項七)

第一審 大津地方裁判所 彦根支部 第二審 大阪控訴院

被告人 細江平太郎 辯護人 高木益太郎

右私書偽造行使證據騙取被告事件ニ付明治三十一年十月五日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判
 決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ
 私書偽造行使ニ付テノ原判決ニ對スル上告趣意辯明及追補辯明書ハ之ヲ要スルニ原判決ニ平
 助ヲ證人ト爲シ同人名下ニハ有合印ヲ押捺シ恰モ真正ニ平助カ證人トナレル借用證書タルカ
 如クニ偽造シ云々トアレトモ香水平助ニ證人ノ調印ヲ頼ム爲メ其宅ニ到リタルモ既ニ田島ニ
 出行キタル跡ナルヲ以テ引返サントセシニ同人妻トミエ及實子七郎ノ兩人押止メ來意ヲ尋子
 タルニ付平助ノ押印依頼ノ事由ヲ咄シタルニ同人ハ之レヲ引受ケ炬燵ノ側ニテ調印シ吳レタ
 ル事實ニシテ證書ヲ偽造シタルニアラスト云フニ在レトモ○是レ全ク原承審官ノ職權ニ屬ス
 ル事實認定ノ批難ニシテ上告ノ理由ト爲スヲ得ス

公證證書騙取ニ付テノ原判決ニ對スル辯護人高木益太郎上告趣意辯明ハ被告ハ其妻ノ父ヨリ
 財物ヲ騙取シタルモノナレハ刑法第三百九十八條第三百七十七條ニ依リ其罪ヲ論スヘキモノ
 ニアラス然ルニ原判決カ同法第三百九十九條ヲ適用シタルハ疑律ノ錯誤アル不法ノ裁判ナリト
 云フニ依リ○按スルニ本件ニ付原院ハ認メタル事實ハ被告平太郎ハ其妻ノ父ナル岡平八郎ハ

妻ノ父ノ所有物騙取

七

妻ノ父ノ所有物騙取

所有ナル整理公債證書ヲ騙取シタルモノハ刑法第九十八條同第三百七十七條ニ照シ其罪ヲ論スヘキモノニアラス即チ原判決ハ疑律ノ錯誤アル不法アルモノトス以上ノ理由ナルヲ以テ原判決ヲ破毀シ其認メタル事實ニ依リ本院ニ於テ直チニ判決スルコト左ノ如シ

細江平太郎

被告カ其配偶者ノ父岡平八郎ヨリ整理公債證書ヲ騙取シタル所爲ハ刑法第三百九十八條同第三百七十七條ニ依リ其罪ヲ論セス
被告カ香水平助ヲ證人ト爲シ同人名下ニ有合印ヲ押捺シ恰モ真正ニ平助カ證人トナレル借用證書タルカ如ク偽造シ明治二十九年十二月二日被告肩書ノ住所ニ於テリユニ交付シタル所爲ハ刑法第二百十條第一項第二百十二條ニ依リ被告ヲ重禁錮一年罰金十五圓監視六ヶ月ニ處ス他ハ原判決ノ通り

明治三十一年十二月二日大審院第二刑事部公廷ニ於テ檢事小宮三保松立會宣告ス

○私書偽造行使ノ件

明治三十一年第六三九號
明治三十一年十二月五日宣告

○判決要旨

被告人及ヒ辯護人雙方ヨリ上告申立チナスモ辯護人ノ申立ニシテ被告人ノ明言シタル意思ニ反セザル限りハ二者毫モ牴觸スル所ナキヲ以テ共ニ有效ナリトス從テ其申立ノ一ニシテ法定期間内ニ提出セラレ次テ被告人又ハ辯護人ヨリ上告趣意書ヲ差出シタルトキハ其上告ハ適法ニ成立シタルモノトス

(參照) 辯護人ハ被告人ニ代リ上訴ヲ爲スコトヲ得但被告人ノ明示シタル意思ニ反スルコトヲ得ス(刑事訴訟法第百三十四條)

上告ヲ爲スニハ其申立書ヲ裁判所ニ差出シ且其申立ヲ爲シタル日ヨリ五日内ニ趣意書ヲ差出ス可シ(刑事訴訟法第二(百七十三條第一項))

第一審 青森地方裁判所 第二審 函館控訴院

被告人 山崎春吉 辯護人 田中藤次郎
岸本常治 岸本辰雄

右私書偽造行使詐欺取財未遂被告事件ニ付明治三十一年五月十九日函館控訴院ニ於テ第一審判決ヲ取消シ更ニ被告春吉ヲ重禁錮四月罰金四圓監視六月ニ處シタル判決ニ對シ被告並ニ辯護人田中藤次郎ヨリ上告ヲ爲シ原院檢事ハ答辯書ヲ差出シタルニ依リ裁判所構成法第四十九條ニ依リ上告申立

● 條刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ檢事小宮三保松辯護士井本常治ノ辯明ヲ聽キ判
決スルコト左ノ如シ

原判決ノ旨渡ハ明治三十一年五月十九日ニ在リテ同年五月二十三日被告人ノ辯護人田中藤次
耶ヨリ上告申立ヲ爲シ同月二十七日有辯護人ヨリ上告趣意書ヲ差出シタリ○依テ刑事訴訟法
第二百四十三條ヲ按スルニ辯護人ハ被告人ニ代リ上訴ヲ爲スコトヲ得但被告人ハ明言シタル
意思ニ反スルコトヲ得ストアリテ辯護人ハ被告人ハ爲メ上訴ヲ爲スモハナレハ假令ハ被告人
及ヒ辯護人双方ヨリ同時又ハ前後シテ上告申立ヲ爲スモ是レ唯一ハ上告ニ貳個ハ申立アリト
云フマテニシテ辯護人ハ申立カ被告人ハ明言シタル意思ニ反セサル限リハ二者兼モ低觸スル
所ナク其中立ハ一カ法定期間内ニアリテ被告人又ハ辯護人ハ内何レヨリカ期間内ニ上告趣意
書ヲ差出シタルトキハ其上告ハ適法ニ成立シタルモノトス故ニ本件ニ付テハ上告ハ成立シ既
ニ本院ニ緊固スルヲ以テ被告人及ヒ辯護人ノ上告趣意ニ對シ左ニ判決ヲ與フルモノナリ
辯護人ノ上告趣意ヲ要スルニ原判決ハ重禁錮六月罰金二十圓監視六月ニ處シタル第一審判決
ヲ改メ重禁錮四月罰金四圓監視六月ニ處シ其刑ノ適用ヲ改メタルノ理由ヲ付セサルハ適法ナ
リト云フニ在レトモ○第二審ニ於テ第一審ト其量定ヲ異ニシタルノ理由ヲ判文ニ明示スルヲ
要セス

被告春吉ノ辯護人岸本辰雄ノ理由追加書第一ハ佐藤孫四郎ノ豫審調書ハ契印ヲ欠クヲ以テ無
効ノモノナルニ之レヲ斷罪ノ資料ニ供シタルハ適法ナリト云フニ在レトモ○訴訟記録ヲ查閱
スルニ證人佐藤孫四郎ノ豫審調書ニハ契印ヲ欠キタル個所ナク同人ト被告ト對質調書ニ契印
ヲ欠キタル個所アリト雖モ原判決ノ末尾ニ「繼印ナキ被告ト佐藤孫四郎ノ對質調書ヲ斷罪ノ證
ニ供シタルハ失當ナルヲ以テ被告ノ控訴ハ結局理由アリトス」ト記載シアルニ依リテ見レハ原
判決ニ右對質調書ヲ證據トナシタルニ非サルコト明瞭ニシテ本論旨ハ原判決ニ副ハサルモノ
トス「第二ハ原院公判始末書ハ之レヲ作製シタル場所ノ記載ナク無効ノ文書ナルヲ以テ裁判所
構成及訴訟手續ノ當否ヲ識認スルニ由ナク從テ適法ノ判決ニアラスト云フニ在レトモ○該公
判始末書ノ冒頭ニ於テ「願館控訴院ニ於テ云々」ト記載シアリテ其公判ヲ開廷シタル裁判所ニ於
テ作製シタルモノト認メ得ヘキヲ以テ右公判始末書ハ作製ノ場所ノ記載ナク無効ノ文書ナリ
トスルヲ得ス依テ上告論旨ハ其理由ナキモノトス「辯護人田中藤次郎代理人井本常治ノ理由追
加書ハ岸本辯護人ノ論旨ト同一ナルヲ以テ重テテ説明セス
右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ本按上告ハ棄却ス
明治三十一年十二月五日大審院第一二刑事聯合部公廷ニ於テ檢事小宮三保松立會宣告ス

○私印私書偽造行使等ノ件

明治三十一年第七六九號
明治三十一年十二月五日宣告

○判決要旨

第一審裁判所ニ於テ數罪俱發一ノ重キニ從テ處斷シタル場合ニ於テハ俱發シタル數罪全部ニ對シ單ニ一刑ヲ言渡シタルモノニシテ其言渡ハ不可分ナリ從テ其中ノ一罪ニ對シテノミ控訴シタル場合ト雖モ第二審裁判所ハ全部ニ付審理スヘキモノトス

第一審 札幌地方裁判所 第二審 函館控訴院

被告人 吉井常太郎
森山吉藏

右常太郎カ私印私書偽造行使詐欺取財常太郎吉藏カ官文書偽造私印偽造行使詐欺取財被告事件ニ付明治三十一年六月二十一日函館控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ原院檢察事長山本昌行ハ被告常太郎カ官文書偽造行使ノ點ニ付キ上告申立ヲ爲シ被告吉藏ハ原院判決ニ對シ上告ヲ爲シタリ因テ本院ニ於テ裁判所構成法第四十九條ニ基キ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

原院檢察事長上告ノ要旨ハ被告常太郎カ第一審判決書ニ記載ノ如ク私書偽造行使官文書偽造行使私印偽造行使詐欺取財ノ數罪ニシテ其ノ重キ官文書偽造行使ノ所爲ニ從ヒ輕懲役七年ニ處スト言渡シタル判決ニ對シ被告常太郎ハ各所爲中官文書偽造私印偽造使用ノ點ノミニ

付キ控訴ヲ爲シタリ然ルニ其ノ官文書ナルモノハ規則ニ概觸シ官文書ト認ムルヲ得サルニ付其意見ヲ述ヘ之ヲ無罪トスルトキハ他ノ犯罪中執行スヘキ刑期ヲ定メ言渡アルヘキモノトノ申立ヲ爲シタルニ原院ハ此ノ申立ニ對シ被告常太郎ハ官文書偽造行使ノ點ニ付控訴ヲ爲シ他ノ數個ノ所爲ニ對シテハ控訴ナク其儘確定シ本院ノ審理モ茲ニ及ハサレハ隨テ其輕重ヲ調査スルニ山ナキカ故ニ立會檢察事ノ申立アルニ拘ラス已ニ確定シタル原院判決ノ認メシ犯罪行爲ニ對シ特ニ刑ノ言渡ヲ爲サル所以ナリトノ言渡ヲ爲シタリ按スルニ原院ハ數個ノ犯罪各々其刑期ヲ明示シタルモノト數罪中一ノ重キニ從テ其ノ一罪ノミノ刑期ヲ定メタルモノト同一視シタルモノト信ス凡ソ公訴ノ要ハ刑ヲ適用スルヲ目的トスルモノナルヲ以テ裁判所ハ其目的ヲ達セシムルニ必要ナル處分ヲ爲サルヘカラス前段ノ場合ハ何レノ刑モ目的ヲ達シ得ヘキモ後段ノ場合ニ在テハ刑期ヲ定メタル一罪ノ外他ハ其明定アラサルカ故ニ一ノ重キ犯罪ニ對シ上訴アリタルトキハ他ノ犯罪ハ全ク確定シタリト爲シ執行ヲ爲スコトヲ得ス然レハ第一審ノ判決ハ事實點ニ於テハ確定シタルモ疑律點ニ於テハ一ノ重キ刑ニ隨伴シテ控訴シタルモノト云ハサルヲ得ス此ノ場合ニ在テ第一審裁判所ノ執行スヘキ要件トシテ刑期ヲ定メ言渡シタルモノヲ取消シタルトキハ其結果トシテ他ノ數罪中ニ於テ刑期ヲ定メ公訴ノ目的ヲ達セシムルノ處分ヲ爲スヘキハ當然ナルニ之レヲ爲サス又之レヲ爲サントシテ得ヘカラサルノ一理由トシテ控訴セサル數罪ニ付テハ本院自ラ審理ヲ爲サルヲ以テ犯罪情狀ノ輕重ヲ知ル能ハスト云フニ在ルモ是亦其當ヲ得サルモノト信ス何トナレハ犯罪行爲情狀ノ如何ハ第一審判決文上

ニ明載シタル事實ニ徴シ明ニシテ上訴裁判所ニ於テ刑事訴訟法第二百八十七條ニ依リ判文上ノ事實ニ徴シ擬律ヲ爲スト撰フ處アラサルモノナリト云フニ在リ○因テ審察スルニ第一審裁判所ニ於テ數罪俱發一ノ重キニ從テ處斷シタルトキハ則チ俱發シタル數罪全部ニ對シ單ニ一刑ヲ言渡シタルモハナレハ其言渡ハ實ニ不可分ハモト云ハサル可カラズ故ニ其中ハ一罪又ハ數罪ニ對シテハハ控訴ヲ爲ス旨ハ申立アリテ全部ニ對シテ控訴スル旨ハ申立カキトキト雖モ控訴裁判所ハ之レヲ分割シテ其控訴申立ナキ部分ハ既ニ確定シタリトナシ其控訴申立アリタル部分ノミニ付審判スルヲ得可カラズ如斯場合ハ則チ常ニ全部ニ對スル控訴ナルヲ以テ其全部ニ付審判セサル可カラズ然ルニ本案私印私書偽造行使詐欺取財官文書偽造行使事件中官文書偽造行使罪ノミニ審判シ他ノ私印私書偽造行使詐欺取財ノ罪ニ付テハ第一審判決ヲ以テ已ニ確定シタリトナシ審判ヲ爲サ、リシハ失當ノ判決ニシテ原院檢察ノ上告ハ結局其理由アルモノトス

吉藏上告趣意ノ第一ハ原判文ニ金三百圓ヲ騙取シタルモノトアレトモ右ノ金員ハ今野左祐ノ保證ニ依リ借用證書ヲ差入レ借用シタル金圓ニシテ騙取シタルモノニアラス第二ハ貸下地坪敷改正アリタルトテ貸下指合ハ無効トナルヘキモノニアラス然ルニ無効ナリト判決シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ○右ノ論旨ハ承審官ノ職權ニ存スル事實ノ認定ヲ非難スルニ過キサレハ上告適法ノ理由トナラス

第三ハ杉木佐吉へ差入レタル金三百圓ノ借用證書ニ對シ判決ヲ爲サ、ルハ理由不備ノ裁判ナ

リト云フニ在レトモ○被告カ杉木佐吉ヲ欺罔シテ金三百圓ヲ騙取シタル事實理由ハ原判文ニ明示スル所ニシテ其借用證書ノ如キモノニ對シ判決ヲ與フヘキモノニアラサレハ原判決ハ相當ニシテ上告ハ其ノ理由ナキモノトス

辯明ノ要旨ハ原院檢察ノ答辯ニ對スル辯明ナルノミナラス其ノ論述スル所ハ上告趣意ヲ敷衍スルニ過キサルヲ以テ是亦上告ノ理由トナラス

右ノ理由ナルヲ以テ吉藏ノ上告ニ對シテハ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ之レヲ棄却ス
原院檢察長ノ上告ニ對シテハ刑事訴訟法第二百八十六條ニ依リ原判決ノ全部ヲ破毀シ更ニ審判セシムル爲メ宮城控訴院ニ移ス

明治三十一年十二月五日大審院第一第二刑事聯合部公延ニ於テ檢察小宮三保松立會宣告ス

○監守盜等ノ件

明治三十一年第八〇六號
明治三十一年十二月五日宣告

○判決要旨

村役場ノ雇ニシテ村長ノ命ヲ受ケ監守中ノ金圓ヲ竊取シタル所爲ハ監守盜罪ヲ構成ス

村役場雇ノ監守盜

(参照) 刑法中官廳官署ニ關スル條項ハ公署ニ適用シ官吏ニ關スル條項ハ公吏ニ適用シ
官ノ印文書及免狀、鑑札ニ關スル條項ハ公署ノ印文書及免狀、鑑札ニ適用ス(明治二十三年
法律第百號)

第一審 長野地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 上野有志 辯護人 鹽入太輔

右監守盜及ヒ公文書偽造行使被告事件ニ付明治三十一年七月六日東京控訴院ニ於テ言渡シタ
ル判決ニ對シ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル
左ノ如シ
被告ノ上告趣意書ハ被告ハ村役場雇ニシテ官吏ニ準ス可キ公吏ノ資格ヲ有スルモノニアラス
村役場雇ノ如キハ他ノ官衙ノ雇ト異ナリ村長ノ獨斷ヲ以テ進退シ得可キ者ニシテ其位置ハ殆
ント小使ト同シト云フモ經言ニアラス然ルニ原院カ被告ニ對シ刑法第二百八十九條ヲ適用シ
タルハ擬律錯誤ナリト信ス又役場ニ於テ不用ニ屬セシ反古代金即チ見積金二十二圓七十八錢
六厘ヲ除キタル餘金二十三圓ハ村長始メ各吏員ニ於テ拋棄セシ金員ナルヲ以テ被告力之ヲ毀
消スルモ監守盜ト云フ可カラズ然ルニ之ヲ監守盜ナリト認定セラレタルハ不服ナリト云ニ在
レトモ○原判決ニ認メタル所ニ依レハ被告ハ青木村役場雇ノ職ニ在テ同村長ノ命ヲ受ケ同役
場古書類竇却方ヲ擔任シ其竇却代金ハ中三十四圓程ヲ監守中ニ竊取シタル事實ニシテ被告ハ
其取扱フ職務ニ付罪ヲ犯シタルモノナレハ刑法上公吏タルハ責任ヲ受ケヘキハ當然ニシテ原
院カ明治二十三年法律第百號ニ依リ刑法第二百八十九條第一項ヲ適用シタルハ相當ナルヲ以

テ上告論旨ノ前段ハ其理由ナク又其後段ハ事實ノ認定ヲ非難スルニ過キサルヲ以テ上告ノ理
由トナラス

被告及ヒ辯護人鹽入太輔連署ノ上告趣意書ノ第一ハ本件被告事件ハ監守盜ニアラサルモノヲ
監守盜ノ罪トナシ其刑ヲ適用シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ○前院ノ如ク原院ハ被告
カ監守盜ノ事實ヲ認メ之ニ相當スル法律ヲ適用シタルヲ以テ不法ノコトナシ其第二ハ委託金
費消罪ノ刑ヲ適用シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ○原判決ハ委託金費消ノ事實ヲ認メタ
ルコトナク又委託金費消罪ノ刑ヲ科シタルコトナキヲ以テ本論旨ハ原判決ニ副ハサルモノト
ス

辯護人鹽入太輔ノ上告擴張論旨ノ第一乃至第五ハ要スルニ監守盜罪ヲ構成スルニハ官吏若ク
ハ公吏ニシテ其所爲ハ官吏若クハ公吏ノ取扱フ可キ職務ニ係ラサル可カラズ然ルニ被告ハ村
役場ノ雇員ニシテ公吏ト云フ可キモノニアラス又紙屑ヲ竇却スル如キハ公吏ノ取扱フ可キ職
務ニアラサルニ拘ラス被告ノ所爲ヲ以テ監守盜ト爲シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ○其
理由ナキコトハ被告ノ上告趣意書前段ニ對スル説明ニ依リ了解ス可シ

其第六ハ原判決中然ラハ原裁判所ニ於テ被告カ雇員タル公吏ノ身分ヲ有シ其ノ保管ニ係ル公
金ヲ毀消シタル事實ヲ認メナカラズ云々ト判決セシハ不法ナリ第一審判決中斯ル事實ヲ明カニ
認メタル處ナシ假リニ之アリトスルモ監守盜ハ職務上當然保管スルモノニ係ルヲ要ス本件被
告ハ雇員ナルカ故ニ公金ヲ保管スルノ職務ヲ有セス唯一時委託ヲ受ケタルニ過キス即チ被告

ノ職務外ノ事項ニ係ルヲ以テ監守盜ニアラスト云フニ在レトモ○第一審判決ニ依レハ被告ハ青木村役場勤務中村長ノ命ヲ受ケ同役場ノ不用書類ヲ賣却シタル代金ノ中三十四圓程ヲ擅ニ費消シタル事實ヲ認メアルヲ以テ原院ハ第一審判決ニ認メサル事實ヲ掲ケ以テ其認メタルモノト爲シタルニアラサレハ本論旨ノ前段ハ其理由ナク又其後段ノ理由ナキコトハ被告ノ上告趣意書前段ニ對スル説明ニ係リ了解ス可シ

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ本件上告ハ之ヲ棄却ス
明治三十一年十二月五日大審院第二刑事部公延ニ於テ檢事岩野新平立會宣告ス

○詐欺取財ノ件

明治三十一年第九三七號
明治三十一年十二月五日宣告

○判決要旨

一旦賣却シタル不動産ノ未タ登記ヲ經由セサルヲ奇貨トシテ再ヒ他へ賣却シタル所爲ハ冒認販賣罪ヲ構成ス

第一審 浦和地方裁判所熊谷支部 第二審 東京控訴院

被告人 岡戸熊吉

右熊吉ニ對スル詐欺取財被告事件ニ付明治三十一年九月十六日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不當トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審理判決スルコト左ノ如シ

上告趣意書ハ假リニ原院カ認メタル如ク被告ニ於テ二重ニ不動産ヲ賣却シタル事實アリトスルモ第一第二共總テ登記ヲ經タルモノニアラサレハ正式ニ所有權ノ移轉ナキヲ以テ法律上罪トナルヘキモノニ非ス然ルニ原院ニ於テ有罪ノ判決ヲ與ヘタルハ擬律錯誤ナリト云フニ在レトモ○賣買ハ承諾ニ依テ成立スルヲ以テ登記ハ有無ニ拘ハラズ所有權ハ當時買主ニ移轉セルモハナリ故ニ被告ニ於テ承諾上所有ハ不動産ヲ三浦繁明ニ賣却シタル上ハ設令登記ヲ經サリシモ其所有權ハ既ニ繁明ニ移轉シ被告ハ所有物ニアラサレハ重テ之レヲ横田春太郎ニ賣却シタルハ登記ヲ經タルト否ニ拘ハラズ冒認販賣ノ罪ヲ構成スルヲ以テ原院ハ不法ニアラス同擴張書ノ要旨ハ本件賣渡證書等ハ實際自分ノ作成シタルモノニアラサルヲ以テ登記所等ニ就テ審査ノ上無罪ノ判決アラント求ムト云フニ在レトモ○本院ハ事實ノ覆審ヲ爲スヘキ法衙ニアラサルヲ以テ本論旨ハ採用セス

右ノ理由ニ依リ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ本件上告ハ之ヲ棄却ス
明治三十一年十二月五日大審院第二刑事部公延ニ於テ檢事小宮三保松立會宣告ス

○詐欺取財ノ件

明治三十一年第一〇九四號
明治三十一年十二月五日宣告

○判決要旨

所有權ハ賣買ニ依テ直ニ買主ニ移轉ス從テ賣却シタル不動産ノ未タ登記ヲ經サル場合ト雖モ重テ他へ賣渡シタルトキハ冒認販賣罪ヲ構成ス而シテ第二ノ買主ノ登記ヲ經タルト否トハ犯罪ノ成立ニ影響ヲ及ホサス

第一審 甲府地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 坂本忠成

右忠成ニ對スル詐欺取財被告事件ニ付キ明治三十一年十一月七日東京控訴院ニ於テ言渡タル判決ヲ不當トシ同院檢事長波多野敬直ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審理判決スルコト左ノ如シ
上告趣意ハ被告人ハ所有ノ不動産若干筆ヲ明治三十年十二月十五日ニ名取竹八ニ賣與セシモ登記手續ヲ經由シナキテ寄賣トシ右不動産ノ内田畑十六筆ヲ明治三十一年一月七日ニ坂本喜重へ又山林一筆ヲ明治三十一年一月八日ニ名取忠重へ自己ノ所有不動産ナリト欺キ重テ賣與セシモノナルコトハ原院ノ認定セシ事實ナリトス而シテ不動産ノ賣買ハ登記ヲ經ルモ當事者雙方ノ間ニ於テハ合意ニ依リ其賣買ハ成立シ該不動産ノ所有權ハ買主へ直ニ移轉スヘキハ自

然ノ結果タリ然ルニ其所有權ヲ脫離セシ賣主ニ於テ重テ之ヲ第三者ニ賣與シ登記ヲ受ケシ上ハ第一買主カ業既ニ獲得セシ所有權ヲ侵害セシモノト謂フヘシ將々冒認販賣ノ罪ハ其財産ヲ冒認セラレタルモノト冒認者ノ欺罔ニ依リ之ヲ買受ケタルモノトノ二者ニ對スル犯罪ニシテ第二買主ノ被害者タルヘキ場合ノミチ罪トシ第一買主ノ被害者タルヘキ場合ヲ罪トセサルノ法則ニアラス故ニ本件ノ事實ハ刑法第三百九十三條ニ擬シ詐欺取財ヲ以テ論斷スヘキ輕罪犯ナルニ原院ニ於テ前顯ノ事實ヲ認メナカラ第二買主ノ損害ナキ場合ハ冒認販賣罪ヲ構成セストノ第一審判決ヲ是認セシハ疑律錯誤ノ裁判ナルヲ以テ破毀ヲ求ムト云フニ在リ○因テ審案スルニ上告論旨ノ如ク冒認販賣罪ノ成立ニ付テハ必シモ其第二ノ買主カ損害ヲ受クヘキコトヲ要スルモノニアラス又登記ハ賣買ノ要式ニアラスシテ賣買ハ承諾ニ依テ成立シ所有權ハ當時直ニ移轉スルモノナルヲ以テ登記ヲ經スシテ賣買シタル不動産ト雖モ重テ之ヲ他へ販賣スルニ於テハ刑法第三百九十三條第一項他人ノ(中)署不動産ヲ冒認シテ販賣云々トアルニ該當スルモノニシテ其第二買主カ登記ヲ經タルト否ハ冒認罪ノ成立ニ關係ナキモノナルニ原院ニ於テ被告ハ已ニ名取竹八ニ賣却シタル不動産ヲ以テ其登記ヲ經カリシテ寄賣トシ更ニ登記ヲ經テ坂本喜重名取忠重ニ賣却シタル事實ヲ認メナカラ法律上罪トナラズト判決シタルハ疑律錯誤ナリ然レトモ原院判決ニハ證據ノ明示ナキヲ以テ本院ニ於テ直ニ之ヲ更正スルニ由ラントス右ノ理由ニ依リ刑事訴訟法第二百八十六條ニ從ヒ原院判決ヲ破毀シ本件ヲ名古屋控訴院ニ移ス

○官文書偽造行使等ノ件 明治三十一年第一〇九五號 明治三十一年十二月十二日宣告

○判決要旨

公證人ニシテ假裝ノ事實ニ基キ公正證書ヲ作成スルモ他人ヲ害スルノ惡意ナ
ク又害ヲ生スヘキモノニ非サルトキハ公正證書偽造行使罪ヲ構成セス

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 〔山村良貴 吉村忠道〕

右兩名カ官文書偽造行使詐欺取財未遂被告事件ニ付明治三十一年十月二十七日東京控訴院ニ
於テ言渡シタル判決ニ對シ同院檢察事長檢察野崎啓造ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百
八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ
上告趣意第一點ハ原判決ハ公正證書偽造ノ點ニ對シ(前略)該公正證書中英次耶利三郎共ニ之ヲ承
諾シ居ルヲ以テ良貴ハ當事者ノ表示シタル假裝ノ意思ヲ證書ノ内容中ニ記録シタリト云フニ
外ナラス(中略)尙モ當事者ノ意思ニ基ク以上ハ假令假裝ノ事實ヲ記録スルモ偽造ノ犯罪ヲ構成

ス可キモノニ非スト說明セリ然レトモ公證人カ單ニ當事者ノ申立ノ不實ナルコトヲ知リナカ
ラ之ヲ記録シタル場合ト公證人自身カ當事者タルニ拘ラス相手方及ヒ第三者ト通謀シ當事者
ニ非サルモノヲ當事者トシ賣買貸借ナキモノヲ賣買貸借シタリト記述虛偽ノ公正證書ヲ作り
タル場合トハ之ヲ區別セサル可カラズ即チ前者ニ在テハ職務上理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒
ムヲ得ス又其申立ノ眞否ヲ甄別取捨スヘキモノニ非ス且ツ公證人自身ニ於テ事實ヲ虛構シタ
ルモノニ非サルカ故ニ固ヨリ之カ刑事責任ヲ負フヘキモノニ非スト雖モ後者ニ在テハ公證人
規則ニ違背シ囑託ナキモノヲ囑託アリトシ金錢ノ授受貸借ナキモノヲ授受貸借シタリトシ公
證人自身事實ヲ虛構シタルモノナレハ單ニ職權濫用ニ止マラスシテ公正文書偽造ノ犯罪ヲ構
スルモノトス原判決ハ(前略)身公證人タルノ故ヲ以テ其證書ニ自己ノ名義ヲ表示スル能ハス乃
チ利三郎ト熱議ノ上自己ノ親族上村英次郎ノ名義ヲ用ヒ之レヲ實行セントシ情ヲ告ケテ英次
郎ニ謀リシニ英次郎モ亦之ヲ承諾シタリ(中略)利三郎ハ其所有ノ木彫毘舍門天偶像外三百四十
餘點ヲ代金千三百五十四ニテ英次郎ニ賣渡シタル旨ノ動産賣買公正證書(中略)建家三棟ヲ抵當
トシ英次郎ヨリ金千四百圓ヲ借受ケタル旨ノ金圓貸借公正證書ヲ作成シ云々ト記載シ被告良
貴カ英次郎利三郎ト共謀シ事實ヲ虛構シタルコトヲ認定シタルニ拘ラス說明後段ニ於テ冒頭
摘示ノ如ク記載シ恰モ良貴カ英次郎ト通謀シテ事實ヲ虛構シタルニ非スシテ單ニ利三郎英次
郎ノ表示シタル假裝ノ事實ヲ記述シタルニ過キサル如ク說明シタルハ裁判ノ理由ニ阻礙アリ
擬律錯誤アル違法ノ判決ナリト云ヒ其第二點ハ一步ヲ退キ公證人カ當事者ト共謀シ不實ノ事

假裝ノ事實ニ基ク公正證書

項ヲ記録シタル所爲ヲ公正文書偽造ニ非ストスルモ當事者カ公證人ノ親屬タル場合ト身分上ノ關係ナキ場合ハ之ヲ區別セサル可カラズ即チ公證人規則第三十六條ニ依リ公證人ハ親屬ノ爲メ證書ヲ作ルヲ得サルヲ以テ親屬カ當事者タル場合ハ公證人ハ證書ヲ作ルノ職權ナク全ク一私人ノ資格ニ過キサレカ故ニ證書中直接又ハ間接ニ親屬關係ヲ示定シタル場合ハ格別其然ラスシテ親屬タルコトヲ隱蔽シ恰モ親屬ニ非サル者ノ囑託アリタル如ク裝ヒ有效ナル公正證書ト誤信セシムル證書ヲ作リタルトキハ公證人ノ名義ヲ濫用シ偽造ノ公正證書ヲ作リタルモノナルヲ以テ公正文書ノ偽造ヲ以テ論セサル可カラズ原判決ハ事實ノ認定ニ於テ(前略)自己ノ親族上村英次郎ノ名義ヲ用井云々ト記載シナカラ漠然當事者ノ意思ニ基ク以上ハ假令假裝ノ事實ヲ記録スルモ偽造ノ犯罪ヲ構成スヘキモノニ非スト說明シ當事者ノ身分上ノ關係ナキ一般普通ノ場合ト其法律上ノ關係並ニ效力ヲ異ニスル本件親屬ノ當事者タル特別ノ場合ヲ混同シ直ニ文書ノ偽造罪ヲ構成スルモノニ非スト判定セシハ擬律ノ錯誤アル違法ノ判決ナリト云ヒ其第三點ハ原判決ハ執行文付與ノ行爲ニ對シ(前略)其貴ハ之ヲ諾シ且此機ニ乘シ利三郎ノ他ノ財産ヲモ差押云々忠道ヲシテ英次郎ノ遺族ニ交渉セシメタリ是ニ於テ忠道ハ英次郎ノ家督相續人上村タキノ承諾ヲ得テ公正證書執行文付與ノ申請ニ關スル必要ナル書類ヲ作成シタキヲシテ之ニ押印セシメ該書類ヲ其貴ニ交付セシニ其貴ハ(中略)貸借公正證書正本ノ末尾ニ利三郎ニ對シ該正本ノ強制執行ヲ實施スルカ爲メ此執行文ヲ亡上村英次郎相續人上村タキニ付與ストノ旨ヲ附記シ之ヲ忠道ニ交付シ云々ト記載シ其貴カ親族英次郎ノ爲メニ作成シタル無効

ノ公正證書ヲ有效ナル如ク裝ヒ之ニ對シ權限ナキ執行文ヲ附記シ及ヒ親屬タキノ爲メニ執行文ヲ付與スル能ハサルニ親屬ニ在ラサル者ノ申請アリタル如ク裝ヒ有效ナル執行文ト誤信セシムル附記ヲ與ヘタル事實即チ公正文書偽造ノ事實ヲ認定シナカラ其貴英次郎タキノ親屬關係及ヒ公證人規則第三十六條ノ規定ヲ無視シ英次郎相續人タキノ承諾アル申請ニ基キ之ヲ付與シタルモノナレハ之ヲ偽造ナリト云フヲ得スト判定シタルハ擬律ニ錯誤アル違法ノ判決ナリト云ヒ其第四點ハ原判決ハ前略公正證書ニ基キ利三郎ノ有體財産合計六十一點ヲ差押ヘタル所爲ニ對シ後日英次郎若クハ其相續人ノ名義ニ依リ對抗セラルコトハ當初利三郎ノ承諾セシ所ナルヲ以テ該強制執行ノ行爲ハ詐欺取財ノ罪ト爲ルヘキモノニ非スト說明セリ然レトモ正當ノ裁判手續ヲ經ス事實ヲ假裝シタル虛偽ノ貸借公正證書ニ基キ親屬ノ關係上無効タルヘキ執行文ヲ有效ニ付與シタル如ク裝ヒ之ヲ利用シ直ニ強制執行ヲ爲シタル行爲ハ明カニ詐欺取財未遂ノ犯罪ヲ構成スルモノナルヲ以テ其所爲ノ罪トナル可キモノニ非スト爲シタル判決ハ擬律ニ錯誤アル違法ノ判決ナリト云フニ在レトモ○原院ノ認メタル所ニ依レハ被告其貴ハ其利三郎ニ對シテ有スル債權ヲ保全スルハ目的ヲ以テ利三郎及ヒ自己ノ親屬英次郎ニ謀リ利三郎ノ財産ハ之ヲ英次郎ニ賣渡シ又其不動産ハ之ヲ同人ノ債權ニ對スル抵當ト爲シタル如ク假裝ハ契約ヲ爲サシメ兩名ハ其假裝ハ契約ヲ爲ス事ヲ承諾シテ被告其貴ハ公證人役場ニ到リ其貴ハ右兩名ハ承諾ニ基キ公正證書ヲ作り其後英次郎死亡シ其相續人タキハ申請ニ因リ該公正證書正本ニ執行文ヲ付與シ之ヲ以テ利三郎ニ對シ強制執行ヲ爲サントシタル事實ニシテ

被告、其貴が他人ヲ害スルハ惡意アリタルコトハ見ル可キモノナク、又其所爲タル害ヲ生ス可キモノニ非サルヲ明瞭ナリ然ラハ則チ單ニ其事實ヲ假裝シタルノ故ヲ以テ公正證書偽造行使ノ罪ヲ構成セサルヲ疑フ可カラズ、又其執行文ヲ付與シタルハタキノ承諾ニ出テタルモノニシテ公正證書ノ偽造ニアラサルハ勿論之ニ因テ強制執行ヲ爲サントシタルハ固ヨリ利三郎カ假裝ノ契約ヲ承諾シタル當然ノ結果ニシテ欺罔恐喝等ノ手段アルニアラサレハ之ヲ以テ利三郎ニ對スル詐欺取財ノ行爲ト云フ可カラサルヲ明カナリ而シテ親屬ノ爲メ公正證書ヲ作ルコトハ公證人規則ノ禁スル所ナルヲ以テ同規則ノ制裁ヲ受クルハ格別公正證書偽造罪ヲ以テ論ス可カラサルヲ言フ俟タズ故ニ上告論旨ハ總テ其理由ナシ

其第五點ハ原判決ハ被告忠道ノ公正證書偽造詐欺取財未遂ノ所爲ニ對シ其貴カ執行文付與並ニ強制執行ノ行爲罪ト爲ルヘキモノニ非ス隨テ之ニ加功セシ忠道ノ行爲モ亦同一ノ理由ニ依リ罪トナラスト説明セリ然レトモ忠道ノ行爲ノ罪トナルヘキヤ否ハ必スシモ其貴ノ所爲ト運命ヲ共ニスルモノニ非ス即チ忠道カ其貴ト英次郎タキノ親屬タルコト公正證書成立ノ虛偽タルコトヲ知悉シテ加功シタル場合ハ其行爲ノ犯罪ヲ構成スルモノナレトモ其之ヲ知ラサルニ於テハ忠道カ加功ノ行爲固ヨリ罪ト爲ルヘキモノニ非ス原判決ハ(前)恩熊谷直方等カ(中)恩利三郎ト英次郎トノ間ニ成立シタル古金千四百圓ノ貸借公正證書アルコトヲ聞知シ之ヲ利用シテ其差押ヲ爲サントシ被告忠道カ其貴ト舊主從ノ緣故アルコトヲ幸ヒ服部季太郎ヲ介シテ忠道ニ依頼セシテ以テ忠道ハ之ヲ其貴ニ謀リシニ其貴ハ之ヲ諾シ云々ト記載シタルノミニシテ忠

道ト英次郎タキ間ノ親屬ナルコトヲ知悉セシヤ否ヤ公正證書ノ假裝ナルコトヲ知悉セシヤ否ヤチ明示セサルカ故ニ二者何レニ認定シタルヤノ判明セサルニ拘ラス此點ニ於テ其所爲罪ト爲ラストセスシテ其貴ノ所爲罪ト爲ラサル以上ハ忠道ノ行爲亦罪ト爲ル可キモノニ非スト既明シ其貴ト其運命ヲ共ニセシメタルヲ見レハ忠道カ其貴英次郎タキ間ノ親屬タルコト及ヒ假裝ノ公正證書タルコトヲ知テ加功シタル事實ヲ認メ猶且其所爲ノ罪ト爲ラスト判定シタルカ如ク一ハ知情共謀ノ事實ヲ判定シタルカ如ク一ハ知情共謀ノ事實ヲ判定シ他ハ其有無ノ明示ヲ缺キタルモノニシテ結局裁判ノ理由ニ不備アリ顯爾アル違法ノ判決ナリト云フニ在レトモ

●被告忠道カ本件公正證書ノ假裝ナル事實及ヒ英次郎タキカ被告其貴ト親屬ナル事ヲ知ラサルトキハ勿論其之ヲ知リタルトキト雖モ被告其貴ノ所爲ニシテ罪トナラサル以上ハ被告忠道ノ所爲ノ罪トナル可キ理由ナケレハ被告忠道カ右ノ事實ヲ知リタルト否トハ惡意之ヲ説明スルヲ要セサルヲ以テ原判決ハ所論ノ如キ違法ナシ

右ノ理由ニ依リ刑事訴訟法第二百八十五條ニ則リ本件上告ハ之ヲ棄却ス

明治三十一年十二月十二日大審院第二刑事部公庭ニ於テ檢事小宮三保松立會宣告ス

○官文書偽造行使等ノ件 明治三十一年第一一三〇號
明治三十一年十二月十二日宣告

○判決要旨

反古紙ヨリ郡長ノ印影ヲ切取り引出切符用紙ノ要所ニ貼附シテ行使シタル所
爲ハ引出切符ノ偽造ナリ

第一審 新潟地方裁判所 第二審 東京控訴院
被告人 渡邊安之

右官文書偽造行使及詐欺取財被告事件ニ付明治三十一年十一月十四日東京控訴院ニ於テ言渡
シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ
大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審判スルコト左ノ如シ
上告趣意書ノ要旨ハ原院ニ於テ被告ニ最終ノ辯論ヲ爲サシメス終結セラレタルハ違法ナリト
云フニ在レトモ○原院公判始末書ニ依レハ裁判長ヨリ被告ニ申立ルコトナキヤ否ヤ問ヒ被
告ハ最早申立ツヘキコトナシト答ヘタル旨記載シアリテ審理手續上所論ノ如キ違法ノ廉アル
ヲ見ス本論旨ハ其謂レナキモノトス上告趣意撤廢書ノ要旨第一點ハ被告カ造リタル文書ハ反
古紙ト反古紙中ニアリタル印影ノ反古紙ヲ切取りタルモノトテ貼リ合セ以テ其形狀ノミヲ模
造シタルモノニシテ恰モ紙幣ニ於ケル玩弄紙幣ト同一ナルモノタリ即チ模造ニシテ偽造ニア
ラサルモノナルニ偽造トシテ擬律セラレタルハ違法ナリト云フニ在レトモ○原判決ニ依レハ

被告ハ反古紙中ヨリ郡長並河一等ノ印影ヲ切取り引出切符用紙ノ要所ニ貼附シ恰モ捺印シタ
ル如クニ仕做シ以テ引出切符ヲ偽造シタルモノニシテ右印影及引出切符用紙ハ偽造ノ材料ニ
供シタルニ過キス故ニ原院決之ヲ偽造トシテ處斷シタルハ相當ナリトス同第二點ハ元來新江
水利組合ハ組合會ノ議決ヲ以テ組合ニ係ル現金ノ取扱ヲ第百十六銀行ニ囑託シ互ニ手續及取
扱主任者ノ印鑑トヲ示シ合ヒ組合カ第三者ニ對シ支拂フヘキモノハ即チ支拂證書ヲ造リ之ニ
相當ノ捺印及ヒ手續ヲ爲シ以テ現金トシ額面金額ニ對スル受領證書ヲ管理者ニ差出サシメタル
モノニシテ其管理者カ造リタル書面ハ所謂金錢ト交換スヘキ約束手形ト其性質及ヒ手續ヲ同
フス然レハ則チ之ヲ偽造シタルモノトセハ刑法第四章第二節中明文ナキモノナルモ證書類ト
シテ擬律スヘキハ相當ナルヲ信ス然ルニ原院ハ之ヲ以テ引出切符ヲ偽造スト云ヒナカラ刑法
第二百三條ヲ適用セラレタルハ違法ナリト云フニ在レトモ○原判決ニ依レハ本件ノ引出切符
ハ刑法第二百九條ニ所謂裏書ヲ以テ賣買スヘキ證書ニ非サルハ勿論金額ト交換スヘキ約定手
形ト認ムヘキモノニモアラサレハ本件被告ノ所爲ヲ以テ同條ニ問擬スヘントノ論旨ハ到底相
立タス
右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ則リ本件上告ハ之ヲ棄却ス
明治三十一年十二月十二日大審院第二刑事部公庭ニ於テ檢事小宮三保松立會宣告ス

○私印盜用私書偽造行使等ノ件

明治三十一年第一〇六六號
明治三十一年十二月十三日宣告

○判決要旨

擬律ニ錯誤アルコトヲ認メタルニ拘ラズ被告人ノミテ控訴ニ係ルヲ以テ刑事訴訟法第二百六十五條ノ法則ニ基キ原判決ヲ變更シテ被告人ノ不利益トナヌコトヲ得サルヲ理由トシテ控訴ヲ棄却シタル判決ハ不法ナリ

(參照) 被告人辯護人又ハ法律上代理人ノミテ控訴ヲ爲シタルトキハ原判決ヲ變更シテ被告人ノ不利益ト爲スコトヲ得ス(刑事訴訟法第二百六十五條一項)

第一審 富山地方裁判所高岡支部 第二審 大阪控訴院

被告人 高澤彦三郎

右彦三郎ニ對スル私印盜用私書偽造行使等被告事件ニ付明治三十一年十月二十二日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ服セス被告ヨリ上告ヲ爲シタルニ依リ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ整理スルコト左ノ如シ

上告趣意書第二點ノ趣旨ハ原判決ノ理由ニ第一審判決カ之レヲ刑法第二百十條第二項ニ間擬シタル失當アリト雖モ本件ハ被告ノミテ控訴ニ係ルヲ以テ之レヲ被告ノ不利益ニ變更セストシ控訴ヲ棄却セラレタリト雖モ刑事訴訟法第二百六十五條ノ趣旨ハ刑期ヲ不利益ニ變更セス

ト云フニアリテ判決主文ヲ變更セスト云フニアラス而シテ判決ノ主文ハ同第二百六十一條ニ從フ可キモノナルヲ以テ如此已ニ第一審判決擬律ノ錯誤アルヲ認メタル上ハ被告ハ全部ノ控訴ニ係ルヲ以テ即チ控訴ノ理由アルニ歸着ス可キモノナルヲ以テ同條第二項ニ從ヒ原判決ヲ取消サル可カラス然ルニ原判決カ控訴ヲ棄却シタルハ法律ニ違背シタル不法アルモノトスト云フニ在リ○依テ案スルニ本件ハ被告ノミテ控訴ニ係ルヲ以テ刑事訴訟法第二百六十五條ノ規定ニ則リ原判決ヲ變更シテ被告ノ不利益ト爲スコトヲ得スト雖モ已ニ擬律ニ錯誤アリト認ムル以上ハ被告ノ控訴ハ即チ其理由アルモノナルカ故ニ之レヲ理由トシテ棄却スヘキモノニアラサルコト論ヲ俟タサルナリ然ルニ原院ハ第一審判決ニ於テ委任狀ヲ偽造シタル所爲ヲ刑法第二百十條第二項ニ間擬シタル失當ハ際アルヲ認メ之レヲ更正シナカテ本件控訴ハ之レヲ棄却スト言渡シタルハ本論旨所論ノ如ク失當ニシテ原判決全部ヲ破毀ヲ免レサルモノトス既ニ此點ニ於テ原判決全部ヲ破毀スヘキモノト認ムル以上ハ他ノ上告論旨ハ一々説明スルノ要ナシ

右ノ理由ニ依リ刑事訴訟法第二百八十六條ノ規定ニ從ヒ判決スルコト左ノ如シ
原判決ヲ破毀シ更ニ審判セシムル爲メ本件ヲ名古屋控訴院ニ移送ス

明治三十一年十二月十三日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事古賀廉造立會宣告ス

○官吏抗拒ノ件

明治三十一年第一一五二號
明治三十一年十二月十五日宣告

○判決要旨

豫審終結決定ハ被告事件ヲ公判ニ付スルヤ否ヲ決スル裁判ニシテ一旦確定シタル以上ハ免訴ニ關シ特例アル場合ノ外之ヲ無効ニ歸セシムルコトヲ得ス

第一審 千葉地方裁判所八日市場支部 第二審 東京控訴院

被告人 佐瀬喜三郎

右官吏抗拒被告事件ニ付明治三十一年十一月十六日東京控訴院ニ於テ審理ノ末原判決ヲ取消ス本件被告ニ對スル公訴ハ之レヲ受理セスト言渡シタル判決ニ對シ原院檢察長檢察波多野敬直ハ上告ヲ爲シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審判スルコト左ノ如シ
上告ノ要旨ハ原判決ニ宣示シタル如ク豫審終結決定正本ニ契印ナキハ明白ナルモ該決定ハ既ニ確定シタルモノニシテ右等ノ瑕疵ハ單ニ形式ニ關スルモノニ過キササルヲ以テ此瑕疵ヲ原由トシテ公訴不受理ノ言渡ヲ爲スヘキモノニ非ス然ルニ原判決爰ニ出テスシテ公訴不受理ノ言渡ヲ爲シタルハ不法ナリト云フニ在リ○因テ審按スルニ豫審終結決定ハ被告事件ヲ公判ニ付スヘキヤ否ヤニ付與フル所ハ裁判ニシテ苟カモ此裁判ハ確定シタル上ハ免訴ニ關シ特例アル

モハハ外其裁判ニ瑕疵アルハ理由トシ之レヲ無効ニ歸セシムルコトヲ得ヘキモノハ非ハ左レハ本件豫審終結決定ニ契印ヲ欠キタル瑕疵アルモ被告事件ハ確定決定ニ依リ公判ニ付セラレタルモノナレハ第一審ハ勿論原院モ亦其事件ノ本案ニ進入シ判決ヲ與フヘキモノナルニ原院ノ所爲茲ニ出テス本件公訴ヲ受理セスト言渡シタルハ違法ニシテ上告ハ其理由アルモノトスル右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十六條ニ則リ原判決ヲ破毀シ本件ヲ宮城控訴院ニ移ス

明治三十一年十二月十五日大審院第二刑事部公庭ニ於テ檢察岩野新平立會宣告ス

○私印盜用等ノ件

明治三十一年第九一三號
明治三十一年十二月十六日宣告

○判決要旨

(判旨第二點) 刑法第二百九條ニ所謂裏書ヲ以テ賣買スヘキ證書若クハ金額ト交換スヘキ約定手形トハ交付ニ依リテ讓渡スコトヲ得ル流通證券ノ謂ニシテ爲替手形約束手形ノ如キ或ル有價證券ニ特有ノ名稱ニ非ス

(參照) 爲替手形其他裏書ヲ以テ賣買スヘキ證書若クハ金額ト交換スヘキ約定手形ヲ約定手形ノ意義○事實誤認ノ裁判

偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス(刑法第二百九條第二項)

(判旨第十三點) 事實ノ認定ニ誤謬アルモ違法ノ裁判ニ非ス

第一審 富山地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 武隈幸隆
石坂義實
清水友次郎
辯護人 磯部四郎

右三名カ私印盗用及ヒ私書偽造行使小切手偽造行使詐欺取財被告事件ニ付明治三十一年七月廿八日大阪控訴院ニ於テ爲シタル判決ニ對シ被告三名ハ上告ヲ爲シタリ大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

被告石坂義實上告趣意書ノ第一點ハ原院カ小切手ナリト認メタル證券ニハ小切手ナル文字ノ表示ナキヲ以テ小切手ニアラスト云フニ在レトモ○原院ノ認メタル事實ハ小切手ノ偽造ニシテ被告云フカ如キ文書ノ偽造ニ非ス且ツ小切手ノ文字ハ其要件ニアラサレバ假リニ之ヲ缺キタリトスルモ小切手ニ非スト云フヲ得ス

判旨第二點

第二點ハ小切手偽造ハ刑法第二百九條ニ關疑スヘキモノニアラス何トナレハ裏書ヲ以テ賣買スヘキ證券若シクハ金額ト交換スヘキ約定手形ニアラサレハナリ云々ト云フニ在レトモ○刑法第二百九條ハ裏書ヲ以テ賣買スヘキ證券若シクハ金額ト交換スヘキ約定手形トハ裏書若シクハ交付ニ依リ讓渡スヘクシテ其ハ價格證券ニ存スル流通證券ヲ云フ其ノ約定手形ト云ハルハ爲替手形約束手形ノ如キ或ル有價證券ニ特有ナルハ名稱ニアラス故ニ小切手ハ如キハ即チ刑

法第二百九條其他裏書ヲ以テ賣買スヘキ證券若シクハ金額ト交換スヘキ約定手形中ニ包含シ居ルコト勿論ニシテ原院カ小切手偽造ニ關疑シタルハ適法ナリトス

第三點原院ハ事實ノ點ニ於テ豊二ノ印影ヲ盗用シタリト認メナカラ刑法第二百八條第二項及ヒ私印偽造ヲ罰スル同條第一項ヲ適用シタルハ理由ノ顯露ナリト云フニ在レトモ○原院カ刑法第二百八條第一項ヲ適用シタルハ他ナシ同條第一項ニ私印ヲ偽造シ使用シタルモノバ云々ノ刑ニ處ストアリ其ノ第二項若シ盗用ニ係ルトキハ一等ヲ減ストアルヲ以テ私印盗用ニ對スル刑期ノ範圍ヲ示メスカ爲メニ同條第一項ヲ適用シタルニ外ナラス

第四點ハ公訴裁判費用ノ負擔ヲ規定スル法律ハ刑法第四十五條第四十七條及ヒ第四十八條ナリ然ルニ原院カ之レヲ適用セサルハ理由不備ナリト云フニ在レトモ○刑事訴訟法ニハ刑ノ負擔ニ付法律ニ依リ理由ヲ示スヘシトアルノミ裁判費用ノ如キハ刑ノ言渡ニ非サルヲ以テ其負擔ヲ定メタル法律ヲ明示セサルモ理由不備ト云フヲ得ス

第五點ハ原判決證據明示ノ末尾ニ於テ銀行宛書面ニ徴シ證據ナリトアリテ證據ノ十分ナルヲ將不十分ナルヲ明ラカニセサルハ理由不備ナリト云フニ在レトモ○刑事訴訟法ハ有罪ノ判決ヲ爲スニ當リ證據ヲ明示スヘシト命シアレトモ證據十分ナルコトヲ明言スヘシトノ規定ナシ而シテ原判決文ハ證據ノ下ニ疑ヒモナク十分ノ貳字ヲ脫漏セルヲ以テ文章上ヨリ論スルトキハ何チ成サハルハ勿論ナレトモ既ニ有罪ナリトノ斷定ヲ與ヘ種々ノ證據ヲ列記シアル以上ハ證據ノ明示ナキモノト極論スルヲ得ス本論旨モ亦々上告適法ノ理由トナラス

第六點原院ニ於テ第一審判決ヲ取消シ更ラニ判決ヲ爲スニ當リ刑事訴訟法第二百六十一條ニ則リ判決スル左ノ如シト宣言シ同條ノ第一項ニ從ヒタルカ將タ第二項ニ從ヒタルカ判然セスト云フニ在レトモ○同條ニ則リ第一審判決ヲ取消シタル以上ハ第二項ヲ適用シタルコト自カラ之レヲ知り得ヘキノミナラス同條ノ如キ素ト刑事訴訟ノ手續ヲ定メタルニ過キサレハ其ノ手續ヲ履行シタル以上ハ特ニ其ノ法條ヲ明示スルヲ要セス故ニ多少不明ノ點アルモ判決自體ニ不法アルモノト云フヘカラス

第七點ハ原院ハ豊二ト同行シ村役場ニ至リタル際同所ニ於テ同人ノ印影ヲ盗用シタリト認定シタレトモ村役場ハ衆人集合ノ場所特ニ豊二ノ面前ニ於テ同人ノ印影ヲ盗用シタリトノ事ハ事體ニ於テ有り得ヘカラサル事實ナリ且ツ此點ニ付證人ノ申請ヲ爲シタルニ之レヲ採用セスシテ有罪ノ判決ヲ爲シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ○前段ハ事實ノ認定ニ對スル批難ニ過キス後段ハ原院ノ職權ニ屬スル證據調ノ限度ニ付攻撃ヲ爲スモノニシテ共ニ上告ノ理由トナルヘキモノニアラス

被告清水友次郎上告趣意書第一點ハ小切手及銀行宛書面ハ其ノ筆跡ニ徵スルモ被告ノ筆記シタルモノニアラサルニ原院カ被告ノ筆記ニ係ルモノト認メタルハ不法ナリト云フニ在リテ○原院ノ職權ニ屬スル事實認定ヲ批難スルニ過キサレハ上告ノ理由トナルヘキモノニ非ス

第二點ハ原院カ小切手ト認メタル證券ニハ小切手ナル文字ノ記入ナシ故ニ小切手ニアラント云フニ在レトモ○右ハ事實ノ趣意書第一點ノ説明ニ依リ了解スヘシ

被告幸隆趣意書第一點ハ原院ニ於テ小切手用紙ハ桐澤三郎ヨリ幸隆方ニ郵送シタリト認メタリ然ルニ桐澤三郎ノ調書ニ據ルニ右用紙ハ清水友次郎ニ宛郵送シタリトノ證言アリ原院ハ三郎ノ調書ヲ證據トシナカラ前記ノ如ク事實ヲ認定シタルハ理由ノ顯微ナリト云フニ在レトモ○幸隆ノ宿所ニ郵送シタリトノ事ハ必スシモ幸隆宛ニテ郵送シタリトノ意味ナリト斷言スルヲ得サルノミナラス木件ノ證據ハ獨リ桐澤三郎ノ證言ニ止マラサレハ他ノ證據ニ因リ三郎ノ陳述ニ反スル事實ヲ認ムルハ原院ノ職權ニ屬ス要スルニ本論旨ハ事實認定ニ對スル批難ニ過キスシテ上告ノ理由トナルヘキモノニアラス

第二點ハ原院決ノ事實認定ニ據ルモ被告幸隆ハ單ニ小切手用紙借入方ノ書狀ヲ友三郎ニ與ヘタルニ過キスシテ即チ豫備ノ所爲ニ加功シタルニ止マルモノナレハ正犯トシテ罰セラルヘキモノニアラス云々ト云フニアレトモ○原院決ノ認ムル事實ニ據レハ被告幸隆ハ被告義實被告友次郎ト共ニ堀田豊二カ滑川銀行ニ當坐預ヲ爲シ置ケル金圓ヲ引出シ騙取センコトヲ通謀シ幸隆ハ桐澤三郎宛小切手用紙借用依頼書ヲ送リ該用紙ヲ借受ケ友次郎ハ之レニ金額及ヒ堀田豊二ノ氏名ヲ記入シ併セテ豊二名義ニテ滑川銀行宛小切手面金額相渡吳レ度旨ノ書面ヲ作り義實ハ右小切手及ヒ書面ニ豊二ノ印章ヲ盗用シ幸隆方ニテ被告三名協議ノ上該偽造小切手及銀行宛書面ヲ氏名不詳ノ者ヲシテ滑川銀行ニ持行カシメ之レト引換ニ小切手面ノ金四百五十圓ヲ騙取シタルノ事實ニシテ被告幸隆モ亦他二名ノ被告ト共ニ既ニ犯罪ヲ實行シタル正犯タルコトヲ認メアレハ原院カ幸隆ヲ正犯トシテ處罰シタルハ相當ニシテ擬律ノ錯誤ニアラス

被告義實擴張辯明書ノ要旨ハ上告趣意書ト同一趣旨ヲ反覆論說シタルニ過キサレハ再ヒ説明ヲ與フルノ要ナシ

被告友次郎擴張趣意書ノ第一點ハ原判決審ニ記載アル被告住所ノ番地千三百九十六番地ハ事實ニ違ヘルヲ以テ人違ニ歸スル不法ノ判決ナリト云フニ在レトモ○原判決文ニ被告住所ノ番地ヲ千三百九十番地ト記載シアル以上ハ原院ニ於テ被告住所ノ番地ヲ同番地ナリト認定シタルモノト云ハサルヲ得ス故ニ原判決記載ノ番地事實ニ相違セリトコトヲ以テ原判決ヲ攻撃スルハ即チ原院ノ職權ニ屬スル事實認定ヲ批難スルモノニシテ上告ノ理由トナルヘキモノニ非ス

第二點第三點ハ被告義實ノ趣意書第一點ト同一ノ趣旨ニ歸着スルヲ以テ其ノ説明ニヨリ了解スヘシ

第四點ハ原院カ小切手ナリト稱スル物件ヲ見ルニ小切手ナル名稱ノ記載ナキノミナラス振出人ト受取人ト同一ニシテ流通ノ性質ヲ欠クモノナレハ小切手ト稱スヘキモノニ非ス然ルニ原院カ其ノ偽造ニ對シ刑法第二百九條初項ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ在レトモ○原院ニ於テハ小切手偽造ノ事實ヲ認定シタルモノニシテ被告云フカ如キ別種ノ證書ヲ偽造シタルト認メタルニ非ス故ニ原院カ刑法第二百九條初項ニ依リ處斷シタルハ相當ニシテ擬律ノ錯誤ニアラス要スルニ本論旨ハ原院ニ於テハ小切手擬造シタルト認メタルモ被告ハ小切手ヲ偽造シタルコトナク若シ偽造シタルトモハ別種ノ證書ヲ偽造シタルモノナリト云ヘル趣旨

判旨第十三

ニシテ結局事實認定ノ當否ヲ爭ヘル論旨ナリトス而シテ事實ノ認定ハ原院ノ職權ニ屬スルヲ以テ其認定ニシテ誤謬アリトスルモ違法ト云フヲ得サルハ之レヲ以テ違法ヲ理由トスルトキニ限り提起シ得ヘキ被告ハ理由トナスコトヲ得サルハ勿論ナリ

第五點ハ刑法第二百九條ニハ小切手偽造ヲ罰スルノ明文ナシ然ルニ原院カ同條ヲ適用處斷シタルハ擬律錯誤ナリト云フニ在レトモ○被告義實趣意書第二點ニ於テ説明シタル如ク刑法第二百九條ハ爲替手形ノ外裏書ヲ以テ賣買スヘキ證書若クハ金額ト交換スヘキ約定手形中ニ小切手ヲ包含シ居ルヲ以テ小切手偽造ハ當然同條ニ該當スヘク法ニ明文ナシト云フヲ得サルヲ以テ原院カ同條ニ依リ處斷シタルハ擬律錯誤ニアラス

第六點ハ第四點ノ論旨ト同一ニ歸着スルヲ以テ其ノ説明ニ因リ了解スヘシ

第七點ハ滑川銀行ニ小切手ヲ持行キ之レト引換ニ額面ノ金額ヲ騙取シタルト認メラレタル氏名不詳ノ者即チ犯罪遂行者ハ正犯ナリヤ將々從犯ナリヤ又ハ全ク無責任ノ者ナリヤ職金果シテ被告人等ノ手ニ入りシヤ之レヲ要スルニ同人ト被告人トノ間ニ犯罪遂行ニ付如何ナル連絡ノ存スルモノアルヤ原判決中之レカ明示ヲ缺キタルハ理由不備ナリト云フニ在ルモ○右氏名不詳者カ情ヲ知ルト否トヲ論セス又職金カ被告人ノ手ニ入りシト否トヲ問ハス同人カ滑川銀行ニ偽造ノ小切手及ヒ書面ヲ持行キ之レト引換ニ金額ヲ請取リタル時ニ於テ被告人等ノ犯罪ハ成立スヘキヲ以テ氏名不詳者カ情ヲ知ルト否ト及ヒ職金被告人等ノ手ニ入ルト否トハ共ニ犯罪成立ニ關係ナク從テ此點ニ付明示ヲ缺クモ理由不詳ト云フヲ得ス

第八點ハ第七點ノ論旨ノ一部ヲ再説スルモノナレハ更ラニ説明ヲ與フルノ要ナシ
 第九點原判決法律適用ノ部ニ於テハ小切手偽造行使銀行宛書面偽造行使及ヒ金員騙取ノ所爲
 ニ該當スル法律ヲ掲ケタルノミニシテ右行爲ヲ爲シタル人ヲ示サ、ルカ故ニ被告人中何人カ
 如何ナル行爲ニ付如何ナル制裁ヲ受クヘキヤ之レヲ知ル能ハス即チ理由不備ナリト云フニ在
 レトモ○原判決ニハ事實認定ニ於テ被告一同共謀ノ上小切手偽造行使銀行宛書面偽造行使及
 ヒ金員騙取ノ罪ヲ犯シタル事實ヲ説明シアルヲ以テ法律ノ適用ニ至リ右行爲ニ該當スル法律
 ナ適用スルトキハ被告一同ニ對シ該法條ヲ適用シタルコト分明ニシテ毫モ理由不備ノ厥アル
 コトナシ
 第十點ハ私印盗用ナル一所爲ニ對シ何故ニ私印盗用ニ該當スル刑法第二百八條第二項ト私印
 偽造ニ該當スル同條第一項ヲ適用シタルヤ其ノ理由ヲ明示セサルハ判決ノ理由ニ不備アルモ
 ノナリト云フニ在レトモ○同條ハ第一項ニ於テ私印偽造ノ刑ヲ示シ第二項ニ於テハ單ニ盗用
 ニ係ルトキハ一等ヲ減ストノミ記載シアルヲ以テ第一項ヲ適用シテ刑期ノ範圍ヲ知ラシメタ
 ルニ外ナラス此等ハ特ニ之レヲ明言セサルモ自カラ知リ得ヘキニ付其ノ明示ナキヲ以テ理由
 不備ト云フヲ得ス
 第十一點偽造ノ小切手及ヒ書面ハ法ノ禁制物ニアラス然ルニ原ハカ刑法第四十三條一號ニ依
 リ沒收シタルハ擬律錯誤ナリト云フニ在レトモ○文書偽造ハ法律之レヲ禁制セリ然レハ其ノ
 文書ハ法ノ禁制物タルコト自明ノ理ナルヲ以テ原院カ刑法第四十三條一號ニ依リ之レヲ沒收

シタルハ當然ニシテ擬律ノ錯誤ニアラス
 第十二點原判決ニハ偽造ノ小切手及ヒ書面ハ刑法第四十三條一號同第四十四條ニ依リ沒收ス
 ル旨ノ記載アルノミニシテ第四十四條前段ヲ適用シタルヤ將タ後段ヲ適用シタルヤ明瞭ナラ
 ス即チ理由不備ノ判決ナリト云フニ在レトモ○既ニ第四十三條第一號ヲ適用シタル以上ハ第
 四十四條前段ヲ適用シタルヤ辯ヲ俟タスシテ明ラカナリ故ニ特ニ同條前段ヲ適用スルノ明示
 ナキモ理由不備ニアラス
 第十三點原判決ニハ公訴裁判費用ハ刑事訴訟法第二百一條ニ依リ云々ト記載スルノミニシテ
 同條ノ如何ナル部分ヲ適用シタルヤ明瞭ナラス且ツ費用ノ全部ナルカ將タ一部ナルカ其ノ負
 擔額ヲ定メサルハ理由不備ナリト云フニ在レトモ○刑事訴訟法第二百一條ニ從ヒ裁判費用負
 擔ヲ音渡シタル以上ハ同條第一項ヲ適用シタルコト自カラ明ラカナリ又タ費用ノ一部ナルコ
 トヲ示メサルコトキハ全部ナルコト是レ亦タ言ヲ俟タスシテ明ラカニシテ毫モ理由不備ノ點
 アルコトナシ
 第十四點ハ被告義實趣意書第四點ト全然同一ノ趣旨ナルヲ以テ其ノ説明ニ因リ了解スヘシ
 第十五點ハ原院ノ判決ハ裁判費用負擔ニ付第一審判決ト法條ノ適用ヲ異ニシタルヲ以テ此點
 ニ付テモ亦第一審判決ヲ不當ト爲シタルニ外ナラス然ルニ其理由ヲ示サ、ルハ理由不備ナリ
 ト云フニ在テ○論旨極メテ不明瞭ナリ本論旨ニシテ原院ニ於テ第一審判決ヲ取消シナカラ共
 ノ理由ヲ明示セストノ趣旨ナラシカ原院ハ裁判費用負擔ノ點ニ付第一審判決ヲ取消シタルニ

アラサレハ理由ハ明示スヘキモノアルコトナシ若シ又判決中數多ノ缺點アル場合ニハ一々之レヲ説明スヘシトノ趣旨ナランカ木件ノ如キ被告ノミノ上訴ニ係ル場合ニ於テ一缺點ニ依リ第一審判決ヲ取消シタル以上ハ他ノ缺點ニ付説明スルヲ要セス更テニ適法ノ判決ヲ爲セハ足ルベシ蓋シ是レヲ説明セサルモ判決ノ理由完然ナレハナリ孰レニシテモ原判決ニ理由不備ノ點アルヲ見ス

被告清水友次郎擴張書ノ第一點ハ被告義實趣意書第一點ト同一趣旨ナルヲ以テ其ノ説明ニ依リ了解スヘシ

第二點ハ小切手振出入畑田豊二ハ商人ニ非レハ其ノ振出シタル小切手ハ商法上ノ小切手ニアラス云々ト云フニ在レトモ○小切手ノ振出ハ商行爲ナリト雖モ商人ニアラサルモ商行爲ヲ爲スコトヲ得ヘク隨テ商人ニアラサルモノ、發行シタル小切手モ亦タ小切手タルコト勿論ナレハ原院カ之レヲ小切手ト爲シ刑法第二百九條ニ間擬シタルハ相當ナリトス

被告三名辯護人磯部四郎擴張書ノ要旨ハ證人小林徳三郎高橋甚六ノ宣誓書中被告清水友次郎ノ氏名ヲ記載セス故ニ同人ニ對シテハ宣誓ヲ爲サシメスシテ證言ヲ爲サシメタルモノト云ハサルヲ得ス然ルニ原院カ右兩名ノ證言ヲ斷罪ノ資料ニ供シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ

○證人小林徳三郎高橋甚六ノ豫審調書ヲ見ルニ被告一同ニ對スル事件ニ付キ宣誓ヲ爲サシメ訊問ヲ爲シタル事實ノ記載アレハ偶々宣誓書中被告ノ一人清水友次郎ノ氏名ヲ脱スルモ尙ホ被告全體ニ對シ宣誓ノ上證言ヲ爲シタルモノト云ハサルヲ得ス故ニ其證言ヲ斷罪ノ資料ニ供スルモ不法ニアラス

右ノ理由ナルニヨリ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ木件上告ヲ棄却ス

明治三十一年十二月十六日於大審院第一刑事部公廷檢事古賀廉造立會言渡ス

○謀殺ノ件 明治三十一年第九六三號
明治三十一年十二月十六日宣告

○判決要旨

事實理由ノ部ニ於テ毆打及ヒ殺人未遂ノ二所爲アルコトヲ認メナカラ法律ノ理由ニ於テ一罪トシテ處斷シタル判決ハ不法ナリ

第一審 秋田地方裁判所 第二審 宮城控訴院

被告人 細川亮之助
細川淺吉

右兩名カ謀殺被告事件ニ付明治三十一年九月二十九日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不當トシ被告兩名ハ上告ヲ爲シタリ

相手方原院檢事長古莊一雄ハ答辯書ヲ差出シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シタルニ立會檢事古賀廉造ハ附帶上告ヲ爲シタルニ依テ判決スル左ノ如シ

本院立會檢事古賀廉造ノ附帶上告趣意第一點ノ要旨ハ原判決事實理由ノ前段ニ於テハ毆打罪ノ事實ヲ認メ其後段ニ於テハ殺人未遂罪ノ事實ヲ認メナカラ其法律理由ニ於テ單ニ刑法第二百九十四條ノミヲ適用シテ毆打罪ニ對シテ何等ノ法律ヲモ適用セス恰モ一罪ノ如ク處斷シタルハ疑律ノ錯誤ニシテ破毀ヲ免カレスト云フニ在リ○依テ原判決ヲ閱スルニ事實理由ノ前段ニ於テハ被告淺吉ハ程ナク歸宅シ右ノ始末ヲ訴ケテ憤懣措カ能ハズ之レヲ打懲シテ自ラ快フセント其傷ニ在リシ棍棒ヲ提ケ我家ヲ馳出テタル途中被告源次郎亮之助金藏ニ出會セルヲ以テ事ハ仔細ヲ語リ何分用捨シ難キニヨリ十分折檻ヲ加ヘ再ヒ村内ニ立入ラサルヤウナサント謀リタルニ一同直ニ之レヲ發シ各自民家ハ籠落ヨリ手頭ノ柴木ヲ採取リ一同與吉ヲ追蒐ケ同村字荒川尻ヨリ宇後口ニ通スル徑路ニ於テ漸ク之レヲ捕ヘタルヤ血氣ハ被告共ハ日頃ノ鬱憤堪ヘ難ク四名交々所持ノ得物ヲ振ツテ散々ニ打撃セシニ與吉ハ亂棍ハ下殆ント絶セントモ云々トアリテ單ニ毆打ノ目的ヲ以テ被告等カ佐藤與吉ヲ毆打シタル事實ヲ明カニ認定シ又其後段ニ於テハ叫苦ハ中尙ホ此村ヲ點土ニスルト罵リテ止マラサルヨリ被告共ハ其極幕ニ墜キ若シ此ノ儘ニ差置ク時ハ復仇ノ爲メ放火ヲ爲スハ必然ナルヘク且ツ力ニ任セ意外ニモ斯ク迄打撃ハタル上ハ寧ロ一思ヒニ殺死シテ全村ノ茶害ヲ除クニ如カスト決シ茲ニ初メテ河流ニ投棄シ殺害スルコトニ共謀シ氣息奄々タル同人ヲ其帶ト手拭ニテ肩足等ヲ縛シ棍棒ヲ其中ニ挿シ四名ニテ之レヲ擲キ同郡白岩廣久内村字中川原ニ至リ其儘斷崖ヨリ玉川ノ水流ニ投シ各自暗夜ニ乘シテ其傷ヲ立去レリ然ルニ與吉ハ圖ラヌモ水中ニテ神氣回復シ辛クシテ致死ヲ免

カレタルヲ以テ被告共ハ殺害ノ目的ヲ達ケサリシモノナリトアリテ被告等ハ毆打ヲ終リタル後更ニ殺意ヲ生シ共ニ殺害セントテ謀リ河流ニ投棄シタルモ遂ニ殺害ノ目的ヲ達シ得サリシ事實ヲ認定シアルヲ以テ其法律理由ニ於テハ之ヲ二罪トシテ各相當ノ法律ヲ適用シテ處斷セサルベカラズ然ルニ原判決ノ法律理由ニ於テハ之レヲ一罪ト見做シ單ニ刑法第二百九十四條ハミヲ適用シ毆打ノ所爲ニ對シ何等ノ法律ヲモ適用セサルハ附帶上告論旨ハ如ク疑律ノ錯誤ニシテ破毀ヲ免カレサルモノナリ然レトモ原判決ニ認メタル毆打ノ事實ハ單ニ四名交々所持ノ得物ヲ振ツテ散々ニ打撃セシニ與吉ハ亂棍ノ下殆ント絶セントモ云々ト記載シアルノミニシテ其犯狀ノ程度ヲ知ル能ハサルヲ以テ本院ニ於テ直チニ之レカ判決ヲ爲スニ由ナキトトス但既ニ此點ニ因リ原判決ヲ破毀スヘキモノト認メタル以上ハ他ノ上告論旨ニ對シテハ逐一之レカ説明ヲ爲スノ要ナシ

右ノ理由ナルニ依リ刑事訴訟法第二百八十六條ニ從ヒ原判決ヲ破毀シ更ニ審判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ函館控訴院ニ移ス

明治三十一年十二月十六日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事古賀廉造立會宣告ス

○冒認ノ件 明治三十一年十二月十六日宣旨

○判決要旨

假差押ノ申請ハ私訴ノ提起ニ非ス

第一審 仙臺地方裁判所 第二審 宮城控訴院

公訴私訴上告人 木下精太郎 辯護人 龜崎浪重

公訴上告人 高橋悦之輔

私訴被上告人 伊澤平吉

右冒認被告事件ニ付明治三十一年十一月五日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告精太郎ハ公訴私訴ニ付被告悦之輔ハ公訴ニ付各上告チナシタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

精太郎上告趣意第一點ハ原判決中證人伊澤平藏トアルモ同人ハ本件ニ何等ノ關係ナキモノナリ若シ又其平藏ハ平吉ノ誤審ナリトモ同人ハ民事原告人ニシテ本件ノ證人トナルモノニアラス然レトモ豫審中未タ私訴狀チ差出サレハ證人トスルモ差支ナシト云フカ平吉ハ豫審外ニ債權保全ノ爲メ相被告イノノ財産差押チ申請シ其差押命令書及差押調書ニ依レハ民事原告人タルコト明カナルチ以テ同人チ證人トシテ訊問シタルハ違法ニシテ其調書ハ無効ナルニ原院カ證據トシテ採用シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ○前段原判決上證人伊澤平藏トアル

ハ伊澤平吉ノ誤記ナルコトハ訴訟記録ニ徴シテ明カナレハ其誤記ヲ以テ上告ノ理由トナスチ得サルモノトス後段ハ假差押申請チ爲シ其命令アリタルハトテ之ヲ以テ私訴チ提起シタルモハト云フヘキモノニアラス而シテ平吉カ本件私訴チ提起シタルハ明治三十一年三月七日ニシテ豫審判事カ同人チ證人トシテ訊問シタルハ其以前明治三十一年一月八日及ヒ同月二十五日ニアレハ同ヨリ證人タルノ資格チ有スルモノニアラス從テ其訊問調書ノ有效ナルハ論チ待タサルモノナレハ原院カ該調書チ斷罪ノ用ニ供シタルハ違モ違法ニアラストス
第二點ハ買賣濟トナリタル十七本都合六十本チ金貳百圓ニテ平吉ニ賣渡シト判決シタルモ平吉カ豫審庭ニ於テ陳述中ニイノ等ニ貸與セル金圓チ受取ルコト能ハサルカ故ニ伐木致シタリトノ自白アルチ以テ即チ賣買ニアラスシテ貸借ナルニ原院カ賣買ト爲シタルハ失當ナリト云フニ在レトモ○斯ハ裁判官ノ職權ニ屬スル事實ノ認定チ非難スルモノナレハ上告適法ノ理由トナラス
私訴上告ノ要旨ハ原院ハ被告イノ精太郎ハ金百圓ニ明治三十一年十月ヨリ執行濟ニ至ル迄年六朱ノ利子チ加算シ尙ホ損害金拾四圓三十錢ト共ニ民事原告人ニ辨償スヘシトアレトモ其拾四圓三十錢ハ何レノ損害ナルヤ明記セサルノミナラズ金拾四圓三十錢トアルハ貳拾四圓三十錢ノ誤ナラン果テ然ラハ第一審ニ於テ民事原告人カ請求スル内金八圓ハ却下セラレタルチ尙支拂セヨトノ判決ホラジ之レ即チ被告ニ對シ八圓丈クハ不利益ノ裁判ナリト云フニアレトモ
○其金拾四圓三十錢ハ民事原告人ノ請求スル木挽座料荷馬車座料等ノ損害金ニシテ判決主文

ニハ其總額ヲ明示スレハ足ルモノニシテ其詳細ヲ示スノ要ナシ又金拾四圓三十錢ハ決シテ貳拾四圓三十錢ノ誤謬ニアラス從テ第一審カ執行シタルモ金八圓ヲ被告ニ負擔セシメタルモノニアラス要スルニ被告カ誤解ニ出テタル論告ナレハ上告適法ノ理由ナキモノトス
擴張辯明第一點第三點ハ要スルニ上告趣意ノ第一第二ヲ續々敷衍スルニ過キサレハ重テ説明ヲ與フルノ要ナシ

同第二點ハ原院公判廷ニ於テ證人喚問ヲ申請シタルヲ許容シタルニ拘ハラヌ請求セサル臨檢現場ニ於テ證人ヲ呼出シ取調ヘタノミニシテ公判廷ニ呼出シ訊問セサルハ被告ノ申請ヲ許容シタル趣意ニ背キタルモノナリト云フニ在レトモ
○原院公判始末書ニ裁判長ハ被告并ニ辯護人ノ請求ハ許容ストノ決定ヲ言渡シ證人ハ實地ニ呼出スカ當廷ニ呼出スカハ追テ達スル旨ヲ告ケタリトアリテ其證人等ヲ實地ニ呼出シ訊問スルコトハ被告ニ於テハ豫メ之ヲ承認シタルモフト云フヲ得ヘクシテ本論旨ハ謂レナキモノトス

悅之輔上告趣意第一點ハ證人伊澤平吉被告木下イノニ對シ仙臺區裁判所ニ假差押ヲ申請シ其命令アリタルハ明治三十一年十一月二十三日ニシテ其翌二十四日ヲ以テ強制執行ヲ爲シタルモノナレハ平吉カ假差押ヲ申請シタル當時ヨリ民事原告人ノ資格ヲ有スルコトハ爭フヘカラサル事實ナレハナリ然ルニ豫審判事ハ明治三十一年一月八日同二十五日ノ兩日ニ在リテ平吉ヲ證人トシテ訊問シタルハ違法ニシテ其調書ハ無効ナルニ原院カ證憑トシテ採用シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ
○精太郎上告趣意第一點ノ後段ト同一ノ論旨ナレハ右說明ニテ了解

スヘシ

第二點ハ要スルニ本件ハ現行犯ニモアラス從テ急遽ヲ要セサル事件ナレハ豫審判事ハ先ツ被告入ヲ訊問スヘキハ當然ナルニ平吉ヲ證人トシテ先キニ訊問シタルハ刑事訴訟法第九十三條ニ違背シタル不法ノ調書ヲ證憑ト爲シタルハ失當ナリト云フニアレトモ
○事件ノ模様ニ依リ被告入證人ノ訊問順序ヲ變更スルハ豫審判事ノ自由ニアルモノナレハ假令先キニ證人ヲ訊問シタルハトテ之ヲ以テ其訊問調書ノ無効トナルヘキ謂レナシ故ニ原院カ該訊問調書ヲ斷罪ノ資料ニ供シタルハ違法ニアラスシテ上告ハ其理由ナキモノトス

第三點ハ仙臺地方裁判所檢察官伊澤平吉ニ對シ請取書ヲ作成セラレタリ其陳述中ニハ上告ニ對シ利益トナルヘキ證言アルニ證憑ノ部ニ該聽取書ヲ掲ケサルハ證憑ノ明示ヲ欠キタル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ
○證據ノ取捨ハ承審官ノ職權ニ在ルヲ以テ之レヲ論争スルモ上告適法ノ理由トサラス

辯護士龜崎浪重擴張第一點ハ原判決書證憑ノ部ニ證人伊澤平藏ナル者ノ豫審調書ヲ以テ斷罪ノ證憑トセラレタルモ豫審ニ於テ伊澤平藏ナル者ヲ證人トシテ訊問シタルコトナシ然ルニ原院カ伊澤平藏ナル者ノ豫審調書ヲ斷罪ノ資料ニ供セラレタルハ不法ナリト云フニ在レトモ
○右論旨ハ精太郎上告第一點ノ前段ト同一ナルヲ以テ其說明ニテ了解スヘシ
同第二點ハ原院ニ於ケル第二回公判始末書ヲ閱スルニ裁判長ハ尙ホ前回ニ於テ被告并ニ辯護人ノ請求ニ依リ取調ヲ爲シタル檢證調書并ニ證人訊問調書ヲ取開カスル旨ヲ告ケ書記ヲシテ

該調書ヲ則認セシムトアルノミニテ更ニ該證憑ニ對シ被告人ニ意見アルヤ否ヤヲ問且其利益トナルヘキ證憑ヲ差出スヲ得ルヘキコトヲ告知シタルコトナシ然ルニ原院カ其利益トナルヘキ反對證憑ヲ差出スヲ得ヘキコトヲ告知セザリシ原院受命判事ノ取調ヘタル檢證調書ヲ採テ斷罪ノ資料ニ供シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ○原院ノ公判始末書ヲ査スルニ第一回公判ノ際被告並ニ辯護士ヨリ利益ノ爲メ證人ノ喚問ヲ申請シタルニ對シ原院ハ其ノ證人ヲ實地ニ呼出スコトヲ決定シ受命判事ハ實地ニ臨檢シ以テ證人ヲ訊問シ而テ第二回公判ノ際其ノ調製シタル檢證調書并ニ證人訊問書ヲ被告ニ讀聞シタルモノニシテ被告ニ於テモ別ニ申立ル事無之旨明答シアルノミナラス要スルニ右調書ハ被告カ利益ノ爲メノ反證ニ基キタルモノナレハ重テ反證提出ノ告知ヲ要スヘキモノニアラス從テ該調書ヲ斷罪ノ用ニ供シタルハ毫モ不法ニアラス

第三點ハ原判決ヲ閱スルニ被告精太郎イノ悅之輔ハ共ニ相謀リ明治三十年十月十六日イノ方ニ於テ伊澤平吉ニ向ヒ云々都合六十本ヲ何レモイノノ所有ナリト冒認シ其現場ヲ示シタル上之ヲ金二百圓ニテ平吉ニ賣渡シ内金貳拾圓ヲ其場同八拾圓ヲ翌十七日悅之輔方ニ於テ受領セリトアルモ其單ニイノ方ト云ヒ其場ト云フカ如キハ共ニ本件犯罪ノ場所ヲ明示セサル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○其イノ方トハ木下イノ氏名ノ肩書ニ示ス所ナルコト又其場トハ仙臺市木下八十一番地ナルコトハ原判文上明瞭ニ認メ得ルヲ以テ犯罪ノ場所ヲ明示セストノ論告ハ上告適法ノ理由トナラス

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ精太郎ノ公訴私訴ノ上告悅之輔ノ公訴上告ハ總テ之ヲ棄却ス
 精太郎ノ私訴上告費用ハ精太郎ノ負擔トス
 明治三十一年十二月十六日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事古賀廉造立會宣告ス

○詐欺取財等私訴ノ件
 明治三十一年十二月二十五號
 明治三十一年十二月十九日宣告

○判決要旨

犯罪ノ證憑十分ナラサル場合ト雖モ私訴ニ關スル請求權ノ有無ハ之ヲ裁判セサルヘカラス

(參照) 犯罪ノ證憑十分ナラス又ハ被告事件罪トナラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ヲ言渡シ又第百六十五條第三號以下ノ場合ニ於テハ判決ヲ以テ免訴ノ言渡チナスヘシ(刑事訴訟法第二百二十四條)
 前二條ノ場合ニ於テハ私訴ニ付其請求價額ノ多寡ニ拘ハラス判決チナスヘシ(刑事訴訟法第百二十四條)
 私訴ノ裁判

第一審 佐賀地方裁判所 第二審 長崎控訴院

私訴上告人 早田新藏 吉田要七

私訴被上告人 大塚仁一 江原新三 橋本吉三

右大塚仁一外二名詐欺取財及ヒ委託金費消被告事件ニ付明治三十一年十一月四日長崎控訴院ニ於テ言渡シタル私訴ノ判決ニ對シ民事原告人早田新藏外二名ハ上告ヲ爲シタルニ依リ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

上告趣意第二點ハ原判決ニ原告ノ主張ハ犯罪ヲ原因トスルモノニアラサルヲ以テ別ニ通常民事ノ訴ヲ以テスルハ格別公訴ニ附帶スル本訴ニ在テハ不當ノモノナリト判定セラレタレトモ公訴ノ有罪タルト無罪タルトヲ問ハス受理セシ私訴ニ付テハ理由ヲ明示シ相當ノ判決ヲ爲スヘキモノナルヲ以テ原判決ニ其理由ヲ明示セス上告人ニ請求ノ權利ナキコト及ヒ被上告人ニ義務ナキコトヲ説明セサリシハ判決ニ理由ヲ附セサル違法アリト云フニ在リ○依テ原判決ヲ査閱スルニ原院ニ於テ上告人カ主張セシ趣旨ハ被上告人等カ本訴ノ金額ヲ費消シタルヲ以テ之レカ賠償ヲ受度又假令犯罪ノ證據充分ナラストスルモ被上告人ノ所爲ニ依リ元投産社ノ金員中ニテ本訴ノ金額ヲ不明ニ爲シタルモノナレハ其辨償ヲ受度ト云フニ在リテ即其請求ハ犯

罪トシテ起訴セラレタル事實ヲ原因ト爲シタルモノナリ然レハ被上告人等カ犯罪ノ證據充分ナラスト雖モ刑事訴訟法第二百二十四條第二百二十五條ニ從ヒ上告人等ニ請求ノ權利アルヤ否ヤハ判決セサルヘカヲス然ルニ原院カ上告人等ノ請求ハ犯罪ヲ原因トスルモノニアラストノ理由ヲ以テ之ヲ却下シタルハ違法ニシテ原判決ハ破毀スヘキ原由アリトス既ニ此點ニ於テ破毀ノ原由アリト認メタルヲ以テ他ノ上告論旨ニ對シテハ説明ヲ要セス

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十六條第二百九十條ニ依リ原判決ヲ破毀シ本件ヲ廣島控訴院民事部ニ移ス
明治三十一年十二月十九日大審院第二刑事部公廷ニ於テ檢事小宮三保松立會宣告ス

○冒認ノ件 明治三十一年第八八四號
明治三十一年十二月二十日宣告

○判決要旨

寺院ハ其任職ニ依テ代表セラルヘキモノニシテ信徒總代ハ之ヲ代表シテ訴訟ヲナスノ資格ナシ

寺院ノ代表者

第一審 名古屋地方裁判所岡崎支部 第二審 名古屋控訴院

公訴私訴上告人 大森祐介

私訴上告人

加藤熊吉
加藤芳太郎
加藤武八

訴訟代理人 石巻巳六

右大森祐介冒認被告事件ニ付明治三十一年八月十二日名古屋控訴院ニ於テ公訴私訴ノ判決ヲ爲シタルニ被告祐介ハ公訴私訴ニ對シ加藤熊吉外二名代理人石巻巳六ハ私訴ニ對シ各上告ヲ爲シタリ

公訴相手方原院檢事長代理檢事田中秀吉ハ公訴ニ付被告祐介及ヒ加藤熊吉外二名代理人石巻巳六ハ私訴ニ付各答辯書ヲ差出シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

公訴上告趣意第一ノ要領ハ原判文ニ被告祐介ハ明治三十年三月五日愛知縣東加茂郡成岡村大字追分鈴木熊次郎宅ニ於テ同縣碧海郡堤村大字堤神戶潭龍ニ對シ同縣東加茂郡加茂村大字桑田和ナル久遠寺所有ノ鐘樓門一棟ヲ自己ノ所有ナリト申訴ハリ之ヲ代金四十圓ニテ同人ニ賣渡シタリトアリテ冒認ノ目的物タル鐘樓門ノ所在ヲ明示セサルハ理由不備ナリト云フニアレトモ○右判文中ニ同縣東加茂郡加茂村大字桑田和ナルレトアルハ即チ久遠寺ノ鐘樓門ノ所在ヲ示シタルモノナレハ上告所論ノ如キ不法アルコトナシ

同第二ノ要領ハ本件ノ鐘樓門ハ被告ノ所有ナルコト久遠寺ノ信徒總代ト自稱スル各證人等カ

被告ノ所有ト認メテ買約ヲ爲セシ事實アルニ依テ明カナルノミナラス假リニ被告ノ所有ニアラストスルモ被告自身ニ在テハ自己ノ所有ト信シテ賣渡シタルモノナレハ冒認罪ヲ構成セス又本件ノ爭點ハ鐘樓門ノ所有者ハ被告ナリヤ將々久遠寺ナリヤニ存シ被告ハ自己ノ所有ナルコトヲ證スル爲メ幾多ノ反證ヲ舉ケタルニ原院カ此點ニ關シ何等ノ理由ヲ示サズ漫然久遠寺所有ノ鐘樓門ト列示シタルハ唯一ノ爭點ニ對シ判決ノ理由ヲ缺ク不法ノ裁判ナリト云フニアレトモ○前段ハ原承審官ノ職權ニ屬スル事實ノ認定ヲ批難スルニ過キス後段ハ事實ノ認定ニ對シ理由ヲ掲記スルノ要ナキヲ以テ上告適法ノ理由トナラス

辯護人岡崎正也上告趣意擴張辯明書ノ要旨ハ原判文説明ノ事實ニ依レハ一面本件鐘樓門ハ久遠寺ノ所有ナリトアレトモ後段ニ於テハ賣買登記ヲ經テ讓渡シタリトアルニ過キスシテ如何ナル事實ニ依リ久遠寺所有ノ建物ヲ被告ニ於テ讓渡登記ヲ爲シタルモノナリヤ否モ其理由ヲ知ルニ由ナク即チ犯罪事實ニ關シ理由不備ノ瑕疵ヲ免カレサル裁判ナリト云フニアレトモ○原判決ニ於テハ久遠寺所有ノ鐘樓門ヲ自己ノ所有ナリト申訴ハリ之ヲ他人ニ賣渡シ之カ讓渡登記ヲ爲シタル事實ヲ認定シアル以上ハ冒認罪ヲ構成スヘキ要件具備スルヲ以テ如何ナル事實ニ依リ其建物ヲ被告ニ於テ讓渡登記ヲ爲シタリヤノ如キ犯罪構成ニ影響ヲ及ボサルモノハ之ヲ明示スルノ要ナキニ依リ理由不備ト云フヲ得ス

私訴ニ付被告祐介上告趣旨ハ民事原告人加藤熊吉外二名ハ久遠寺ノ信徒總代ナリト假定スルモ信徒總代ハ久遠寺ヲ代表シテ訴訟ヲ爲スヘキ能力ナキ者ナルニ原院カ民事原告人等ノ請求

ノ一部ヲ採用シタルルハ不法ナリト云フニ在リ。○依テ案スルニ寺院ハ其住職ニ因テ代表セザルルヘキ者ニシテ信徒總代ハ之ヲ代表スルハ資格ナキモハナリ故ニ本件ノ民事原告人加藤熊吉外二名カ久遠寺信徒總代ノ名義ヲ以テ提起シタル私訴ハ不適法ナルニヨリ直チニ之ヲ却下スヘキ筋合ナルニ原院カ之ヲ受理審判シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル不法アルニ依リ原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ判決ヲ爲スヘキモノトス但此點ニ於テ原判決ヲ破毀スル以上ハ私訴ニ關スル他ノ上告論旨ニ對シ逐一説明ヲ爲スノ要ナキモノトス

右ノ理由ナルニ依リ公訴ニ付テハ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ上告ヲ棄却シ私訴ニ付テハ原判決ヲ破毀シ民事原告人加藤熊吉外二名ノ訴ハ之ヲ却下シ私訴費用ハ民事原告人加藤熊吉外二名ノ負擔トス

明治三十一年十二月二十日大審院第一刑事部公庭ニ於テ檢事岩野新平立會宣告ス

○貨幣偽造詐欺取財ノ件

明治三十一年第一〇四二號
明治三十一年十二月二十日宣告

○判決要旨

輕罪ノ數罪俱發シタル場合ハ刑期ノ長短ヲ問ハス其所犯情狀最モ重キ所爲ニ

從テ處斷ス

第一審 山形地方裁判所 第二審 宮城控訴院

被告人 新野伊六 辯護人 古田兼三

右貨幣偽造詐欺取財被告事件ニ付明治三十一年十月二十日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣意第一點ハ原判決ニ被告ハ房州砂チ水ニテ練リ云々別ニ砂利及鉛外二品ヲ溶解シ以テ型中ニ注入シ云々トアリテ其外二品トハ如何ナルモノナルカヲ明示セサルハ理由不備ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○原判決ハ型ヲ製シ砂利及鉛外二品ヲ溶解シテ之ヲ型中ニ注入シ内圍通用二十錢銀貨ヲ偽造シタル事實ヲ説明シタル上ハ其混和セル藥品ヲ一々示サ、ルモ素ヨリ犯罪ノ構成ニ影響ナキヲ以テ外二品ト掲ケ去ルモ以テ理由不備ノ不法アル裁判ナリト言フヲ得ス

上告趣意辯明ハ原院カ第一審判決ノ幾部ヲ變更シタルモ該豫審決定ノ不正アルヲ改メス判決セシハ不法ナリト云フニ在レトモ○第二審裁判所ハ第一審ノ判決ニシテ不法アル場合ハ之ヲ取消シ更ニ判決ヲ爲スヘキモ爲メニ豫審終結決定ヲモ取消スヘキモノニアラス論旨ハ謂レナキ批難ニ過キス

辯護人古田兼三上告擴張趣意ノ要旨ハ原院ハ私書偽造行使ノ所爲ヨリモ詐欺取財ノ罪ヲ重シ

トシテ刑法第三百八十條ノ刑ヲ適用シタレトモ私書偽造行使罪ノ二百十條ノ刑ハ四月以上四年以下ニシテ詐欺取財ノ三百九十條ノ刑ハ二月以上四年以下ナレハ私書偽造行使ノ罪ヲ重シトセサル可カラサルニ原判決茲ニ出サルハ擬律ノ錯誤アル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ

○詐欺取財私書偽造行使ハ罪ハ共ニ輕罪ナルヲ以テ刑法第三百條第三項ニ因リ其所犯情狀重キモハニ從テ處斷スヘキモノナレハ原承審官カ本件詐欺取財ノ罪ヲ以テ所犯情狀重キ者ト認定シ之レニ從テ處斷シタルハ相當ニシテ上告所論ノ如キ擬律錯誤ハ不法アルモノニアラス

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ本件上告ハ之レヲ棄却ス

明治三十一年十二月二十日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事岩野新平立會宣告ス

○委託物費消ノ件

明治三十一年第一一七七號
明治三十一年十二月二十六日宣告

○判決要旨

他人ノ委任ニ依リ入質シタル物品ヲ受出シテ費消シタル所爲ハ委託物費消罪ヲ構成ス

第一審 東京地方裁判所

第二審 東京控訴院

被告人 山内甲松

右甲松ニ對スル委託物費消被告事件ニ付キ明治三十一年十一月二十二日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不當トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタルニ因リ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審理判決スルコト左ノ如シ

上告趣意書及同上告趣意擴張書第三點ハ參考人横山マキニ於テ本件ノ女傭外一點ハ被告人ヨリ贈與ヲ受ケタルニアラスシテ借用シタルモノナル旨ノ陳述ヲ爲シタルニ依レハ假令被告ハ贈與ノ意思ニ出テタリトスルモ當事者間ノ意思互ニ抵觸スルヲ以テ贈與ノ契約ハ未タ成立セサルモノナリ然ルニ原院カ已ニ贈與シタルモノト爲シテ費消罪ニ問擬シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ

○原院ハ其職權ヲ以テ是等事實ノ認定ヲ爲シタルモノナルヲ以テ他ヨリ批難スルヲ得ス

同擴張書第一點ハ委託物費消ノ罪ハ受託者ノ保管中ニ在ル物件ニ對スルニアラサレハ成立スル能ハサルモノニシテ而シテ被告ハ第三者ノ名義ヲ以テ他へ質入スルコトヲ所有者ヨリ依頼ノコトハ終了シタルモノナルヲ以テ其物件ニ付キ毫モ關係アルコトナシ故ニ後日被告カ擅ニ其質物ヲ受出シ之ヲ費消シタリトスルモ委託物費消ノ罪ヲ成立スヘキモノニアラスト云フニ在レトモ

○原院カ認メタル所ハ被告ハ誤ニ山澤要吉ヨリ物品質入ノ委任ヲ受ケタルヲ以テ被告ノ兄横川立太郎名義ヲ以テ其物品ヲ他へ質入シ後該質物受出シハ督促ヲ要吉ヨリ受ケ居ル

入質品ノ受出

際、立太郎ノ發意ニ從ヒ受出シタル貨物ヲ費消シタルモノト爲スニ在レトモ、要旨ニ於テ右貨物受出シハコトヲ被告ニ委任シタルコト明カナルヲ以テ其受出シタル貨物ニ付テハ被告ハ當時更ニ受託者ノ地位ニ立テルモノナルヲ以テ之ヲ費消スルニ於テハ委託物費消ノ罪ヲ構成スルコト論ヲ待タズ、第二點ハ本件ノ犯罪成立ニ付キ他人ニ屬スル物件ヲ費消スル意思アルヲ要スルハ勿論ノコトナルニ原判決ハ單ニ被告カ見立太郎ヨリ貨物ハ已ニ流質ト爲リ居ルヘキニ付キ之ヲ受出シテ發女マキニ與ヘシト述ヘタル意見ニ同意シ遂ニ其事ヲ遂ケタルモノト爲スニ在レハ被告ハ惡意ナキコトハ之ヲ見ルヘキモ果シテ惡意ニ出タリトノコトハ見ルヘカラス然ルニ其惡意アルコトノ明示ヲ爲サスシテ有罪ノ判決ヲ與ヘタルハ不法ナリト云フニ在レトモ

○原判決ハ被告ハ所有者山澤要旨ヨリ貨物受出シノ督促ヲ受ケ居ルニモ拘ラス右論旨ニ揭ケタル立太郎ノ意見ニ同意シ遂ニ其受出シタル貨物ヲ費消シタルモノト爲スニアレハ被告ニ於テ該物件ハ依然要旨ニ屬スルモノナルコトヲ承知シテ之ヲ費消スルノ意見ニ出タルコト判文上明瞭ナルヲ以テ論旨ノ如キ不法ナシトス

右ノ理由ニ依リ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ本件上告ハ之ヲ棄却ス

明治三十一年十二月二十六日大審院第二刑事部公延ニ於テ檢事小宮三保松立會宣告ス

○官吏侮辱ノ件 明治三十一年第一一六九號
明治三十一年十二月二十六日宣告

○判決要旨

官吏侮辱罪ハ必スシモ侮辱スルノ意思アルヲ要セス單ニ侮辱ノ結果ヲ生スルコトヲ豫知スルヲ以テ足ル

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 井上慶吉 辯護人 三好退藏 花井卓藏 長島鷲太郎

右慶吉ニ對スル官吏侮辱被告事件ニ付明治三十一年十一月二十四日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不當トシ原院檢事長波多野敬直ヨリ上告ヲ爲シ本院檢事岩野新平ヨリ附帶上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審理スル處

上告趣意書第一點ハ所爲ノ罪ト爲ラサルヲ理由トシ無罪ヲ言渡ス場合ハ犯罪ノ證據充分ナラサル場合ト其事例ヲ異ニスルヲ以テ有罪ノ場合ト同シク被告ニ如何ナル行爲又ハ不行爲アリタルヤチ明示セサル可カラス原判決ハ本件公訴ノ事實ハ云々ト云フニ在リ仍テ右記事ノ全旨趣ト被告ノ供述トヲ斟酌シ之ヲ審案スルニ右記事ハ云々ト記載シ單ニ公訴ノ趣旨ノミヲ掲ケ直ニ記事自體ニ付說明ヲ爲シタルニ止マリ事實公訴ニ係ル記事アリシヤ否ヤ被告カ其編輯ヲ爲シタルヤ否ヤチ明示セサルカ故ニ原院ニ於テ被告ニ如何ナル行爲又ハ不行爲アリタルモノ

侮辱ノ結果

ト認定シタルヤチ知ルニ由ナク結局裁判ニ理由ヲ付セサル違法ノ判決ナリト云フニ在レトモ
 ○原判決文ニ先ツ公訴事實ニ係ル新聞紙上ノ記事ヲ掲ケ次ニ仍テ右記事ノ全旨趣ト被告ノ供
 述トヲ斟酌シ之ヲ審察スルニ右記事ハ云々ト説明シタルハ原院ニ於テ該記事ヲ以テ被告ノ行
 爲ト認メタルコト明ニシテ即認メタル事實ノ明示アルヲ以テ原判決ハ理由不備ニアラス第二
 點ハ文字ハ普通ノ意義ニ解釋スヘキナ原則トス故ニ特別ノ意義ニ解釋スルニハ必スヤ特種ノ
 事情ナカル可カラス本件「火ノ氣ナキ所ニ烟モ起ルマシ烟ノ起リタルカラニハ多少ノ火氣アル
 ハ勿論ナリ」トノ文字ハ「怪聞トハ右櫻井省三カ二万弗ノ賄賂ヲ造船會社ヨリ受ケ其工事ノ欠陥
 ナ見逃シタリト云フニ在リ」トノ記事ヲ承ケタルモノニシテ烟ハ即怪聞火ノ氣ハ即賄賂ヲ收受
 シ工事ノ欠陥ヲ見逃カシタリト云フニ相當ス是レ普通ノ意義ニシテ即官吏侮辱ノ文字ナリ然
 ルニ原判決ハ特種ノ事情ヲ明示セス火ノ氣云々ノ文字ヲ其特別ノ意義即何等カノ原因アリシ
 モノトノ意義ニ解釋シ其意義汎博ニシテ包含スヘキ事項夥多ナルヲ以テ云々ト云フカ如キ漠
 然タル説明ヲ爲シ直ニ其所爲罪ト爲ラスト斷定シタルハ裁判ニ理由ヲ付セス且ツ解釋ニ關ス
 ル法則ヲ不當ニ適用シタル違法ノ判決ナリ第三點ハ官吏侮辱罪ニ要スル犯意ハ官吏ノ職務ニ
 關スル名譽ヲ毀損スヘキ結果ヲ豫知シタル意思ヲ以テ足ル其趣旨目的ノ善惡如何ハ犯罪構成
 ニ關係ナ有スルモノニ非ス然ルニ原判決ハ「官民ノ注意ヲ喚起シ該事實ノ審査ヲ當局者ニ促シ
 タルニ止マリ名ヲ風聞ニ藉リ」云々ト記載シ恰モ官吏侮辱罪ヲ構成スルニハ名ヲ風聞ニ藉リ官
 吏ヲ害スルノ目的ヲ要シ其目的ノ公益ノ爲メニ爲シタルモノニ在テハ犯罪ヲ構成セサルカ如

ク説明シ其所爲罪ト爲ラスト斷定シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル違法ノ判決ナリト云フニ
 在リ本院檢事附帶上告ノ趣意ハ原院ノ認メタル事實ハ刑法第四百一十一條第二項ニ該當スヘキ
 モノナルニ犯罪ヲ構成セストシテ無罪ヲ言渡タルハ擬律錯誤ノ判決ナリトス但原判決ニハ證
 憑ノ明示ナキヲ以テ破毀ノ上他ノ裁判所ニ移サレンコトヲ望ムト云フニ在リ○因テ審察スル
 ニ侮辱罪ハ成立ニハ必シモ特ニ侮辱スルノ意思アルヲ要セスシテ侮辱ハ結果ヲ生スルコトヲ
 豫知ハルヲ以テ足ルモノハナリ爰ニ原院文ニ摘録シタル報知新聞第七千五百六十號ノ記事ヲ
 閱スルニ其前段ニ於テ新造千歲艦ノ監督官タル造船大監櫻井省三カ二万弗ノ賄賂ヲ造船會社
 ヲリ受ケ其工事ノ欠陥ヲ見逃シタリトノ風聞アルコトヲ記シ次ニ火ノ氣ナキ所ニ烟モ起ルマ
 シ烟ノ起リタルカラニハ多少ノ火氣アルハ勿論ナリ此際我當局者ハ更ニ清廉ノ監督官ニ命シ
 云々トアル等ノ記事ハ右櫻井省三カ職務ニ關シ不正ノ行爲アリトノ意義ニ解釋スヘク即省三
 ハ職務ニ關シ侮辱ヲ受ケタルモノニシテ而シテ該記事カ此侮辱ノ結果ヲ生スルコトハ其行文
 上新聞編輯人タル被告カ豫知セシモノト爲ササル可カラス故ニ被告ニ侮辱罪アルハ勿論ナル
 ニ原院カ被告ニ侮辱ノ意思ナリ又該記事ハ省三ノ職務ニ關スル名譽ヲ毀損シタリト爲スニ足
 ラサルモノトシテ無罪ノ言渡ヲ爲シタルハ擬律錯誤ノ不法タルヲ免カレス尙ホ附帶上告趣意
 後段ニ原判決ハ證據ノ明示ナキヲ以テ云々ト在ルモ原院文ニ仍テ右記事云々トアルハ則該記
 事ヲ以テ被告ニ對スル本件ノ證據ト爲シタルモノナルヲ以テ證據ノ明示ナキモノトセス
 右ノ理由ニ依リ上告趣意書第二第三點附帶上告趣意前段論旨ニ基キ刑事訴訟法第二百八十七

條ニ從ヒ原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ判決スルコト左ノ如シ

井上 慶吉

原判決ニ記載シタル事實ニ依リ刑法第四百十一條第二項第一項ニ照シ被告ヲ重禁錮一月ニ處シ罰金五圓ヲ附加ス差押物件ハ各所有者ニ還付ス

明治三十一年十二月二十六日大審院第二刑事部公延ニ於テ檢事岩野新平立會宣旨ス

○詐欺取財ノ件

明治三十一年第七七四號
明治三十一年十二月二十七日宣旨

○判決要旨

檢事及被告人共ニ全部ノ控訴ヲ爲シタル場合ニ於テ控訴審カ第一審判決ノ事實ヲ變更シタルトキハ檢事及被告人ノ控訴ハ共ニ其理由アリ

第一審 岡山地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人

(田邊長次郎
田邊唯之助)

右兩名詐欺取財被告事件ニ付明治三十一年六月六日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不當トシ被告兩名ハ上告ヲ爲シタリ

相手方原院檢事長林誠一ハ答辯書ヲ差出シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

被告兩名ノ上告趣意ハ孰モ同一ニシテ其第二點ハ原院認定ノ事實ニシテ若シ第一審裁判所カ認定セシ事實ヲ更正シタルモノナリトモ本件ハ檢事及ヒ被告兩名共ニ第一審判決全部ニ對シ控訴ヲ爲シタルモノナレハ原院カ前審判決ヲ廢毀スル上ニ於テハ檢事及ヒ被告ノ控訴ハ共ニ理由アルニ歸着ス蓋シ事實認定ノ更正ハ檢事ノ控訴ヲ待テ始テ然ルニアラスシテ被告人ノ不利益ニ變更セサル限りハ被告人ノミノ控訴ニ基クモ尙ホ罪質等ニ付キ變更スルコトヲ得ルハ裁判官ノ職權ナリ而シテ本件カ被告ノ不利益ニ變更セラレタルハ檢事ノ控訴アルカ爲メノミ要スルニ事實變更ニ付キテハ檢事ノ控訴アルヲ要セサルモノナリ然ルニ原院カ本件ニ於テ檢事ノ控訴ノ理由アリトシ被告ノ控訴ハ理由ナシトシ之レヲ棄却シタルハ不法ナリト云フニアリ○依テ案スルニ凡ソ輕罪ニ在テハ其罪質ニ於テ五ニ輕重アルモノニアラザレハ第二審裁判所ハ刑期及ヒ罪數ニ於テ被告人ノ不利益ニ變更セサル限りハ被告人ノミノ控訴ニ係ルトキト雖モ罪質等ニ付變更スルコトヲ得ヘキモノナルヨリ本件ハ如キ檢事及ヒ被告人ノ控訴ニ係ハル場合ニ於テ原院カ第一審裁判所ニ於テ委託物費消ト認メタル事實ヲ詐欺取財ノ事實ニ變更シタル點ニ付テハ獨リ檢事ノ控訴ハミナラズ被告人ノ控訴モ亦理由アリト論セサルヲ得ス然ルニ原院ハ判決茲ニ出テズ被告人ノ控訴ハ理由ナシトシテ棄却シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタルモノニシテ破毀ヲ免カレサルモノト不但既ニ此點ニ於テ原判決ノ全部ヲ破毀スヘキ

モノト認メタル以上ハ他ノ上告諭旨ニ付返一説明ヲ付スルノ要ナシ
 右ノ理山ナルニ依リ刑事訴訟法第二百八十六條ニ從ヒ原判決全部ヲ破毀シ更ニ審判セシムル
 爲メ木件ヲ廣島控訴院ニ移ス
 明治三十一年十二月二十七日大審院第一刑事部公延ニ於テ檢事古賀廉造立會宣告ス

○税關法違犯ノ件

明治三十一年第九五七號
 明治三十一年十二月二十七日宣告

○判決要旨

甲港ニ於テ他ノ貨物ト共ニ輸入手續ヲ爲スヘキ物品ヲ故ラニ積荷目録ニ記載
 セスシテ乙港ニ廻漕シタル所爲ハ税關規則第十五條ノ法則ニ違背シタルモノ
 トス

(參照) 輸入貨物ヲ陸揚セントスル者ハ其中告書ヲ仕入書ニ添ヘ之ヲ税關ニ差出シ陸
 揚免狀ヲ受ケ其貨物ヲ陸揚シ現品ノ検査ヲ經輸入税目ニ從ヒ納税シ輸入免狀ヲ受ケ
 テ之ヲ引取ルヘシ(税關規則第十五條)

税關規則ニ依リ陸揚免狀ヲ受ケスシテ貨物ヲ船卸シ船積免狀若クハ回漕免狀ヲ受ケ
 スシテ船積シ又ハ輸入免狀ヲ受ケスシテ輸入シタル者ハ其貨物ヲ沒收ス(税關法第
 十條二項)

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 (前) 田音松
 堤辰一郎

右音松外一名ニ對スル税關法違犯被告事件ニ付明治三十一年九月二十一日大阪控訴院ニ於テ
 音渡シタル判決ニ服セス同院檢事長檢事大島貞敏ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二
 百八十三條ノ定式ヲ履行シ審理スルコト左ノ如シ
 上告趣意書ノ一ハ被告音松ハ高知丸ノ船長被告辰一郎ハ同船事務長ニシテ共ニ同船ニ乘組ミ
 明治三十一年六月四日朝鮮釜山港ニ於テ貨物ヲ船積シ同日對馬佐須奈港ニ廻航シ同港ニ於テ
 外航船ノ資格ヲ沿海通航船ニ變更シ長崎税關支署ニ届出テ右貨物ノ輸入手續ヲ爲ス際量目六
 百九十匁五分ノ金塊一個ハ之ヲ船内ノ金庫中ニ藏匿シ以テ輸入手續ヲ爲サスシテ大阪港ニ輸
 入シタルハ税關規則第十一條ノ明文ニ違反シタル事實ニシテ税關法第十條第二項ノ末文又ハ
 輸入免狀ヲ受ケスシテ輸入シタルモノハ其貨物ヲ沒收ストアルニ該當スルヤ辯論ヲ竣タスシ
 テ明白ナルニ當院判決ハ右金塊一個佐須奈港ニ於テ輸入ノ手續ヲ爲サスシテ大阪港ニ輸入シ
 タル前文ノ事實ヲ認メナカラ被告入等ハ同月八日大阪港ニ於テ貨物ヲ船卸セントスル際税關
 監吏安野松太郎ニ咎メラレ金塊ハ未タ船卸シタルニアラサレハ其所爲罪トナラストシ無罪ヲ

言渡シタルハ刑事訴訟法第二百六十八條第二項ニ掲ケル法則ヲ適用セサル不當ノ判決ナリト云フニ在リ。○依テ案スルニ原判決ノ理由ニ明治三十一年六月四日韓國釜山港ニ於テ諸貨物ヲ船積シ同日本邦對馬須奈港ニ廻脱シ同所長崎税關支署ニ届出テ右船積貨物ノ輸入手續ヲ爲ス際其貨物ノ内量目六百九十六匁五分ノ金塊ヲ船内ノ金庫中ニ藏匿シ置キ故ラニ積荷目録ニ記載セスシテ陸揚免狀ヲ受ケス而シテ同港ニ於テ外航船ノ資格ヲ本邦沿海通航船ノ資格ニ改メ云々大阪港ニ廻漕シ云々同港ニ於テ右金塊ヲ密ニ船卸セントシタル事實ハ云々トアレハ右金塊ハ他ノ貨物ト共ニ佐須奈港ニ於テ輸入手續ヲ爲スヘキモノナルヲ故ニ積荷目録ニ記載セスシテ金庫中ニ藏匿シ置キ大阪港ニ廻漕シ同港ニ於テ密ニ船卸セントシタルモノト認メタルコト明カナレハ佐須奈港ニ於テ輸入手續ヲ爲サスシテ金庫中ニ藏匿シ置キタル儘大阪ニ廻漕シタル時既ニ税關規則第十五條ノ規定ニ違背シタルモノナレハ税關法第十條第二項ニ依據シ處分スヘキコト明瞭ナリ然ルニ原判決ハ右違反ノ事實ヲ認メナカラ單ニ大阪港ニ於テ船卸シタル事實ナシトシテ犯罪ヲ構成セストハ理由ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シタルハ本論旨ノ如ク疑律ハ錯誤アル不法ノ判決ニシテ破毀ヲ免カレサルモノトス。○其二ハ原判決中陸揚ノ文字ハ輸入ノ誤リナリ云々ト云フニ在レトモ。○前論旨ニ對スル説明ノ如クナル以上ハ更ニ此點ニ付説明スルノ要ナシ。○其三ハ檢事ハ第一審判決ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲シタルヲ不當トシ有罪ノ控訴シタルモノナルニ原院ニ於テ無罪ヲ言渡シナカラ檢事ノ控訴モ理由アット判決セシハ理由齟齬ナリト云フニ在レトモ。○第一審判決ヲ不當ナリトシテ提起シタル檢事ノ控訴ニ基キ審理ヲ爲シタ

ル末ニ不當ノ罪アリテ第一審判決ヲ取消シタル以上ハ其控訴ヲ理由アリト爲スヘキコト當然ナレハ原判決ハ本論旨ノ如キ不法ノ罪アルコトナシ。右ノ理由ニヨリ刑事訴訟法第二百八十七條ノ規定ニ從ヒ判決スルコト左ノ如シ。原判決疑律ノ部ヲ破毀シ直チニ判決スルコト左ノ如シ。

前田音松
堤 辰一郎

原院ノ認メタル事實ヲ法律ニ照スニ被告等ノ所爲ハ税關規則第十五條税關法第十條第二項ニ依リ金塊六百九十六匁五分ハ之ヲ收没ス。公訴裁判費用ハ被告等ノ負擔トス。明治三十一年十二月二十七日大審院第一刑事部公延ニ於テ檢事古賀廉造立會宣告ス。

○私印盜用等ノ件

明治三十一年第九八四號
明治三十一年十二月二十七日宣告

○判決要旨

公判ニ於テ附帶ノ犯罪ヲ發見シタルトキハ直ニ審理判決スルヲ得ルモノニシ

附帶犯ノ審理

テ其之ヲ審理スルニ付豫審ノ必要アル場合ノ外特殊ノ手續ヲ要スルモノニ非ス

(參照) 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付裁判ヲナスヘカラス但辯論ニ依リ發見シタル附帯ノ犯罪ニ付テハ此限ニ非ス若シ附帯ノ犯罪ニ付豫審ヲ必要ナリトスルトキハ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得(刑事訴訟法第百八十四條)

第一審 安濃津地方裁判所濱田支部 第二審 廣島控訴院

公訴私訴上告人 田中藤太郎

私訴被上告人 中田友之助

右藤太郎カ私印盗用私書偽造行使詐欺取財被告事件ニ付明治三十一年九月五日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル公訴私訴ノ判決ヲ不當トシ被告藤太郎ハ公訴私訴ニ付原院檢察長一瀬勇三郎ハ公訴ニ付上告ヲ爲シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ
原院檢察長上告趣旨ノ要領ハ原院ニ於テ第一審裁判所カ被告ニ於テ詐欺取財ノ犯罪ヲ蔽ハシカ爲メ中田友之助ノ實印ヲ盗用シ同人名義ノ地所建物賣渡代金八百圓ヲ領收シタル旨ノ返證書ヲ偽造行使シタリト認メタル點ニ付該所爲ハ豫審判事カ詐欺取財ヲ爲スニ因テ私書ヲ偽造行使シタル事實ニシテ刑法第三百九十條第二項ニ依ルヘキ實質上ノ一罪ナリト認メ檢察ノ起訴ナキニ拘ハラヌ取調ノ上公判ニ付シ原裁判所ニ於テモ其豫審終結決定ニ因リ公訴ヲ受理審

判シタルモノニシテ附帯ノ犯罪ナリトシ其手續ニ因リ審判シタルモノニアラサルコトハ一件記録ニ徴シ明瞭ナリ然ルニ右ハ詐欺取財ヲ爲スニ因テ犯シタル罪ニアラスシテ詐欺取財ノ罪ヲ免カレンカ爲メニ犯シタル附帯ノ犯罪ナルヲ以テ檢察ノ起訴アルカ又ハ刑事訴訟法第百八十四條ノ規定ニ從ハサレハ審理スルヲ得ザルニ第一審裁判所ハ其手續ニ依ラスシテ公訴ヲ受理シタルモノナルニ付同法第百八十六條ノ規定ニ從ヒ公訴不受理ノ言渡ヲ爲スヘキモノトスト判決シタルモ豫審判事カ本件ノ私印盗用私書偽造罪ヲ審理シタルハ一ニ附帯犯ト認メタルニ因ルモノニシテ且ツ豫審判事ハ附帯犯ニ就テハ檢察ノ起訴ナキモ之ヲ審理スル權能アルモハナレハ第一審裁判所カ之ヲ受理審判シタルハ相當ナリ若シ夫レ假リニ豫審判事ハ檢察ノ起訴ナケレハ附帯犯ヲ審理スル權能ナシトスルモ公判ニ於テハ豫審終結決定書中誤テ起訴以外ノ犯罪ヲ認定シアル場合ト雖モ其起訴以外ノ犯罪ニシテ附帯犯ナラシカ其決定書ノ如何ニ拘ハラヌ自ラ偶然附帯犯アルコトヲ發見セシ場合ト均シク檢察ノ起訴ヲ候タス審理判決スルヲ得ヘシ左レハ第一審裁判所カ該二罪ニ付キ起訴ナクシテ審理シタル亦當然ノ處分ナリト云ハサルヘカラス然ルニ原院カ該二罪ニ付公訴不受理ノ判決ヲ爲シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタルモノナリト云フニアリ
○依テ右後段ノ趣旨ニ付案スルニ凡ソ公判ニ於テ附帯ノ犯罪ヲ發見シタルトキハ豫審終結決定ハ如何ニ拘ハラス刑事訴訟法第百八十四條ノ規定ニ從ヒ檢察ノ起訴ヲ候タス直チニ審理判決スルヲ得ルハミナラズ附帯犯ヲ審理スルニ付豫審ノ必要アル場合ハ外別ニ特殊ノ手續ヲ要スルモノニアラサルヲ以テ其犯罪カ偶々豫審判事ニ於テ誤テ檢察ノ

起訴ナク審理シタルモノハニ係ハルト否トハ敢テ問フ處ニアラス要ハ唯之ヲ審理判決スルニア
 ルノミ故ニ本件ニ付第一審裁判所カ辯論上被告ニ私印盗用私書偽造行使罪アルコトヲ發見シ
 別ニ何等ノ手續ヲ要セス直ニ之ヲ受理判決シタルハ相當ニシテ其犯罪カ偶々豫審判事ニ於テ
 檢事ノ起訴ナク審理シタルモノハニ係ハルト豈モ是唯第一審裁判所ニ於テ附帶犯罪發見ニ付顯
 著ナル端緒タルニ止マリ公訴ノ當否ニ何等ノ關係ヲ及ホサバハルモノトス然ルニ原院ニ於テ第
 一審裁判所カ被告ノ私印盗用私書偽造行使事件ヲ受理判決シタルナ不法トシ之ヲ取消シ更ニ
 該二罪ノ公訴ハ之ヲ受理セスト判決シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタルモノニシテ破毀ヲ免カ
 レサルモノトス但シ既ニ此點ニ於テ原判決ノ全部ヲ破毀スヘキモノト認メタル上ハ他ノ上告
 論旨ニ對シ返一説明ヲ付スルノ要ナシ

私訴ニ付上告趣意ノ要旨ハ原院ノ私訴判決ハ公訴判決ノ理由ニ基キタルモノナルニヨリ公訴
 判決ニシテ破毀セラルヘキモノナル以上ハ私訴判決モ亦破毀セラルヘキモノナリト云フニア
 リ○依テ原院ノ私訴判決ヲ見ルニ上告所論ノ如ク全ク公訴ノ判決ニ基キ言渡ヲ爲シアルニロ
 ヲ前段公訴上告ニ付説明スル如ク既ニ公訴判決ヲ破毀スル以上ハ其理由ニ基キ言渡シタル私
 訴判決モ亦破毀ヲ免カレサルモノトス
 右ノ理由ナルニ依リ刑事訴訟法第二百八十六條ニ從ヒ公訴私訴ニ關スル原判決ヲ破毀シ更ニ
 審判セシムル爲メ本件ヲ大阪控訴院ニ移ス
 明治三十一年十二月二十七日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事古賀廉造立會宣告ス

○大審院刑事部裁判長及部員氏名表

第一刑事部

裁判長

部長 判事 原田種成

部員

判事 小松弘隆
 判事 永井岩之丞
 判事 川目亨一
 判事 伊藤佛治
 判事 井原師義
 判事 小野衛門太

本部ノ所管

大阪控訴院

名古屋控訴院

判事氏名表

宮城控訴院
廣島控訴院

本部ノ開廷

火曜日

金曜日

第二刑事部

裁判長

部長 判事 長谷川 喬

部員

判事 龜山義貞
 判事 岩田武儀
 判事 木下哲三郎
 判事 柳田直平
 判事 津村 董
 判事 鶴 丈一郎

御事氏名表

本部ノ所管

東京控訴院

長崎控訴院

函館控訴院

本部ノ開廷

月曜日

木曜日

明治三十二年一月卅一日印刷
明治三十二年二月七日發行

定價金五拾錢

版權所有

大審院

東京市神田區錦町貳丁目貳番地

發行者

東京法學院

東京市麴町區內幸町壹丁目三番地

代表者

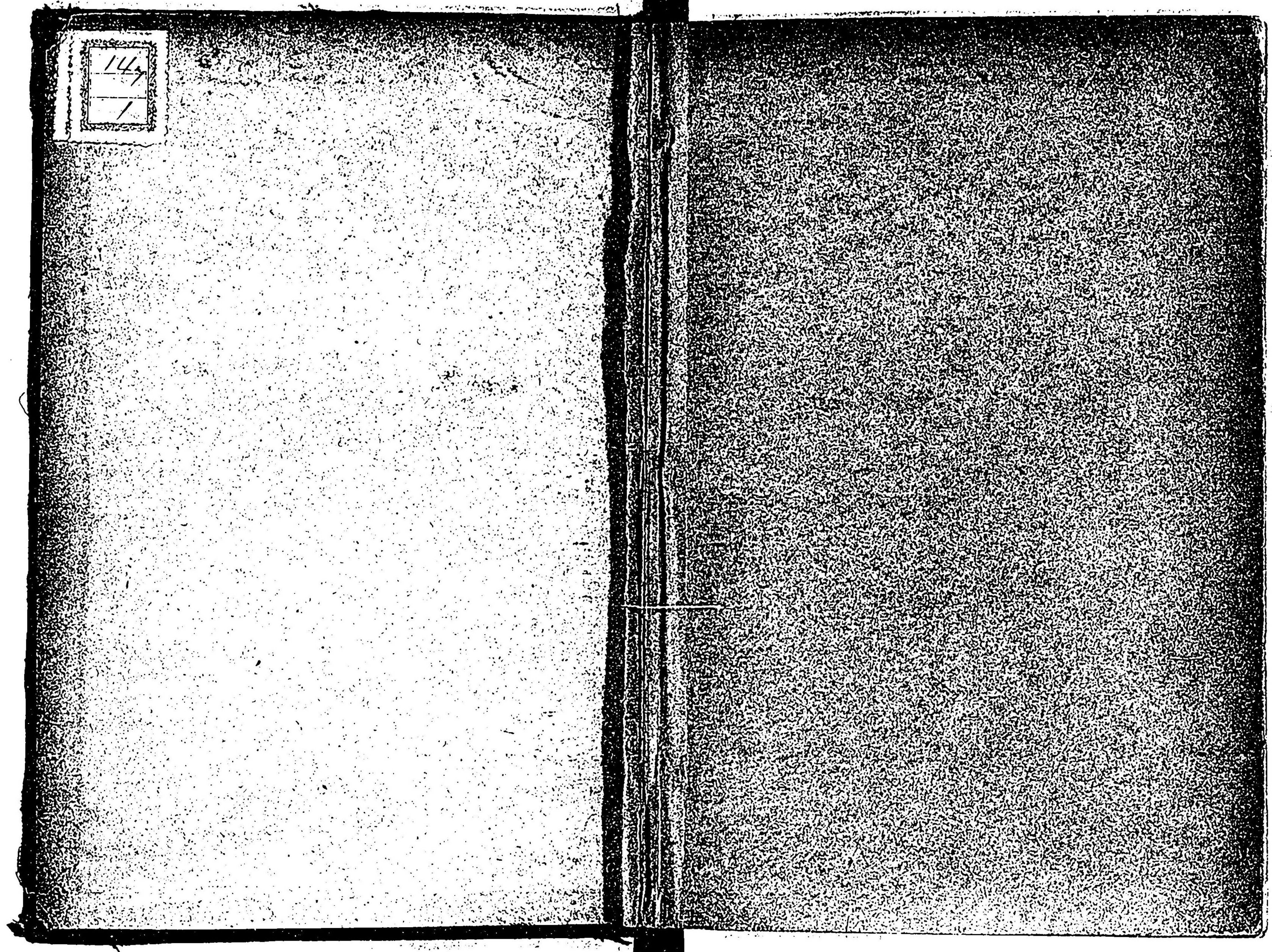
菊池武夫

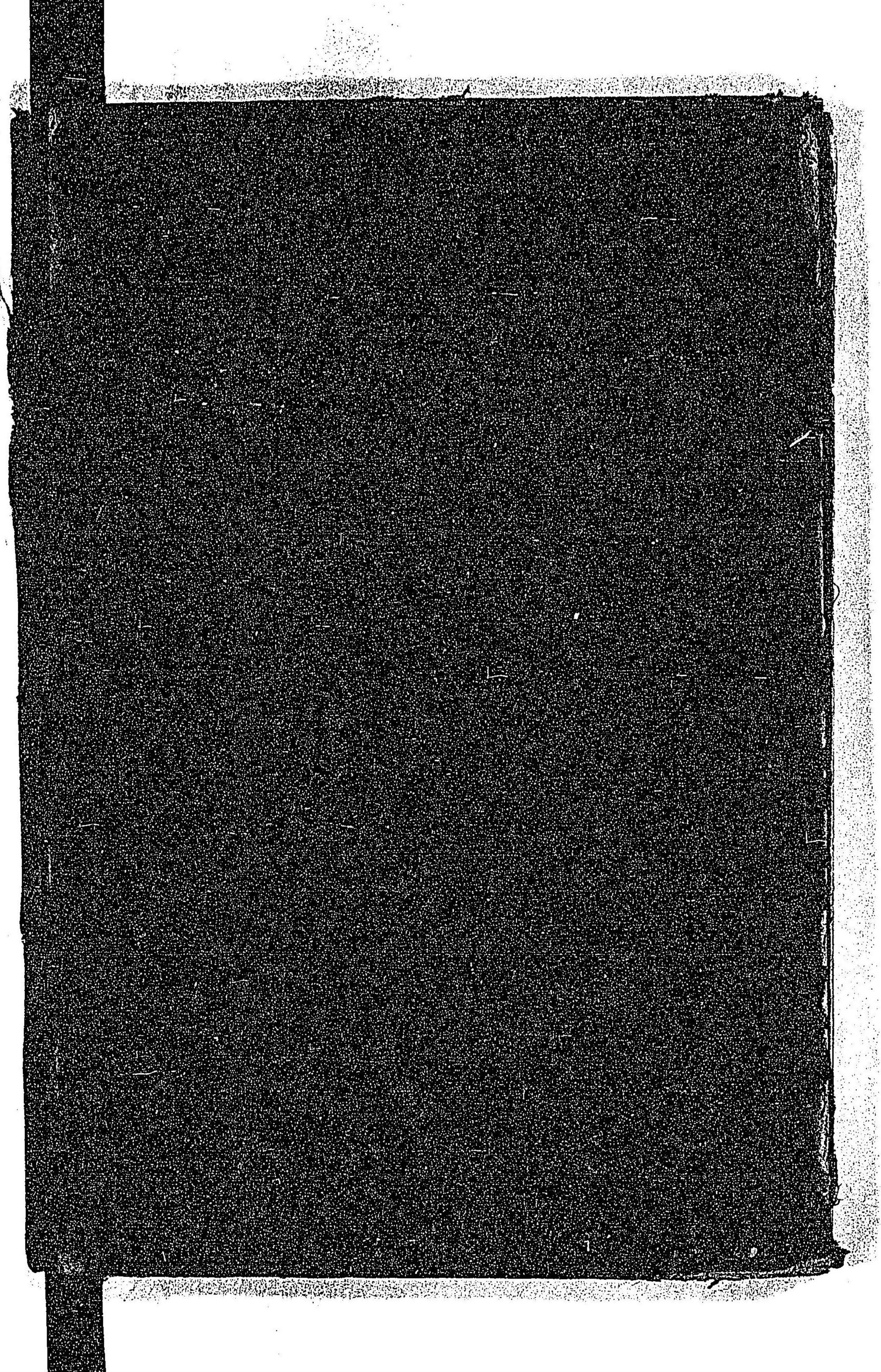
東京市麴町區下六番町十七番地

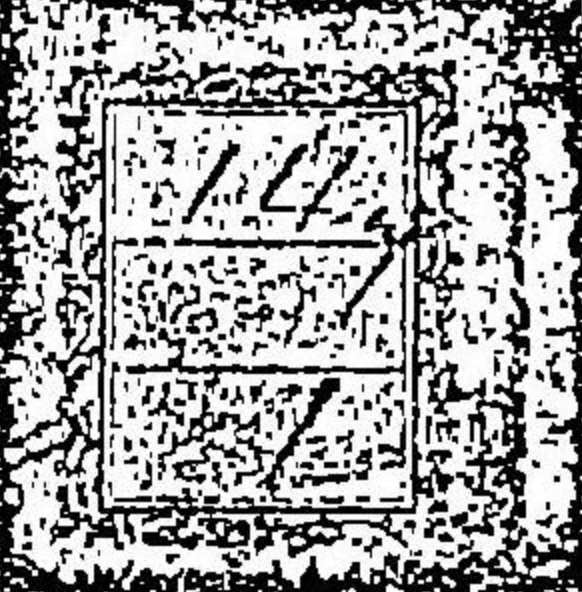
同勞舍

印刷者

松澤 玪三







禁電子式複写

